

F83-D83-7aウ

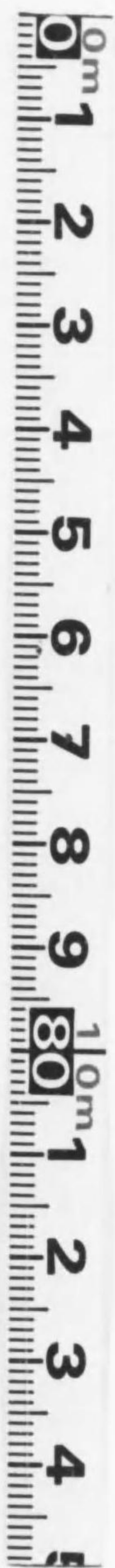


1200500765290

F83

D88.

7a(1)



始



24.10.8

25

F83

D88-~~書~~

79(1)

БРАТЯ КАРАМАЗОВЫ

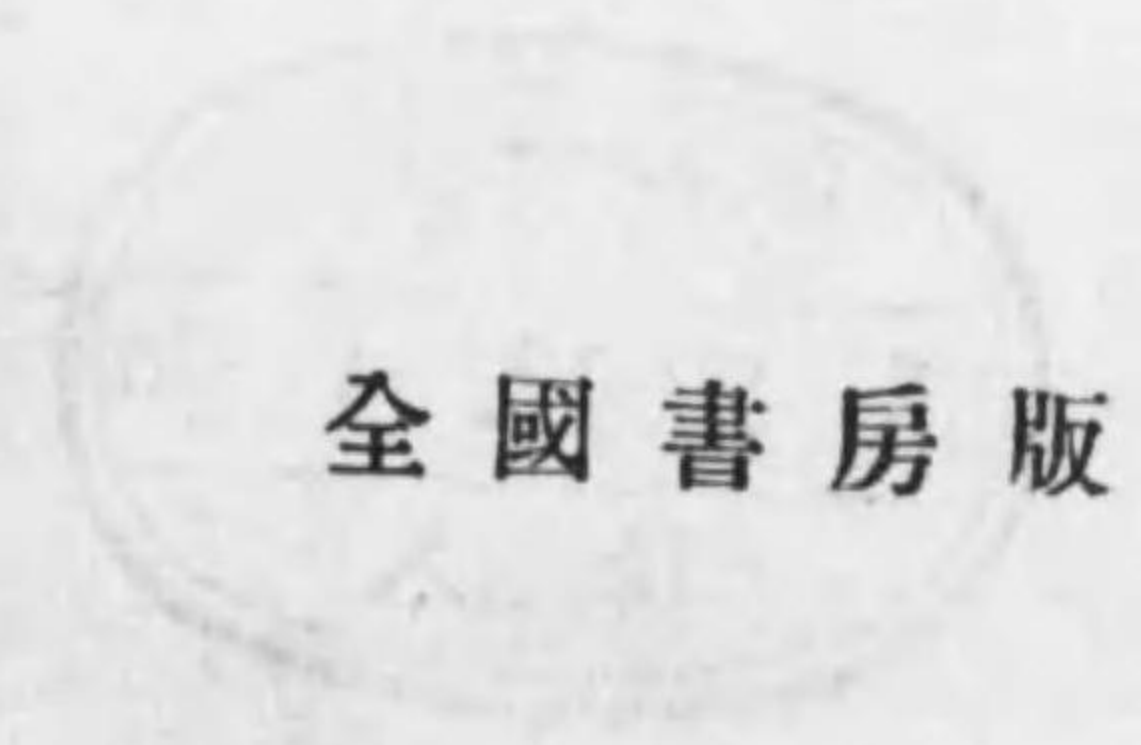
Ф. М. Достоевскаго.



カマズオフの兄弟

上卷

ドストイェフスキイ作
中山省三郎譯



全国書房版

カラマゾフの兄弟

上巻

第一篇 ある家の歴史

シンセキ

シンセキの歴史

1 フォードル・バヴロキツチ・カラマゾフ……………八

2 長男は除け者に……………四

3 再婚と腹ちがひ……………元

4 三男アリョーシャ……………三

5 長老たち……………四

第二篇 場違ひな集り

1 修道院に着く……………五

2 老いたる道化……………六

3 信心の深い女たち……………金

フォードル・バヴロキツチ・カラマゾフ

ドミトリイ

アレクセイ

アリョーシャ

長老たち



4	信心の薄い婦人……………	一九
5	アーメン、アーメン……………	二四
6	何のためにこんな人間が生きてゐるのか！……………	二九
7	野心家の神學生……………	一四
8	醜態……………	一四

第三篇 淫蕩な人たち

1	従僕の部屋にて……………	一八〇
2	リザエータ・スメルヂャシチャ……………	一八九
3	熱烈なる心の懺悔——詩……………	一九一
4	熱烈なる心の懺悔——逸話……………	二〇四
5	熱烈なる心の懺悔『眞つ逆様』……………	二二六
6	スメルヂャコフ……………	二四四
7	論争……………	二五四
8	コニャクを飲みながら……………	二六四

9	淫蕩な人たち……………	二九
10	女二人が……………	一五〇
11	更に一つの亡びたる名譽……………	三三三

第四篇 破裂

1	フェラポント長老……………	三九
2	父のもとにて……………	三四八
3	小學生の仲間に……………	三五七
4	ホフラーコワ家にて……………	三五六
5	客間に於ける破裂……………	三七九
6	小屋に於ける破裂……………	四〇二
7	清らかなる外氣のうちに……………	四二八

第五篇 Pro et contra

1	婚約……………	四〇〇
---	---------	-----

2	ギタアをもてるスメルチャコフ……………	四六三
3	兄弟相識る……………	四六六
4	謀 反……………	四九四
5	大審問官……………	五二五
6	未ださほどに明らかならず……………	五三三
7	『賢い人と話す興味』……………	五五二

カラマゾフの兄弟

上

誠にまことに汝ちに告ぐ、一粒の麥、地に落ちて死なずば、
唯一つにて在りなん、もし死なば、多くの果を結ぶべし。

ヨハネ傳第十二章第二十四節



ドストイェフスカヤにおくる

作者より

この物語の主人公アレクセイ・フォードロキッチ・カラマゾフの傳記にとりかかると當つて、自分は一種の懷疑に陥つてゐる。すなはち、自分は、このアレクセイ・フォードロキッチを主人公と呼んではゐるが、しかし彼が決して偉大な人物でないことは、自分でもよく承知してゐる。従つて、『アレクセイ・フォードロキッチをこの物語の主人公に選ばれたのは、何か彼に卓越したところがあつたことなのか？ 一體この男が、どんなことを成し遂げたといふのか？ 何によつて、誰に知られてゐるのか？ いかなる理由によつて、われわれ讀者は、この人間の生涯の事實の研究に時間を費やさなければならぬのか？』といった類ひの質問を受けるにきまつてゐることは、今のうちからよく分かつてゐる。

この最後の質問は最も致命的なものである。それに對しては、ただ、『御自分でこの小説をお讀みになられたら、おそらく納得なさるであらう』としか答へられないからである。ところが、この小説を一通り讀んでも、なほ且つ納得がゆかず、わがアレクセイ・フォードロキッチの注目

すべき點を認めることが出来ないといはれた曉には、どうしたものか？ そんなことを言ふのも、實はまことに残念ながら、今からそれが見え透いてゐるからである。作者にとつては、確かに注目すべき人物なのであるが、果してこれを讀者に立證することが出来るだらうか、それが甚だ覺束ない。問題は、彼もおそらく活動家なのであらうが、それも極めて曖昧で、掴みどころのない活動家だといふところにある。尤も、今のやうな時世に、人間に明瞭さを要求するとしたら、それこそ要求する方がかしいのかも知れぬ。ただ一つ、どうやら確實らしいのは、この男が一風變つた、むしろ畸人に近い人物だといふことである。しかし、偏屈とか奇癖とかいふものは、個の特殊性を統一して、全般的な亂雜さのうちに或る普遍的な意義を發見する能力を、與へるといふよりは、むしろ傷つける場合が多い。畸人といふものは、大抵の場合に、特殊で格別なものである。さうではないだらうか？

乃で、若しも讀者がこの最後の主張に賛成なさらずに、『さうではない』とか、『必らずしもさうではない』と答へられるとすれば、自分はむしろわが主人公アレクセイ・フォードロキッチの價値について大いに意を強うする次第である。といふのは、畸人は『必らずしも』特殊なものでも、格別なものでもないばかりか、かへつて、どうかすると彼が完全無缺の心髓を内にもつてゐるかも知れず、その他の同時代の人たちは——悉く、何かの風の吹きまはしで、一時的にこの畸人から引き離されたのだ、といったやうな場合がよくあるからである……。

それにしても、自分は、こんな、實に味氣ない、雲をつかむやうな説明に憂身をやつすことなく、前口上などは一切ぬきにして、あつさりと本文に取りかかつてもよかつたであらう。お氣にさへ召せば、通讀していただける筈である。ところが、困つたことには、傳記は一つなのに、小説は二つになつてゐる。しかも、重要な小説は第二部になつてゐる——これはわが主人公のすでに現代における活動である。すなはち、現に移りつつある現在の今の活動なのである。第一の小説は今を去る十三年の前にあつたことで、これは殆んど小説などといふものではなくて、單にわが主人公の青年時代の初期の一刹那のことに過ぎない。さうかといつて、この初めの小説を抜きにすることは出来ない。そんなことをすれば、第二の小説の中でいろんなことが分からなくなつてしまふからである。しかも、さうすれば自分の最初の困惑は一そう紛糾して来る。すでにこの傳記者たる自分自身からして、こんなに控へ目で、つかみどころのない主人公には、一つの小説でも餘計なくらゐだらうと考へてゐるのに、わざわざ二つにしたなら、一體どんなことになるであらう。それにまた、自分のこの不適なやり口を、どうして説明したらよいであらう？

自分はこの問題の解決に行き悩んだあげく、つひに、全く解決をつけずに行かうと決心した。もとより炯眼な讀者はすでに、抑々の最初から私がそんなことをいひさうだつたと、早くも見抜いてしまつて、ただ、——何のために、無暗に役にも立たない文句を並べて、貴重な時間を浪費するのかと、私に對して腹を立てられたであらう。しかし、これに對しては、はつきりとかうお

答へしよう。すなはち自分が役にも立たない文句を並べて、貴重な時間を浪費したのは、第一には儀禮のためであり、第二には、『何はともあれ、豫め何か先手を打つておかう』といふ、するい考へに由るのであると。

尤も、自分は、この小説が、『本質的には完全な一體でありながら』、おのづからにして二つの物語に分かれたことを喜んでさへもゐるのである。讀者が最初の物語を通讀された以上、第二の物語に取りかかる價值があるかないかは、既に自ら決定されるであらう。いふまでもなく、誰ひとり、何らの拘束を受けてゐる譯ではないので、最初の物語の二頁くらゐのところから、もう二度と開けて見ないつもりで、この本を抛り出して、一かう差し支へはないのである。しかし、公平な判断を誤るまいとして、是非とも最後まで讀んでしまはうといふやうなデリケートな讀者もあるのではないか。例へば、露西亞のあらゆる批評家諸君がそれである。かやうな人たちに對しては、何といつても氣が樂である。つまり、彼らがどんなに精密で良心的であらうとも、やはりこの小説の第一の挿話の邊で本を投げ出すのに最も正當な口實を提供しておく譯である。さあ、これで序文は種ぎれた。自分はこれが餘計なものであるといふことに全く同感ではあるが、折角もう書いたことでもあるから、これはこのままにしておかう。

さて、いよいよ本文にとりかからう。

第一篇

ある家の歴史

I

フォードル・バーヴロキッチ・カラマゾフ

アレクセイ・フォードロキッチ・カラマゾフは、この郡の地主フォードル・バーヴロキッチ・カラマゾフの三男で、父のフォードルは、今からちやうど十三年前に悲劇的な陰惨な最後を遂げたために、その頃（いや、今でもやはりこちらでは時をり噂にのぼる）非常に評判の高かつた人物であるが、この事件についてはいづれ然るべきところにおいてお話しすることとしよう。ここでは單にこの『地主』が（當地では彼のことをかう呼んでゐたが、その實、彼は生涯ほとんど自分の持村で暮らしたことがなかつた）かなりちよいちよい見受けるには見受けるが、一風變つた型の人間であつた、といふだけにとどめておかう。つまり、やくざで放埒なばかりではなく、それと同時に譯の分からない人間のタイプ——尤

も、同じ譯の分からない連中の中でも、自分の財産に關する細々した事務を、巧みに處理することが出来る、しかも、それだけが身上かと思はれるやうな類ひの人間であつた。例へば、フォードル・バーヴロキッチは殆んど無一物で世間へ出て、地主とはいつても極めてささやかなもので、よその家へ行つて食事をしたり、居候に轉がりこむことばかり狙つてゐたが、死んだ時には現金で十萬留も遺してゐたことが分かつた。それなのに、彼は依然として、一生涯を、郡内きつての最も分からずやの狂氣じみない。かへつて、かういふ狂氣じみた人間の大多數は、かなり利口で狡猾である、——つまり、譯が分からないのである。しかも、そこには何となく獨特な國民的なところさへも窺はれる。

彼は結婚して、三人の子を擧げた。——長男のドミトリーは先妻、次の二人、すなはちイワンとアレクセイとは後妻の腹から生れた。フォードルの先妻は、やはりこの郡の地主でミウソフといふ、かなり裕福で名門の貴族の出であつた。持參金つきで、おまけに美しく、その上てきはきして聰明な娘——かういつた類ひの娘は現代のわが國では一向めづらしくないが、そろそろ前世紀においても、現はれかかつてゐた——が、あんな取るにも足らない『やくざ者』——その頃、誰もがさう呼んでゐた——とどうして結婚することが出来たのか、それについてはあまり詳しく説明しないことにする。自分はまだ前世紀の『ロマンチックな』時代に生れた一人の娘を知つてゐた。この娘は何年かの間、一人の紳士に謎めいた戀をしてゐたが、この相手と泰平無事にいつ何ときでも結婚することが出来るのに、結局どうにもならないやうな障礙を勝手に考へ出して、嵐の夜に、斷崖のやうな高い岸から、かなり深い激流

に身を投じて死んでしまった。それといふのも全く自分の氣まぐれによることで、ひたすらシエトクスピアのオフェリヤにあやかりたいためであつた。それで、若し彼女がすつと以前から目をつけて、惚れこんでゐたこの斷崖が、それほど繪のやうに美しくなくて、その代りに平凡な低い岸でもあつたならば、恐らく、こんな自殺などといふ沙汰は全く起こらなかつたであらう。これはまぎれもない實話であるが、最近二百年なり三百年の間に、このやうな、乃至はこれと類を同じうする事件は、わが露西亞の生活において、少からず起こつたものと考へなければならぬ。

これと同様にアデライダ・ミウソフの行動は、疑ひもなく他人の思想の反映であり、囚はれた思想に刺戟されたものであつた。事によると、彼女は女性の獨立を宣言し、社會の約束や、親戚家族の壓制に反抗して進みたかつたのかも知れない。また、御丁寧にも空想のおかげで、彼女は、フョードル・パーヴロキッチが居候の身分でこそあれ、向上の途上にある過渡期における、最も勇敢にして最も皮肉な人間の一人である、たとひ一瞬間だけでも、思ひこんでしまつたのであらう。その實、相手は性根のよくない道化者に過ぎなかつた。なほその上に痛快なのは、墮落といふ非常手段を取つたことで、これが又、すつかりアデライダ・イワーノヴナの心を惹きつけてしまつたのである。フョードル・パーヴロキッチに見れば、自分の社會的地位からいつて、このくらゐの際どい藝當はこちらから進んでやりたいくらいであつた。といふのは、手段などは問題でなく、ただただ出世の^{いざな}緒を見つきたい一心だつたからである。名門に取り入つて、持參金をせしめるといふことは、極めて誘惑的なことであつた。相互の愛情などといふものに至つては、女の方はもとより、男の方にも、アデライダ・イ

ワーノヴナの美貌をもつてしても、なほ全然なかつたやうである。かやうな譯で、ほんのちよつとでも向ふが色氣を見せると、相手がどんな女であらうとも、直ぐにしつこく附きまとはすにはおかない淫蕩この上もない男で一生を通したフョードル・パーヴロキッチにとつては、これこそ一世一代の、恐らくは唯一の偶然なことであつたらう。それにしても、この女ばかりは情慾の點からいつて、彼に何らの特別な感銘を與へなかつたのである。

アデライダ・イワーノヴナは墮落の直後に、自分が良人を輕蔑してゐるのみで、それ以上には何の感情ももつてゐないことを立ちどころに悟つてしまつた。かくの如くして、結婚の結末は非常な速さをもつて曝露された。實家側がむしろ、かなり早目にこの事件にあきらめをつけて、家出をした娘に持參金を分けてやつたのにも拘はらず、夫婦の間には極めて亂脈な生活と、絶え間のないいざこざが始まつた。これは今なほ世間に知られてゐることであるが、フョードル・パーヴロキッチは妻が金を受け取るや否や、さつそく二万五千留からの金をすつかり捲き上げてしまつた。従つて、彼女にとつては、これだけの大金が、あとかたもなく消えてしまつた譯であるが、世間の人の噂によると、その際にも新妻の方が良人よりも比べものにならないほど高邁な態度を示したといふ。やがて彼は、やはり彼女の持參金の中にはいつてゐた小さな村と、かなり立派な町の家をも、何かそれ相當の證書を作つて、自分の名義に書き換へようと、ながいこと一生懸命に骨を折つてゐたが、絶え間なしに厚かましいおねだりや哀願をして、妻の心にはは、輕蔑と嫌惡の念とを喚び起こし、女の方を根負けさせて、ただそれだけで、女の手を逃げようと思つてゐたのに相違ない。ところが、運のよかつたことには、アデライダ・イ

ワーノヴァの里方が仲に入つてこの横領を抑へてしまった。夫婦の間によく掴み合ひがあつたといふことは全く周知の話であるが、言ひ傳へによると、打つたのはフォードル・パーヴロキッチではなくて、アデライダ・イワーノヴァの方だといふ。彼女は癪癪の強い、向ふ見ずな、顔の淺黒い、氣短かな女で、並々ならぬ腕力を賦與されてゐた。たうとう、しまひに彼女は、三つになるミーチャをフォードル・パトヴロキッチの手に残して、貧困のために零落しかかつてゐる或る神學校出の教師と手に手をとつて家出をしてしまつた。フォードル・パーヴロキッチは忽ち自分の家へ澤山の女を引き入れて、酒色に耽るやうになつた。また、その合間々々には、殆んど縣下一帯を廻るやうにして、逢ふ人ごとに自分を見すてたアデライダ・イワーノヴァのことを涙ながらに訴へたり、その上、良人として口にするのはあまりにも恥づかしい結婚生活の仔細を臆面もなく喋り立てたりした。何はさておき、かうして衆人の前で、辱しめられた良人といふ滑稽な役割を演じたり、あまつさへ、いろんな潤色まで施して自分がかうむつた凌辱を事こまかに描き出して見せるのが、彼にとつては愉快なばかりか、氣休めにさへなつたものらしい。『なあと、フォードル・パーヴロキッチさん、辛には辛いでせうけれど、位を授かつたことを思へば、満足でせうに。』と口性ない連中が言つたりした。それに多くの人が、彼はときどき道化者の面目を一新して、人の前へ出るのを嬉しがつて、一そう可笑しくするために、故らに自分の滑稽な立場に氣がつかないやうな振りをするのでと餘計なことまで言つてゐた。尤も、それは恐らく、彼にあつては、無邪氣なことであつたかも知れぬ。つひに、彼は出奔した妻の行方を突きとめた。あはれな女は教師とともにペテルブルグへ落ちのびて、そこで極めて奔放自由な解放に感溺してゐたので

あつた。フォードル・パーヴロキッチは、早速あわて出して、自身でペテルブルグへ出かける準備をした。——何のために？ といふことは、もとより、自分でも分からなかつた。彼は實際、そのとき本當に行きかねなかつたのであらうが、しかし、この決心を固めると同時に、彼は元氣をつけるために、出發の前に、あらためて思ひきり一浮かれするのが當然の權利だと考へつた。ところが、正にこの時であつた。妻がペテルブルグで亡くなつたといふ知らせが、彼女の里方へ届いたのである。彼女はどうかして、どこかの屋根裏で急に亡くなつたのであつた。一説にはチフスで亡くなつたともいふが、また一説には餓死したのだとも言はれてゐる。フォードル・パーヴロキッチは酔ひしれてゐるときに妻の訃報に接したが、いきなり往來へ駆け出すと、嬉しさのあまり両手を宙に差しあげながら、『今こそ重荷がおりた』と叫んだといふ。また一説には、厭やな奴ではあつたが、小さな子供のやうに、おいおいと泣くので、見る目にも可哀さうなほどであつた、ともいはれてゐる。それもこれも大いにありさうなことである。つまり、解放されたことを喜ぶと共に、同時に解放してくれた妻を思つて泣いたのであらう。人間といふものは、大抵の場合に、たとへ悪人でさへも、われわれが大凡の見當をつけてゐるよりも遙かに無邪氣で單純なものである。われわれ自身にしてもやはり同じことである。

長男を造ひ立てる

いふまでもなく、かやうな人間が父親として、また養育者として、どんな風であつたかは、容易に想像がつくであらう。父親としての彼は、當然やりさうなことをしたまでであつた。つまり、アデライーダ・イワーノヴナとの間に生まれた自分の子供を、まるきり見棄ててしまつたのである。しかし、それは子供に對する悪意によるものでもなければ、辱しめられた良人としての感情によるものでもなかつた。ただ單に子供のことを全く忘れ果ててゐたからであつた。彼が會ふ人ごとに涙を流し、泣き言を並べてうるさい思ひをさせたり、自分の家を亂行の巢窟にしたりしてゐるうちに、三つになるミーチャの世話を引き受けたのは、この家の忠僕グリゴリイであつた。若しもその頃、この男が面倒を見てやらなかつたら、子供にシャツ一つ變へてやる者もなかつたであらう。それに、子供の母方の縁者も、初めのうちこの子のことは忘れてゐたらしかつた。祖父にあたるミウソフ氏、つまりアデライーダ・イワーノヴナの現在の父は、もうその頃はあの世の人となつて、その未亡人、即ち、ミーチャの祖母も、モスクワへ移つて、そこで重い病氣にかかつて居り、姉妹といふ姉妹はみんなよそへ嫁いでしまつてゐたので、ミ

ーチャはまる一年といふもの、グリゴリイの許で、下男小屋に暮らさなければならなかつた。

それにしても、たとひ父親がミーチャのことを思ひ出したとしても（事實、彼とても、この子の存在を知らずに居る譯には行かなかつた）、自分で、またもとの小屋へ追ひやつてしまつたことであらう。何しろ、子供はやはり放蕩の邪魔になるからである。ところが、偶然にも、アデライーダ・イワーノヴナの従兄で、ピョートル・アレクサンドロキッチ・ミウソフといふ人が巴里から歸つて來た。この人は、そのうち長年、ずつと外國に暮らしたほどで、その頃はまだかなり若かつたが、ミウソフ家の人たちの中でも異色があり、都會的で、外國的な教養があり、後には一生涯、歐羅巴人になりましたばかりか、晩年には四、五十年代によくあつた自由主義者の一人となつたほどであつた。その華やかなりし頃を通じて、彼は同時代における内外の最も進歩的な、多くの自由主義者たちと交渉があり、ブルド^ンやバク^{ニン}をも個人的に知つて居り、遊歴時代の終り頃には、四十八年の巴里二月革命の三日間のことを想ひ出して、自分も市街阻絶戦に参加した一人であると言はぬばかりに仄めかしながら物語るのが大好きであつた。これこそ彼の青年時代における最も愉しい思ひ出の一つであつた。

彼は昔の標準でいふと、千人ほどの農奴に相當する獨立した財産をもつてゐた。彼の立派な領地はこの町を出はづれたところにあつて、この有名な修道院の地所と境を接してゐた。ピョートル・アレクサンドロキッチはまだほんの若い時分に遺産を相続するや否や、よくは分からないが、何か河の漁業權

* 四十年代……一八四〇、五〇年代（譯者註）
* 本ブルド^ン……佛蘭西最初のアナキストのちに露國主義にまつた。一八〇九一六五。（譯者註）
* 本バク^{ニン}……露國主義的アナキズムを代表する露國思想家。一八一四一七六。（譯者註）

とか、森の採伐権とかのことで、この修道院を相手に果しのない訴訟を起こしたものであつた。彼は『僧侶』たちを相手どつて訴訟を起こすのを、公民としてまた教養人としての義務だと心得てゐた。ところで、彼はアデライダ・イワーノヴナのことは、勿論今もなほ記憶にとどめ、嘗ては心を惹かれたこともあつたが、この女の身の上をすつかり聞かされ、またミーチャといふ子供の残つてゐることを知ると、フォードル・パーヴロキッチに對する青年らしい義憤と侮蔑を感じながらも、この事件に關りあふこととなつたのである。そこで、初めてフォードル・パーヴロキッチなる者を識つた。彼はいきなり、子供の養育を引き受けたいと申し立てた。彼がその後、フォードル・パーヴロキッチの特徴を示す好資料だといつて、長いあひだ語り草としたところによれば、彼がミーチャのことを話し出したとき、相手は暫らくの間、一體どんな子供のことが話題にのぼつてゐるのか、さつぱり合點が行かぬといつた風で、自分の家のどこかにそんな小さな息子がゐたのかと、びつくりしたやうな顔つきをして見せたとのことであつた。たとひ、ビョートル・アレクサンドロキッチの話に誇張があるにしても、しかもなほ眞實らしい何ものかがあつたに相違ない。しかし、事實において、フォードル・パーヴロキッチは一生、何かだしぬけに人を驚ろかせるやうな芝居を打つて見せるのが大好きで、それも、時としては、別に何の必要もないどころか、例へば、今の場合のやうに、みすみ自分の損になることさへ厭はないのであつた。尤も、かうした傾向は、ひとりフォードル・パーヴロキッチばかりに限らず、多くの人、時にはかなりに聰明な人にさへも、有りがちなものである。ビョートル・アレクサンドロキッチは熱心に事を運んで、フォードル・パーヴロキッチと共に子供の後見人にまでなつてやつた。といふのは、やはり母親

が亡くなつても小さな持村や、家作や地所などが残つてゐたからである。かうしてミーチャはこの又叔父のところへ引き取られたが、この人は自分の家族といふものがなく、領地からあがる金の受け取り方を後顧の憂ひのないやうに處理すると、すぐにまた、永逗留のために大急ぎで巴里へ立つたので、子供は、この人の又叔母の一人で、モスクワに住んでゐる或る夫人のところに預けられた。ところが、巴里に住み馴れて、ミウソフはこの子供のことを忘れてしまひ、わけでも、彼に思ひもよらなかつたほどの強い感銘を與へて、もはや一生涯忘れることが出来なかつた。あの二月革命の起つた時にはすっかり忘れはてしてしまつた。モスクワの夫人も、そのうちにあの世の人となつて、ミーチャはよそへ片づいてゐる夫人の娘のところへ移つた。やがて後に、彼はもう一度、四度目に自分の巢を變へたらしかつた。が、今はそんなことにまでは觸れないで置くこととしよう。いづれ、このフォードル・パーヴロキッチの長男のことは、まだいろいろと物語らなくてはならないから、今はただこの小説を始めるのに缺くことのできない極めて緊要な消息だけにとどめておかう。

先づ第一に、このドミトリー・フォードロキッチは、フォードル・パーヴロキッチの三人の息子のうち、自分は兎にも角にも、若干の財産を持つてゐるから、丁年に達したら獨立することが出来るといふ確信をもつて成長した唯一の息子であつた。青少年時代は、ぬらりくらりとして過ごしてしまつた。中學校も中途でよして、ある陸軍の學校へ入り、後にコーカサスへ行つて任官したが、決闘をやつたために位を貶され、後にはまた元に復ると、今度はひどく放蕩をして、比較的多額の金を浪費した。フォードル・パーヴロキッチから仕送りを受けるやうになつたのは、丁年に達してからのことで、既にそれま

でにかなりの借金をしてゐたのである。自分の父、フォードル・パーヴロキッチを、初めて見知つたのは、もう丁年に達してのちのことだ、自分の財産のことを相談するために、わざわざこちらへやつて来たときのことであつた。どうやら、その時から、自分の父親が氣に入らなかつたらしく、永遠留もせず、大急ぎで立つてしまつた。ただ、父から幾らかの金を貰つて、これからさき領地からあがる収益を受け取る方法について、少しばかり協議をしただけで、彼は自分の領地の年收額も價格も、フォードル・パーヴロキッチから聞き出せずにはなつた（これは注意しておかなければならない事實である）。フォードル・パーヴロキッチはその時、初めて會つたばかりで、ミーチャが自分の財産について、誇張した不正確な考へを懐いてゐることを見て取つた（これも記憶しておかなければならぬ）。フォードル・パーヴロキッチは特殊な目安をおいてゐたので、このことにすつかり満足した。この若者は、ただ輕はずみで亂暴で、愛慾の強い、氣みじかな放蕩者に過ぎない。だから、時たま少しばかり握らせさへすれば、無論ほんの當座だけのことはあるが、忽ちおとなしくなつてしまふものと斷定した。そこで、これをいいことにして、フォードル・パーヴロキッチは時折ほんの申し譯ばかりの仕送りをしてその場をのがれてゐたが、遂に、それから四年の後、ミーチャは堪忍袋の緒を切らして、きれいさつぱりと父親との交渉を片づけるために、又もやこの町へやつて来た。さて、来て見ると、自分にはまるきり何の財産もないことが分かつて、少からず驚ろいた。今ではどれくらゐあつたか勘定するのも難かしいが、自分の全財産の價格に相當する金は、既に全くフォードル・パーヴロキッチから引き出してしまつて、事によつたら父親に對して、借りさへあるかも知れず、これこれの時に、彼自身の希望によつて取り結ん

だこれこれの約束によつて、彼はもう何ひとつ要求する権利もなくなつてゐるなどといふことが分かつたのであつた。青年は愕然として、嘘ではないか、騙りではないかと疑ひ、殆んど我を忘れて、まるで氣でも違つたやうになつてしまつた。實にこの事情が一大破綻への導火線をなしたのであり、その後彼の叙述こそは自分の第一の序説的小説の主題、といふよりは、その外面的な方面を形づくつてゐるのである。しかし、この小説に取りかかる前に、更にフォードル・パーヴロキッチの次男三男、つまりミーチャの二人の弟についても物語つておかなければならぬ。また、彼がどこから現はれて来たかといふことをも説明しておかなければならぬ。

再婚と腹ちがひ

フォードル・パーヴロキッチは四つになるミーチャを手許から追ひのけてしまふと、間もなく、二度目の結婚をした。この二度目の結婚生活は八年つづいた。その後妻の、やはりかなり若いソフィヤ・イワーノヴナといふ女は、彼が或る猶太人と連れ立つて、或るほんの一寸した請負仕事のために出向いて行つたよその縣から娶つたのである。フォードル・パーヴロキッチは放蕩もし、酒も飲み、亂暴もし

だが、自分の資本の運用は決しておろそかにはしなかつた。勿論、そのやり方は殆んどいつも穢かつたが、自分の商賣にかけてはなかなか巧妙に處理したものであつた。ソフィヤ・イワーノヴナはさる貧しい補祭の娘であつたが、いはけない頃から寄るべない『孤し兒』の一人となつて、有名なヴォーロホフ將軍の未亡人で、彼女にとつては恩人であり、養育者でありながら、それでゐて同時に迫害者でもあつた老婦人の裕福な家に成長した。詳しい話は知らないが、ある時のこと、この氣立の素直な、惡氣のない内氣な養女が、自分で納屋の釘に輪索をかけて、首をくくろうとしたところを下ろされたとかいふことだけは耳にしてゐる。それほど彼女はこの老婆の絶え間のない小言や移り氣に堪へてゆくのが辛かつたのであるが、その實、この老婆は、見たところ、別に意地のわるさうなところもなく、ただ、安逸な生活のために、どうにも我慢のならない強情な人間になつてゐたのであつた。

フォードル・パーヴロキッチが結婚を申し込むと、先方ではいろいろと身許を調べて、すげなく追ひ拂つてしまつた。ところが、彼は、初婚の時と同じやうに、今度もまたこの少女に墮落をすすめた。若しもそのとき、彼のことを、もう少し詳しく聞き込んでゐたならば、恐らく彼女は、どんなことがあつても、彼のところへなど行かなかつたに相違ない。しかし、他縣のことではあるし、ましてや、いつまでも恩人のところにゐる位ならば、いつそのこと川へでも飛び込んだ方がましだらゐに思ひつめてゐる十六や七の小娘に、物の道理のわからう筈はない。哀れな少女はただ恩人を女から男に換へただけであつた。が、今度といふ今度は、フォードル・パーヴロキッチにも總一文とることが出来なかつた。何しろ、將軍夫人がかんかんに怒つて、何一つ呉れなかつたばかりか、二人を呪つてさへゐたからであ

る。尤も、彼も今度は持參金を取らうとは當てにしてゐなかつた。ただ無邪氣な少女の際だつた美しさに迷つただけであつた。何よりもその無邪氣な容姿が、これまで猥褻な女の色香にのみなじんで、荒みきつてゐた女たらしの心を打つたのである。

『あの無邪氣な眼が、ちやうど、剃刀の刃のやうに、おれの心をひやつとさせたのだ。』と、彼は後になつて、例のいやらしい、忍び笑ひをしながら、よく言ひ言ひしたものである。尤も、女たらしにとつては、これも恐らくは、單なる肉慾的なショックであつたかも知れぬ。フォードル・パーヴロキッチは、何の備けにもならなかつたこの妻に對しては何の遠慮會釋もしなかつた。それに、彼女が良人に對して、いはば『罪でもあるやうな』風でゐるのをいいことにして、——また、殆んど自分が『輪索にかかる』ところを救つてやつたやうな立場にゐるのにつけ込んで、更にまた生れつき非常に素直で内氣なのにつけ込んで、彼は夫婦間の極めて普通な禮儀さへも、睨みにじつて顧みなかつた。妻がちやんと控へてゐる家の中へ、性のわるい女どもが乗りこんで来て、亂痴氣さわぎをやることもあつた。ここに、その頃の際立つたこととして紹介しておきたいのは、あの陰氣で、愚かしく、頑固で、理窟つぽい下男のグリゴリイが前の夫人アデライダ・イワーノヴナを憎んでゐたのに、今度は新しい奥様の味方になつて、殆んど下男にはあるまじき態度で、フォードル・パーヴロキッチと喧嘩までして、彼女を庇つてゐたことである。或る時などは、家へ集つて亂痴氣さわぎをしてゐる連つ葉な女どもを、腕づくで一人残らず追ひ拂つたほどであつた。その後、子供の頃から絶えず怯えてばかりゐたこの不合せな若い女は、一種の婦人神經病にかかつた。それは田舎の百姓女などに實によく見られる病氣で、この病氣にかかつ

た女は『憑かれた女』と呼ばれてゐた。恐ろしいヒステリーの發作を伴ふこの病氣のために、病人は時として理性をさへ失ふことがあつた。とはいへ、彼女はフォードル・パーヴロキッチとの間に、イワンとアレクセイの二人の子をまうけた。上の方は結婚の年に、下の方は三年たつてからであつた。彼女が亡くなつたとき、アレクセイは四つになつてゐたが、彼は、不思議なことには、一生を通じて、もとより、夢のやうなものではあつたが、よく母親のことを覚えてゐた。母が亡くなつてから二人の子供は、長男のミーチ、の場合と殆んどそっくりそのままの運命に陥つた。すなはち、二人は父親からすつかり忘れられ、見すてられて、やはり同じグリゴリーの手にかかつて、下男小屋へ引き取られたのであつた。二人の母の恩人であり、育ての親であつた強情ものの將軍夫人が彼らを初めて見たのも、やはり、この下男小屋であつた。夫人はまだ生きてゐたが、八年のあひだ、つねに自分の受けた侮辱を忘れることが出来なかつた。彼女はこの八年のあひだ、『ソフィヤ』がどんな暮らしをしてゐるか、それとなく、極めて正確な消息を手に入れて、彼女が病氣をしてゐることや、いかばかり醜い場面の中に暮らしてゐるかを耳にすると、一度ならず、二度も三度も、口に出して居候の女たちに向かつてささやいたものであつた、『それがあれには當り前なのだよ。神様があれの恩知らずな仕打に罰をお當てなすつたのだ。』

ソフィヤ・イワノヴナが亡くなつてちやうど三ヶ月目に、不意に、將軍夫人は自らこの町に姿を現はして、まつすぐにフォードル・パーヴロキッチの家へ乗りこんだ。夫人がこの町にゐたのはやつと半時間ほどであつたが、彼女は多くのことを成しとげた。それは日の暮れ方のことであつた。彼女がこの八年といふもの絶えて逢はなかつたフォードル・パーヴロキッチは酔ひしれて夫人の前に出た。する

と、夫人は何一つ物をいはずに、彼の顔を見るなり、効き目のある、音のいい頬打ちを二つばかり喰はしておいて、髪の毛をつかむと、三度ばかり、上から下へ引きむしつた。それから、口もきかないで、さつさと二人の子供のゐる下男小屋へおもむいた。彼らが湯も使つてゐないうへに、よごれきつたシャツを着てゐるのを目で見ると、いきなり夫人はまたグリゴリーに頬打ちを喰はして、子供を二人とも自分の家へ連れてゆくと宣言した。そして、二人を着のみ着のままで膝かけの毛布にくるんで、馬車に乗せて自分の町へと連れて歸つた。グリゴリーは忠實な奴隷のやうに、この頬打ちをも堪へ忍んで、言葉一つかへさずに、老夫婦を馬車まで見送つたとき、恭々しく最敬禮をしながら、仔細らしく、『神様が孤し兒たちに代つてあなた様にお禮をして下さりませう。』と挨拶した。將軍夫人は馬車が動き出すと、『それにしてもやはりお前が剛毅なのだよ！』と叫んだ。

フォードル・パーヴロキッチはこの前後の事情を考へて見て、なかなか結構なことだと思つたので、將軍夫人の手もとで子供を養育する件について、後に正式に承諾を與へたときにも、ただの一目目にさへも異議を申し立てなかつた。ところで、例の頬をなぐられた件については、自分から出かけて町ぢゆぐに振れまはつたものであつた。

やがて、この將軍夫人も程なくこの世の人ではなくなつた。が、二人の子供にそれぞれ千留づつ與へると遺言した。二人の教育費として、この金額を必らず二人のために使用すること、但し二人が丁年に達するまでは充分に足りるやうに使ふこと。即ち、かやうな子供には、これだけの贈り物にても充分すぎるゆゑに。尤も、何人たりとも、篤志の方は、隨意に御自分の財布の紐を解かれること一向差し支

へこれ無きこと』云々。自分はこの遺言状を読みはしなかつたが、何でもこんな風に妙な、實に獨特な書き方がしてあつたといふ話である。老夫人の主なる遺産相続人はエフイム・ペトロキッチ・ボレーノフといふその縣の貴族團長で、高廉な人であつた。フォードル・パーヴロキッチと手紙で交渉をして見ると、この男からはとても實子の養育費を引き出せないことが分かつたので（尤も、相手は決して明らかさまには斷わりはしなかつたが、いつもこんな場合には長々と一寸のがれを言つたり、時には泣き言さへも並べるのであつた）、ボレーノフは親身になつて孤し兒の面倒を見ることにした。中でも、弟のアレクセイを殊さらに可愛がつたので、アレクセイは長いあひだその家の家族として大きくなつたといへる。私は最初からこのことに注目されんことを讀者にお願ひする。若し若者たちが養育と學問の點で、生涯を通じて、誰かに負ふところがあつたとすれば、それはすなはち、この、稀れに見る高潔な、人情のあついエフイム・ペトロキッチに對してであつた。彼は將軍夫人から遺された二千留の金を、子供らのためにそつくり保管して來たので、二人が丁年に達しようとする頃には利子がつもりつもつて、それぞれ二倍からになつてゐた。彼は自分の金で二人を養育したのであるが、いふまでもなく、それは一人あたり千留よりはすつと多くかかつてゐた。彼らの青少年時代の細々した話にはいることは暫らく見合はせて、私はただ重要な點だけを述べておくことにしよう。それにしても、兄のイワンについては、彼が長ずるに従つて決して臆病な譯ではないが、何となく氣むづかしい、引つこみ思案の少年になつて、十くらゐの頃から自分たち兄弟はやはり他人の家で、他人のおなさけで育つてゐるのだ、それに自分たちの父は、口にするのも恥かしいくらゐの人間だなどといふことを、洞察してゐたらしいといふことだ

けは言つておかう。この少年はかなり早くから、殆んど幼年の頃から（少くとも、傳ふるところによれば）、學問に對する一種の並々ならぬ華々しい能力を現はし始めた。正確なことは知らないが、やつと十三くらゐの年に彼はエフイム・ペトロキッチの家庭を離れて、モスクワの中學校に入學し、エフイム・ペトロキッチの幼な友達で、或る經驗のある、當時の有名な教育家の寄宿舎へはいつたのであつた。後にイワン自身が話したところによると、これは、天才のある子供は天才のある教育家のもとで教育されねばならぬ、といふ思想に心酔してゐたエフイム・ペトロキッチの、『善事に對する熱情から』起こつたことである。尤も、この青年が中學を卒へて大學へ進んだ頃には、エフイム・ペトロキッチも、天才的な教育者も、既にあの世の人となつてゐた。エフイム・ペトロキッチの處置が宜しきを得なかつたばかりに、あの強情者の將軍夫人から讓られて、今では利に利がつもつて千留から二千留にも殖えた、自分の子供の時分からの金が、この國では何とも仕様のない色んな形式や、手續の澁滞のお蔭で容易に受け取ることが出來ず、そのために、彼は大學における最初の二年間といふもの、かなりひどい苦勞をした。彼はこの間ちゆう、自活の途を立てながら、同時に勉強をしなければならなかつた。ところが、その頃の彼が、父と手紙のやりとりをして見ようとさへも考へなかつたといふことは注意しておく必要がある。恐らく、傲慢な氣持、父に對する輕蔑の念に由るものであらう、それとも、父からほんの僅かでも眞面目な援助を受ける望みのないことを教へる冷靜な、はつきりした判斷力によつたのかも知れぬ。それは兎も角として、青年は少しもまごつかずに、やつとのことで、仕事にありついた。最初のうちは一回二十哥の出張教授をやつてゐたが、後には、あちこちの新聞の編輯者のところを

駆けずり廻つて、『目撃者』といふ署名のもとに、市井の出来事についての十行記事を寄稿したりした。この小さい記事は、いつも、なかなか面白く、辛辣だったので、忽ち評判になつたといふ。彼はこの一事をもつてしても、いつも貧しい暮らしをして不仕合せな境遇にある、この國の夥しい男女學生に比べて、實際的にも智的にも斷然頭角をあらはしてゐた。兩都の學生たちは、大てい朝から晩まで、各種の新聞雑誌の編輯室へ、お百度を踏みながら、相も變らぬ佛文の翻譯だとか筆耕の口だとかを、後から後からと懇願する以外には、何のいい思案も浮かばないのである。あちこちの編輯部と近づきになると、イワン・フォードロキッチはその後も、ずつと關係を絶たずに、大學を終るころにはいろんな専門的な書物に関する極めて才能のある批評を掲載し始めたため、文學者仲間のあひだにまで有名になつた。尤も、偶然にも彼がずつと廣範圍の讀書に特別な注意をよびおこして、非常に多くの人から一時に認められ、記憶されるやうになつたのは、つい最近のことである。それはかなりに興味のある出来ごとであつた。既に大學を卒業して、例の二千留の金で外國行きを企ててゐるうちに、イワン・フォードロキッチは突然ある大新聞に一つの奇妙な論文を載せて、専門外の人々の注意まで惹いたのであるが、就中その題材が博物科を卒業した彼にとつては全く縁のなさうなものであつた。その論文は、その頃あちこちで論議されてゐた教會裁判問題に對して書かれたものである。すでにこの問題について公けにされた幾つかの意見を検討してから、彼は自分自身の見解を發表した。重要な點は文章の調子と、全く人の意表に出たその結論とにあつた。ところで、教會派の大多數は斷然彼を目して自黨と隨信したが、それと同時に公民權論者のみならず無神論者までが一緒になつて、各自の立場から、やんやと喝采しはじめた。

が、つまるところ、具眼の士はこの論文は、單に大膽不敵の俄狂言であり嘲弄に過ぎないと斷定した。このいきさつを特に紹介しておくのは、そのころ持ちあがつた教會裁判問題について一般的な興味を持つてゐた、この町の郊外にある有名な修道院でも、たまたまこの論文が問題になつて、非常な疑惑を喚び起してゐたからである。さて筆者の名がわかつて、それがこの町の出身者で、しかも『あの他ならぬフォードル・パーヴロキッチの息子である』といふことがまた人々の興味を惹くのであつた。ところが丁度その頃、ひよつくりこの町へ當の筆者が姿を現はした。

何のためにイワン・フォードロキッチがそのとき歸つて來たのか——自分は當時すでに殆んど不安に近い氣持で、この疑問を心に抱いたことを覚えてゐる。あのやうな恐ろしい事件の端緒となつたこの宿命的な歸郷は、自分にとつて、その後長い間、殆んど常に不可解な謎として残つてゐた。大體、あれほど學問があり、あれほど見識が高くて、あれほど體面を慮る青年が、——一生自分の存在を無視して、自分を知りもしなければ覺えてもゐず、勿論、たとひわが子の願ひであらうとも、いつ如何なる場合にも金などを出す心配は絶対にないくせに、それでゐて、やはりイワンとアレクセイがいつか歸つて來て、金をねだりはしないかと、一生涯そればかりを恐れてゐるやうな、こんな父親の亂脈きはまる家庭へ突然やつて來たのは、不思議なことである。ところが、そんな父親の家へ戻つて來てこの青年はもう二月ばかりも一緒に暮らしてゐるばかりでなく、兩者の間はこの上もなく折合ひが好いのである。これには單に私ばかりではなく、多くの人たちが特に驚ろかされた。ビョートル・アレクサンドロキッチ・ミウソフ——この人は既に前にも述べたとほり、先妻とのつながりてフォードル・パーヴロキッチの選い

親戚に當る人であるが、丁度その頃、すつかり住み馴れた巴里から歸つて来て、再び當市に隣接した領地に居あはせた。この人が誰にもまして特に驚ろいてゐたやうに記憶する。

彼は異常なる興味を覚えてこの青年と相識の間になつたが、ともすれば内心の苦痛を感じながら、知識の張り合ひをすることがあつた。『あの男は氣位は高いし、』と彼はその頃、われわれにむかつてイワンのことをこんな風に話してゐた。『いつでも小錢は儲けるし、それに今でも外國へ行くだけの金は持つてゐるのだから、何も今更こんなところへやつて来る必要はなさうなものだが？ 父親に金を貰ふためにやつて来たのではないことは、誰の眼にも明らかなことだ。何にしても金を出す父親ではないのだから。あの男は酒を飲んだり、放埒な眞似をしたりするのは、大嫌ひなんだが、それなのに父親はあの男でなければ、夜も日も明けない有様だ！』それは全く事實であつた。イワンは父親に對して明らかに一種の勢力を持つてゐた。父は非常に我儘で、時にはひどく片意地なこともあつたが、しかも、時折は彼の言ふことを聞くらしかつた。そればかりではなく、どうかすると、身持が幾らか直つたかと思はれることさへもあつた……。

後になつて分かつたことであるが、イワン・フォードロキッチが歸つて来た一半の理由は、兄ドミトリイ・フォードロキッチの頼みとその用件のためであつた。その頃、生れて初めて兄のことを知り、顔を見たのも殆んどこの歸郷の時が初めてであつたが、しかし、ある重大な事件——といつても、主としてドミトリイ・フォードロキッチに關したことである——のために、モスクワから歸郷する前から文通は始めてゐた。それがいかなる事件であるかは、やがて讀者に詳しく分かつて来る筈である。とにかく

く、後日その特別な事情を聞き知つた後でさへも、私にはイワン・フォードロキッチといふ人がやはり謎のやうに感ぜられ、その歸郷の理由も依然として不可解に思はれた。

つけ加へて言つておくが、イワン・フォードロキッチはその頃、父と大喧嘩をして、正式裁判にまでも訴へようとしてゐた兄のドミトリイ・フォードロキッチと父との間に挟まつて、仲裁役といつたやうな立場に立つてゐた。

この一家族は、繰り返して言ふが、この時初めて一しよに落ち合つたのであつて、或る者は生れて初めて互ひに顔を見知つたのである。ただ末の子のアレクセイ・フォードロキッチだけは、一年ほど前から、こちらで暮らしてゐた。つまり兄弟中で最も早く、われわれのところへ姿を現はした譯である。さて、このアレクセイについて、小説の本舞臺へ登場させるに先だつて、かうした序説的な物語の中で説明することは、何よりも自分にとつては難かしいことである。しかし、彼についても、やはり前書きを費かなければならぬ。少くとも、或る非常に奇妙な點、すなはち、この未來の主人公を、小説の第一幕から新發意の法衣姿で、讀者に紹介しなければならぬので、その點だけでも豫め説明しておく必要があるのである。事實、彼がこちらの修道院に住み込んでから既に一年近くになるが、どうやら彼は一生涯その中に閉ぢ籠る覺悟でゐるらしかつた。

三男アリョーシヤ

彼はその時まだやつと満二十歳であつた（中の兄のイワンは當時二十四、長兄のドミトリーは二十八であつた）。先づ最初についておかなければならないのは、この青年アリョーシヤが、決して狂信者でもなければ、また、少くとも自分の考へでは、決して神祕主義者でさへなかつたことである。前もつて遠慮のない意見を述べるならば、彼はわづかに若き博愛家に過ぎず、修道院の生活に入つたのも、ただその生活が彼の心をうち、いはば世界惡の闇から愛の光明を願ひ求める彼の魂の究極の理想として、その頃の彼の心に映じたからである。またこの修道院の生活が彼の驚異の念を呼びさましたのも、その中に、その頃、彼の目して並々ならぬ人物とする、有名な長老ゾシマを、發見したからであつた。彼はやむにやまれぬ心の初戀のやうな熱情を捧げつくして、この長老に傾倒した。尤も、彼が既に搖籃時代から非常に變つた人間であつたことは争はれない事實である。序でながら、彼が僅か四つで母に別れながら、その後一生を通じて、母の面影やその慈愛を、『恰も自分の眼の前に母親が生きて立つてゐるかのやうに』まさまさと覺えてゐたことは既に述べた通りである。かうした思ひ出はずつとずつと幼い――

一二つくらゐの頃からさへ、よく記憶に残るもので（それは誰でも知つてゐることであるが）、それは闇の中に浮び出た明るい點のやうに、――また、それ以上は跡形もなく消え失せた大きな繪から切り抜かれた小さい斷片のやうに、一生を通じて心のなかに浮かんて來るものである。アリョーシヤの場合も全くその通りであつた。彼はある夏の靜かな夕暮を覺えてゐた。窓が開いてゐた、夕日が斜めにさし込んでゐた（この斜めにさし込む光りを彼は最もよく覺えてゐた）、部屋の片隅には聖像があり、その前には燈明がともされてゐた。聖像の前に母が跪いて、ヒステリーのやうにすすり泣きしながら、不意に金切聲を揚げて喚き出すと共に、彼を兩の手で痛いほど固く抱きしめて、わが子の身の上を聖母マリヤに祈り、また聖母の被衣の蔭に隠さうとでもするかのやうに、彼を兩手に抱き上げて聖像の方へ差し伸べたりしてゐた……すると、不意に乳母が駈け込んで來て、怯えながら彼を母親の手からもぎ取つてしまつた。これがその時の光景であつた！ アリョーシヤはその利那の母の顔まで覺えてゐた。その顔は、彼が記憶してゐる限りでは、取り亂してはゐたが、美しいものであつた。しかし、彼はこの記憶を人に打ち明けることをあまり好まなかつた。幼年期にも、少年期にも、彼はあまり感情を面に現さなかつたばかりか、むしろ口數の少い方であつた。それは決して臆病のためとか、無愛想で人づきが悪いためではなかつた。それどころか、かへつて、原因は何か他ににある。つまり、極めて個人的な、他人には

* アレクセイの愛稱

** フョードル・ドストイエフスキも二つくらゐの頃からの記憶をもつてゐた。彼は母親が村の教會堂へ連れていつたこと、一方の窓から一方の窓へ對面をよぎつて小鳩が飛んだことを覺えてゐた。（夫人の註）

何の關係もない、自分だけの内心の屈託といったやうなものであるが、それが彼にとつては非常に重大なものなので、このために他人のことは忘れるともなく忘れ勝ちになるのであつた。しかも彼は人を愛した。そして一生涯、人を信じきつて暮らしたらしいが、曾て誰一人として彼を馬鹿といふものもなければ、お人好しと考へる者もなかつた。彼の内部には、自分は他人の裁判官になるのは厭やだ、そして他人を非難するのも好かないから、どんなことがあつても人を咎めない、とでも言つてゐるやうなところがあつた（それはその後、一生を通じてさうであつた）。事實、彼は少しも咎め立てをせず、時には深い悲哀を感じることも度々あつたが、一切のことを許してゐるらしかつた。この意味で、何びとも彼を驚ろかしたり脅やかしたりすることが出来ないほどになつてゐた。二十歳の年に、まぎれもなく、穢らはしき淫蕩の巢窟たる父親の家に身を寄せてからも、童貞純潔な彼は、見るに忍びない時に、黙々としてその場を外すばかりで相手が誰であらうとも、いささかの輕蔑をも非難をも見せなかつた。嘗てよその居候であつたところから、侮辱に對しては敏感で繊細な神経を持つてゐた父親は、最初は、俯に落ちないやうな、氣むづかしい態度で、『黙り者の腹はさまざま』といった風で彼を迎へたが、結局は、まだ二週間ともたないうちに、絶えず彼を抱きしめて、接吻するやうになつた。尤も、それは泣き上戸の感傷の涙まじりにはあつたが、しかも彼のやうな人間には、ほかの何びとも感ずることのないやうな、深い眞實な愛情がありと見えてゐた……。

それに、この青年はどこへ行つても人に好かれた。それはまだ幼い子供の時からさうであつた。自分の恩人で養育者たるエフィム・ペトロキッチ・ポレーノフの家へ引き取られると、彼はこの家のあら

ゆる人たぢをすつかり惹きつけてしまつて、まづたく本當の子供と同様に見做されたものであつた。それにしても、彼がこの家庭へ入つたのは、まだ極めて幼少の頃のこととて、こんな子供に打算的な悪智惠や、機嫌を取つて人に好かれようとする術策や技巧や、自分を可愛がらせようとする手腕などといったものを期待することは、絶対に出来ないことである。従つて、己れに對する特別な愛情を人の心に呼びさす能力は、何ら技巧を弄することなく、端的に自然から賦與された本性だつた譯である。學校にゐてもやはり同じことであつた。尤も、彼は仲間から疑ひや、時として嘲笑や、或ひは事によると、憎惡さへも受けさうな子供に見えたかも知れない。たとへば、彼はよく物思ひに沈んで、人を避けるやうなことがあつた。ごく幼少の頃から彼は隅の方に引つこんで、讀書に耽ることを好んだ。それにも拘はらず、彼は學校にゐる間おゆう、全くみんなの寵兒といつてもいいほど、仲間から可愛がられた。彼はめつたにふざけたり、はしやいだりはしなかつたが、しかし、誰でも一目彼を見ると、それは決して氣難かしさのためではなく、反對に、落ち着いてさつぱりした性質のためである、といふことをすぐに悟るのであつた。同じ年頃の子供に伍しても、彼は決して頭角を現はさうなどは考へたことはなかつた。そのせゐでもあらうか、彼はつひぞ何一つ怖れたことがなかつた。それでゐる仲間の子供たちは、彼が自分の勇氣を鼻にかけてゐるのてなく、かへつて、自分が大膽で勇敢なことを、いつかう知らないやうな有様であることを、すぐに了解した。彼は侮辱を覺えてゐたことなどは一度としてなかつた。侮辱を受けてから一時間ほどすると、當の侮辱者に返事をしたり、自分の方からそれに話しかけたりすることがよくあつた。そんな時には、まるで二人の間には何事もなかつたかのやうに、相手を信じきつた

やうな、晴々した顔をしてゐる。それはうつかり、その侮辱を忘れたとか、または故らに許したとかいふやうな様子ではなく、そんなことは侮辱でも何でもないといった顔つきなので、この點がすつかり子供たちの心を擒にし、征服したのであつた。ただ一つ彼には人と變つた性質があつて、それが下級生から上級生に至るまで、中學の全學級にわたつて、彼をからかつてやらう、といふ望みを友達に起こさせたものである。尤も、それは腹の黒い嘲笑ではなく、ただ皆にとつてそれが楽しいからであつた。この變つた性質といふのは、野性的な、夢中になるほどの羞恥心と潔癖とであつた。彼は女に關するある種の言葉やある種の會話を、はたで聞いてゐることすら出来なかつた。ところが、不幸にも、かうした『ある種』の言葉や會話は、何れの學校においても絶やすことはできないものである。まだほんの子供で、心も魂も清淨潔白な少年たちが、時によつては兵隊でさへ口にするのを憚るやうな事柄や、場面や、方法などを、教室の中で、仲間同志大きな聲で口外する。かへつて兵隊などは、教育のある上流社會の年少の子弟が、疾うの昔に知つてゐるやうな、この方面のことを、あまり知りもしなければ、心得てもゐないものである。まだ、そこには恐らく、道德的墮落といふやうなものはないであらう。厚顔無恥があつても、やはり本當の意味での放縱な、内面的なものではなくて、ただ外面的なものに過ぎないが、しかもこれがしばしば彼らの間では、何かデリケートで、微妙で、男らしい、模倣に價するものやうに考へられるのである。『アリョーシャ・カラマゾフ』が、『そのこと』について話の出るたびに、あわてて指で耳を塞ぐのを見て、時をり一同は故らぐるりに集まつて、無理やりにその手を拂ひのけながら、兩の耳に向けて大聲で忌まはしいことを喚くのであつた。すると相手は、それを振り拂つて、床の

上に倒れ、すつかり顔を隠してしまつて、その際、何も言はなければ、亂暴な口ひとつきかず、無言のまま、ちつと侮辱を忍ぶのであつた。つひには誰も彼を構はなくなつて、『女つ兒』とからかふのさへも止してしまつたばかりではなく、この意味で彼に同情をもつて見るやうになつた。序でながら、級中、學課において彼はいつも優等生の一人であつたが、一度も首席になつたことはなかつた。

エフイム・ペトロキッチが死んでからも、アリョーシャはなほ二年のあひだ、縣立の中學校にとどまつてゐた。エフイム・ペトロキッチの夫人は悲嘆に暮れて、良人の亡き後、すぐに、女ばかりの家族をまとめて、永逗留の豫定で伊太利へ旅立つてしまつたので、アリョーシャはエフイム・ペトロキッチの遠縁に當る、これまで一度も顔を見たこともない二人の婦人の家へ移ることになつたが、いかなる條件のもとに引き取られたものか、それは自分でも知らなかつた。もう一つ、彼の、非常にといつていくらの變つた性質は、自分は抑々、誰の費用で生活をしてゐるのか、といふことを、これまで一度も心に留めたことのない點であつた。この點において、兄のイワン・フォードロキッチが大學で初めの二年間、自分で働いて身すぎをしながら苦勞をしたり、またほんの子供の頃から、自分の恩人の家や他人の厄介になつてゐる、といふことを感じて辛い思ひをしてゐたのに比べると、全く正反對であつた。しかし、アリョーシャのかうした奇妙な性格も、あまり深く咎める譯には行くまいと思はれる。といふのは、彼を少しでも知つてゐる者は誰でも、この問題にぶつかると、アレクセイはたとへ一時に多額の金が入つたところで、最初に出會つた無心者に施してしまふか、何かの慈善事業に寄附をするか、または單に巧妙な詐欺師にひつかかつて捲きあげられるかして、苦もなく使ひ果してしまふ宗教的

キ印に類する青年の一人に違ひないと、すぐに氣づくからであつた。概して彼は金の値打といふものをよく知らなかつた。もとより、それは文字どほりの意味ではない。彼は決して自分から頼んだのではないが、時をり小遣ひ錢を貰ふことがあつたが、それも、時によると、幾週間もその使途に困つて持て餘すかと思へば、また時には恐ろしく無難作に扱つて、瞬く間に無くしてしまふのであつた。フォードル・アレクサンドロキッチ・ミウソフは、金やブルジョアらしい廉恥心にかけては、少からず神経過敏な方であつたが、後に、アレクセイを見馴れてしまつてから、あるとき、彼について一つの名句を吐いたことがあつた。

『この男は恐らく、世界中にただ一人の、類のない人間かも知れない。あれはたとひ人口百萬ほどの不案内な都會の大廣場へ、いきなりただ一人で、一文なしで打つちやられても、決して餓死をしたり、凍え死をしたりすることはないだらう。すぐに人が食べものをくれたり、仕事の世話をしてくれたりするから。人がしてくれなくとも、自分ですぐどこかに職を見つける。しかもそれはあの人間にとつて、骨の折れることでもなければ、屈辱でもなく、また世話をしてくれる人もそれを少しも苦にしないどころか、かへつて満足に思ふだらう。』

彼は中學の全課程を了へなかつた。まだ卒業までには丸一年あるのに、彼はいきなり、厄介になつてゐた二人の婦人に向かつて、ふとある用事が頭に浮かんで來たので、父の許へ歸るつもりだと申し出た。婦人たちは一方ならず彼を惜んで、赦さうとはしなかつた。旅費はあまり大した額でもなかつたので、彼は恩人の遺族から、外國出發の折に贈られた時計を質に入れようとしたが、二人の婦人はそれをもと

めて、充分に旅費をつくつてくれ、新しい着物や肌着類までも調へてくれた。しかし、彼はぜひ三等車に乗りたいたからと言つて、その金も半分は返してしまつた。この町へ着いた時、『何だつて學校を卒業もしないで來たんだ？』といふ父親の最初の質問に對して、彼は何も答へなかつた。そしていつものやうに物思ひに沈んでゐたといふ噂である。その後まもなく、彼が母の墓を探してゐることが分かつた。それが歸郷の唯一の目的であると、歸つて來たとき自分でも打ちあけかかつてゐた。しかし、それだけで歸郷の理由の全部が盡きてゐたかどうかは疑はしい。不意に彼の心のうちに湧きあがつて、どこかよく分からないが、しかも避け難い新しい道へ、否應なしにぐんぐんと彼を引つぱつて行つたのは、果して何であつたか、それはその頃、彼自身にさへも分からず、何ら説明のしやうがなかつたのだと解釋するのが最も妥當なことであらう。フォードル・パーヴロキッチは自分の第二の妻をどこに葬つたか、わが子に教へることができなかつた。棺へ土をかぶせてこのかた、一度も墓參りをしたことがないので、永い年月が経つうちに、その時どこへ葬つたのか、全く忘れはてしまつたからである……。

序でながらフォードル・パーヴロキッチのことを少しばかり話しておかう。彼はそれまで永い間この町に住んでゐなかつた。二度目の妻が亡くなつてのち三四年たつて、南露西亞へ赴き、つひにオデッサまで行つて、そこに何年か引きつゞいて暮らしたのであつた。最初のうちは、彼自身の言ひ草によると、『多くの卑しい老若男女の猶太人』とつきあつてゐたが、やがては猶太人ばかりでなく、『上流の猶太人の家へも出入する』やうになつた。彼が金儲けに特別の腕を磨き上げたのは、この時代のことと考へなければならぬ。彼が再びこの町へ歸つて、すつかり落ちつくことになつたのは、アリョーシヤの歸

郷より僅か三年前のことであつた。町の古馴染は、彼がまだ決してそんな老人ではないのに、ひどく老けたやうに思つた。彼の物ごしは上品になつたといふよりも、何だか妙に厚かましくなつて來た。昔の道化が、今度は、ほかの者を道化に仕立てようといふ、圖々しい要求を現はし始めたのである。女を相手に見苦しい眞似をすることは、以前どほりに好きだといふよりも、そのやり方が一層いやらしくなつたやうに思はれた。間もなく彼は郡内に多くの新しい酒場を開いた。どうやら彼の財産は十萬留か、それとも、幾分それに缺けるくらいはあつたらしい。町内や郡内の多くの人たちが、忽ち彼から借金をしたが、それは勿論、確かな抵當を入れてのことであつた。ごく最近になつて、彼も何だか氣がゆるんだらしく、流暢さと身のしまりがなくなり、妙にだらしなくなつて、何か事を始めても、前後がすつかり食ひちがひ、すべてが投げやりになつて、いよいよ頻繁に深酒に浸るやうになつた。だから、若しも、そのころ、やはりいい加減に老いぼれてゐた例の下男のグリゴリイが、殆んど附き添ひの格で彼を見張つてゐなかつたなら、フォードルの生活には、絶えず面倒なごたごたが起こつてゐたことであらう。アリョーシャの歸郷は、精神的な方面から見ても、彼に何らかの影響を與へたらしい。年に似合はず老いぼれたフォードルの心のうちに、遠い昔に魂の中で萎へ凋んでゐた或るものが、不意に眼ざめたかのやうであつた。「なあ、これ」と彼は、アリョーシャの顔をつくづく眺めながら、言ふのであつた、「お前はあいつに生寫しだな、あの憑かれた女に。」彼は自分の亡き妻で、アリョーシャの母をさう呼んでゐたのである。その『憑かれた女』の墓は、つひに下男のグリゴリイによつて、アリョーシャに教へられた。グリゴリイは彼を町の墓地へつれて行つて、そこをすつと奥の隅にある鑄鐵製の、あまり金はかか

つてゐないが、小ぢんまりした墓じるしを指さした。その上には故人の名前、身分、年齢、死亡の年などといつしよに碑銘があつて、下の方には、一般に中産階級の人の墓に使はれる古風な、四行詩のやうなものまで刻んであつた。驚ろいたことに、この墓じるしはグリゴリイの仕業であつた。これは彼が自腹を切つて、氣の毒な『憑かれた女』の奥津城の上に建てたものである。それに先立つて彼は幾度となく、この墓のことを仄めかして、フォードル・パーヴロキツチをうるさがらせたものであるが、結局フォードルは、ただにこの墓のことばかりではなく、あらゆる思ひ出を振り棄てて、オデッサへ行つてしまつたのであつた。アリョーシャは母の墓の前で何ら感傷的な態度を示さなかつた。彼はただ、墓じるしを建てるについてグリゴリイの物々しい、尤もらしい話にちつと聴き入つたばかりで、暫らく頭を垂れて佇んでゐたが、やがて何ひとつ物も言はずに立ち去つた。それきり、彼は恐らく、一年ばかりも墓場へ來なかつたであらう。しかもこの小さな挿話は、フォードル・パーヴロキツチにも影響を與へたが、しかもそれは非常に風変わりなものであつた。彼は金を千留とり出すと、それを町の修道院へ持つて行つて、亡き妻の回向を頼んだのであつた。しかし、それは二度目の妻、即ちアリョーシャの母である『憑かれた女』のためではなく、自分を打つた先妻のアデライダー・イワーノヴナの菩提を葬ふためであつた。そして、その晩、酒に酔ひしれて、アリョーシャを相手に坊主どもの悪口をいつた。彼自身は信心から凡そ縁遠い人間であつた。恐らく五哥の蠟燭一本さへも、聖像の前へ立てたことのない男であつた、こんな手合には、よくかうした奇妙な感情や思想の突發が起こるものである。彼がこの頃、ひどく氣のゆるんで來たことは、前に述べたとほりである。それに彼の容貌は最近頃に、

過去の生活全體の内容と特質を、まさまさと證明するやうな相好を現はして來た。いつも無遠慮で胡散臭い、しかも人を嘲けるやうな小さい眼の下に、長いぶよぶよした肉の袋が垂れて、小さいながら脂ぎつた顔に、夥しい皺が深く刻まれてゐるばかりではなく、尖つた頤の下から、まるで金財布のやうにだぶだぶした横に長い大きな贅肉がぶらさがつてゐた。それが彼の顔にいやらしい淫蕩な相を與へてゐるのであつた。その上に、腫れぼつたい唇の間から、殆んど腐つてしまつた黒い齒の缺けらをちらちら見せる貪慾らしい長い口が付いてゐるのである。彼は話をする度に唾をやたらに跳ね飛ばした。とはいへ、よく好んで、われとわが顔を冷やかしたものであるが、さしてその顔に不満足でもなかつたのである。殊に彼はそれほど大きくはないが、非常に細かくて、一きは眼立つ段のついた鼻を指しながら、『真正正銘の羅馬鼻だ』と言つた、こいつが肉袋といつしよになつて、頰廢期の古代羅馬貴族そのままの顔ができあがつてゐるんだ。それが彼の傲慢なところらしかつた。

アリョーシヤは母の墓を見つけて程なく、いきなり、父にむかつて、自分は修道院へはいりたい、修道僧たちも自分が新發意になることを許してくれたと言ひ出した。彼はまたその時、これは自分の格別な希望であるから、父としての嚴肅な許しが與へられるやうに、是非ともお願ひすると説明した。老人は、この修道院内の庵室に行ひ済ましてゐるゾシマ長老が、自分の『おとなしい子供』に特殊な感銘を與へてゐることは、既によく承知してゐた。

「あの長老は、それあ、あすこでは一番こころの潔白な坊さんだよ。」じつと黙つたまま何か考へこむやうな風でアリョーシヤの言葉を最後まで聽いて、彼はかう口を切つたが、わが子の願ひに驚ろいた様

子は少しもなかつた。「ふむ、……ぢやあ、お前はあすこへ行かうつていふのか、うちのおとなしい坊主！」彼は一杯機嫌だつたが、突然、にやりと笑つた。それは例の引きのばしたやうな、一杯機嫌ながらも、狡猾さと、生辭ひの本性を失はぬ薄ら笑ひであつた。「ふむ、……だが、わしも、いづれはお前が、何かそんな風なことになるだらうとは、感じてををつたのだよ。どうだ、思ひがけなかつたらうが？ お前は全くあすこを狙つてををつたんだからの。が、まあ、仕方がないさ、お前も二千留といふ自分の金を持つてをるのだから、あれがまあ、持參金になるつてものだ。わしも決してお前を打つちやつときあせんからな、今だつて、寺で出せと言ふだけのものは、お前のために寄進するよ。だが、若し出せと言はなければ、何もこつちから出しやばつたことをするにも當るまいよ。そんなもんぢやないかえ？ だつて、お前の金の使ひ方といへば、頓とカナリヤとおんなじで、一週間に二粒づつもありや澤山だらうよ……ふむ……時に、何だ、あるお寺のことなんだが、そこにはちよつとした控へ屋敷のやうなものがあつて、その中には、誰でも知つてをることだが、『お園ひ女房ばかりが住んでをる』のさ。何でも三十四ぐらゐるらしいぞ、……わしもそこへ行つたことがあるが、ながなか面白いわい。勿論、一種特別な、變つてをるといふだけの面白さなだけだ。ただ惜しいことに、恐ろしい國粹主義で、佛蘭西の女がさつぱりゐないんで。呼び寄せたらいいんだのに、金は幾らでもあるんだから。そのうち嗅ぎつけたら、やつて來るだらうよ。だが、この寺には何も無い。お園ひ女房なんか一人もゐないで、坊主ばかりが二百匹ほどもゐるのさ。道心堅固で、戒律のやかましい連中ばかりなんだ、白狀をすれば……。ぢやあ、お前は坊主の仲間へはいりたいんだな？ だが、アリョーシヤ、わしはまつたくの

ところ、お前が可哀さうなんだよ。まさかと思ふかも知れんが、わしはお前が大好きになつてしまつたのだよ……。それでも、これを機會しほに一つ、わしらのやうな罪障の深い者のために、お祈りをしてくれるんだ。さうしたくわしらはここに御輿ごごを据ゑてゐるうちに、随分いろいろと罪を重ねたものだからな。わしはいつもよくさう思つたものさ——何時か、わしらのために祈つてくれる者が何處かにゐるだらうか？ そんな人間が果たしてこの世にゐるか知らん？ と。なあ、可愛い坊主、お前は本當にせんかも知れんが、このことにかけては、わしはから、他愛がないんだよ。それあ恐ろしく馬鹿なのさ。ところが、馬鹿なりに、しよつちゆうこのことを考へるんだよ。いや、しよつちゆうぢやない、無論、ときどきの話だ。だが、わしが死んだとき、鬼どもがわしを鉤かぎにひつ掛けて、地獄へ引きすり込むのを、ちよつと忘れさせるつていふ譯には行かんものだらうかなあ？ わしの氣になるのは、この鉤なんだよ。いつたい奴らは、どこからそんなものを手に入れるんだらう？ 何で拵こしらへてあるんか知ら？ 鐵だらうかな？ そんなら、どこでそんなものを鍛かつんだらう？ 何か工場のやうなものでも地獄にあるのかな？ でも修道院では坊主どもはきつと、地獄に天井があるものと考へてるんだらう。ところが、わしは地獄といふものを信じるのはいいけれど、まだ希くば天井のない奴がいいな。さうすれば、地獄も少しは氣のきいた、文化的な、つまりルーテル式なものになつて来るからな。まつたく、天井があらうとなからうと、同じことぢやないかよ。ところが、この忌々しい問題は、その中にあるんだ！ それで、もし天井がないとすれば、鉤かぎもないことになるだらう。ところで、鉤かぎがないとすれば、すつかり見込み違ひで、また分からなくなる、つまり、誰もわしを鉤かぎにかけて引きすりこむものはゐない譯だ、ところ

で、もしわしを鉤かぎにかけて引きすりこまないとしたら、その時はどうだらうな、一體、この世の何處に、眞理があるといふんだ？ II faudrait les inventer せいりとも作り出すにやならんのだ 故らにその鉤かぎをわしのために、わし一人のために、なぜと言つて、とてもお前には分かるまいが、アリョーシャ、わしは實に何とも言へん恥知らずだからな！……」

「でも地獄には鉤かぎなんかありませんよ。」と父を見つめながら、靜かに眞面目にアリョーシャは答へた。

「さうだとも、さうだとも、ただ鉤かぎの影ばかりなんだ、知つてるよ、知つてるよ。ある佛蘭西人が地獄のことを書いてるが、全くその通りなんだ *J'ai vu l'ombre d'un cocher, qui avec l'ombre d'une brosse frottait l'ombre d'une carrosse* わたしは見た、車夫の影を磨く駟馬の影を だ。しかし、お前は どうして鉤かぎがないつてことを知つてるんだい？ 少しのあひだ坊さん達の中へ入つてをたら、そんなことも言はなくなるだらうが。しかし、まあ行くがいい、そして善知識になるがいいぞ。さうなつたら、わしのところへ来て話して聞かしてくれ。何といつても、あの世の様子を良く知つてゐさへすれば、そこへ行くのも樂な譯だからな。それに、お前も、のんだくれの親爺や娘つ子どもの傍そばにゐるよりは、坊さんたちのところにゐた方が身のためだから……、せめてお前だけは、天使のやうに、なんにも觸ふらせたくないよ。いや、あそこへ行けば、お前も觸ふるものがなからう。わしがお前に許しを與へるのも、つまりは、それを當てにするからなんだよ。お前の心はまだ惡魔に食はれて居らんからな。ばつと燃えて、消えて、それからすつかり以前のからだになつて、歸つて来るがいい。わしはお前を待つて居るぞ。實際、世界中でこの

わしを悪く言はないのは、ただお前一人きりだから、それはわしも感じとるわい。本當に感じとるとも、實際、それを感じない譯にはいかんぢやないかえ？……」

そして、彼は吸りあげて泣き出しさへした。彼は感傷的であつた。悪黨ではあつたが、同時に感傷的な人間でもあつた。⑤

V

長 老

おそらく、讀者の中にこの青年を、病的な、我を忘れてしまふほど感じ易い、生れつき發育のよくない、貧弱な瘦せ衰へた人間で、蒼白い顔の空想家だらうと、考へられる方があつたかも知れぬ。ところが、その正反對で、その頃のアリオシーシャは堂々たる體格に、薔薇いろの頬をして、健康に燃えるやうな明るい眸の、二十歳の青年であつた。その頃の彼は寧ろ非常な美貌の持主であつた。すらりとした中肉中背で、黒みがかつた亞麻色の髪に、輪廓の正しい、しかも心もち長めの卵なりの顔、大きく見はつた濃い灰色の眼——概して考へ深さうな、見たところは、いかにも落ちついた青年であつた。或ひは、薔薇色の頬も、狂的信仰や神祕主義の邪魔にはならない、といふ人があつたかも知れないが、しかし、自分に

は、むしろアリオシーシャが誰にもまして眞のレアリストではないかと思はれる。それは成程、修道院へ入つてから、彼はすっかり奇蹟を信じたのには相違ない。しかし、自分の考へでは、奇蹟は決してレアリストを困惑させるものでない。奇蹟がレアリストを信仰に導くのではないからである。眞のレアリストは、もし彼が不信者であるとすれば、常に奇蹟を信じない方と才能を持つてゐるのである。そして、もし奇蹟が否定すべからざる事實となつて現はれた場合には、彼は奇蹟を許容するよりも、むしろ自分の感覺を信じまいとする。けれど、いざ奇蹟を許容するとなれば、極めて自然な事實でありながら、今まで知られずにあつた事實として許容するのである。レアリストにあつては、信仰が奇蹟から生まれるのではなくて、信仰から奇蹟が生ずるのである。もし一たびレアリストが信仰を懐いたならば、まさしくその現實主義を通じて、必ず奇蹟をも許容せざるを得ないのである。使徒トマスも、見ないよりは信じないと言ひ張つたが、いよいよ見た時には、『わが主よ、わが神よ！』といつた。これは、奇蹟が彼を信じさせたのだらうか？ 恐らくさうではなくて、彼がただ信じたいと望んだればこそ、信ずることができたのであらう。たぶん彼が『見ないよりは信じない』と頑張つた時すでに、自己の存在の奥底では、完全に信じてゐたのかも知れない。

或ひはまた、アリオシーシャは鈍な人間で、精神の發達も不充分で、學業も全うしなかつたのだ、などといふ人がないとも限らない。彼が中學を卒業しなかつたのは事實であるが、しかし、彼を鈍な人間だの馬鹿だのといふのは、大變な間違ひである。自分は既に前に述べたところを、いま一度くり返すまでであるが、——彼がこの道へ踏み込んだのは、當時ただこれのみが彼の心を撃ち、闇の中から光明を目

ざして慕進する彼の心霊に對する究極の理想として映じたからに他ならない。それに今ひとつ、半面に於いて彼がわが國の近代的青年であつたことを附け加へればいい。つまり、天性潔白で、眞理を探求し、遂にそれを信じるに至つたのであるが、一旦それを信じた上は、己が心魂を傾けて一刻の猶豫もなくこれに駆せ參じて、少しもはやく功績を樹てたい、しかもその功績のためには一切の物を、命さへも犠牲にすることを辭さないといふ、必死な希望に驅られてゐたのである。とはいへ、不幸にして、かうした青年達には、生命の犠牲はかういふ場合、他のいかなる犠牲よりも、最も容易なものだといふことが分らないのである。例へば、自からそれに打ちこんで、その完成を心に期してゐる同じ眞理なり、功名なりに奉仕する力を増すだけにでも、青春の血に燃ゆる自己の生活から五年六年を割いて、難かしい厄介な勉強の爲め、學問のための犠牲にするといふ——かうした不斷の努力が、多くの青年にとつては殆んど全く堪へられないのである。アリオーシャはただ、人と正反對の道を取つただけで、一時も早く功績を樹てたいと思ふ熱望に變りはなかつた。眞剣になつて思索した結果、不死と神とは存在するといふ信念に心を打たれると同時に、極めて自然にかう口走つた。『不死のために生きたい。中途半端な妥協はとるまい。』これと同じく、もしも彼が不死や神は存在しないと決めた場合には、彼は忽ち無神論者や社會主義者の中へ入つて行つたに違ひない（何故かといへば、社會主義は單なる労働問題、またはいはゆる第四階級の問題であるばかりでなく、主として無神論の問題である。無神論に現代的な肉づけを施した問題である。地上から天に達するためではなく、天を地上へ引きおろすために、神なくして建てられつつあるバビロンの塔であるから）。アリオーシャにはこれまで通りの生活をするのが、奇怪

で不可能なことにすら思はれた。聖書にも、『もし完たからんと欲せば、すべての財寶を賣ちて我の後より來れ』と言つてある。で、アリオーシャは心に呟いた。『自分は「すべて」の代りに、彌撒へだけ顔を出すやうなことは出来ない。』彼の幼少の頃の記憶の中に、よく母に抱かれて彌撒に詣つた、この町の郊外の修道院に關する何ものかが残つてゐたのかも知れない。或ひはまた『憑かれた女』なる母が、彼を兩手に載せて差出した聖像の前の斜陽が、彼の心に何か作用を及ぼしたのかも知れない。彼が物思ひに沈みながら、當時この町へ歸つて來たのは、ここでは『すべて』であるか、それともただの『二留』であるかを見究めるためだつたかも知れない、が——この修道院では彼は長老に逢つたのである……。

それは前にも述べたやうに、ゾシマ長老のことである。茲で一言わが國の修道院に於ける長老とは如何なる者であるかに就いて説明を加へなければならぬが、残念ながら自分はこの道にかけては、大して資格もなければ、確かな心得もないやうな氣がする。しかし、ちよつと手短かに、表面的な敘述を試みようと思ふ。まづ第一に、權威ある専門家の説によると、長老とか長老制度とかが、わが露西亞の修道院に現はれたのは極めて最近のことである。まだ百年にもなつてゐないが、東方の諸正教國、殊にシナイとアトスには千年も前からあつたことである。なほ彼等の主張に従へば、露西亞にも古代には存在してゐた。もしくは、存在してゐたに違ひないのだが、國運の衰頹とか、韃靼の入寇とか、叛亂とか、コンスタンチノブル陥落以後の東方との交通絶絶とかいふ、諸々の事件の結果、わが國に於てはこの制度が忘れられて、長老といふものの跡を斷つに至つたのである。それが復活したのは前世紀の終り頃で、偉大なる苦行者（一般にさう呼ばれてゐる）の二人バイーシイ・ゴリチコーフスキイと、その弟子たち

の力に由つたもので、それから殆んど百年も後の今日に至つても、ごく少數の修道院にしか存在せず、それさへどうかすると、露西亞では話にも聞かぬ新制度として、迫害を蒙ることがあつたのである。これが露西亞に於いて殊に隆盛を見たのは、あの有名なコゼリスクの僧庵、オプチーナ修道院であつた。何時、何びとに由つて、この制度が當地の郊外にある修道院で創められたかは確言することができないけれど、この長老職はもう三代も續き、ゾシマはその最後の長老である。しかもこの人が老衰と病氣のために殆んど死に垂んとしてゐるにも拘らず、誰をその後繼者に推すべきかも分かつてゐなかつた。これはこの修道院にとつては重大な問題であつた。といふのは、この修道院にはこれまで何一つ有名なものがなかつた。聖僧の遺骨もなければ、世間に知られた靈驗あらかたかな聖像もなく、國史に縁のある素晴らしい傳説もなければ、歴史的勳功とか祖國に對する忠勤とかいふものもない。それにも拘らず、この修道院が隆盛を極めて、露西亞全體にその名をうたはれたのは、偏へにこの長老たちのお蔭であつた。彼等の聲咳に接せんがために、露西亞の全土から夥しい巡禮者が、千里の道を遠しともせず、群れをなしてこの町へ流れこんで来るのであつた。では長老とは何者かといふに、これは人の靈魂と意志をとつて、自己の靈魂と意志とに結合させるものである。人は一旦ある長老を選び出したら、全然おのれの意志を斷ち、全幅の服従と絶對の没我とをもつて、これに自己の意志を預けるのである。かうして自己を委託した人は、長い試練の後に自己を征服し、かつ制御する日の来るのを期待して、甘んじてかうした試練、かうした恐ろしい『人生の學校』を迎へるのである。この全生涯の苦行を通じて、やがて完全なる自由、即ち自我の解放に到達する。そして全生涯を徒らに過ごして、つひに自己を發見することので

きない人々と運命を共にすることを免れ得るのである。この發案、即ち長老制度といふものは、決して理論的のものではなく、實踐上東方に端を發してから、現代に於いては既に千年の古い經驗を経てゐる。長老に對する義務は、いつの時代にもわが國の修道院にあつたところの、普通の『戒律』とはおよそ趣きを異にしてゐる。ここに認められるものは、行に服する者の永久の懺悔である。結ぶ者と結ばれる者との間のたつべからざる結縁の絆である。例へばこんな話がある。基督教として古い古い昔のことだが、かうした一人の道心が、長老に課せられた或る行を果たさないで、修道院を去つて他國へ赴いた。それはシリヤからエジプトへ行つたのである。そこで長いあひだ様々の偉大な苦行を積んだ結果、遂に認められて信仰のための拷問を受け、殉教者として死に就くこととなつた。既に教會が彼を聖徒と崇めて、そのからだを葬らうとした時であつた『許されざるものは出でよ！』といふ助祭の聲が響き渡ると同時に、殉教者のからだを納めた棺が、その場から動き出して、寺の外へ投げ飛ばされた。これが三度まで繰り返されたのである。その後やうやく、この聖い殉教者が戒律を破つて、自分が長老のもとを立ち去つたために、たとへ偉大な功績があつたにしても、長老の許可なくしては罪障を免れることができない、といふことが分かつた。そこで、呼び迎へられた長老がその戒律を解いたので、やつと埋葬を了へることができたといふことである。勿論これはほんの昔話であるが、茲に近い頃の事實談がある。わが國の現代の或る修道僧がアトスの地で修行をしてゐたが、突然、長老から、彼が聖地として、また穩かな避難所として、心の底から愛着してゐたアトスの地を棄てて、聖地巡禮のため先づエルサレムに赴き、それから露西亞へ引き返して、北の端なるシベリヤへ行け、『お前の住むべき場所はあちらなのだ、こ

こではない。」と命ぜられた。思ひがけない悲しみに打ちのめされた僧は、コンスタンチノープルへ赴き、全基督教大僧正のもとへ出頭して、自分の服従義務を解除してくれるやうに嘆願した。すると、大僧正の答へるには、單に大僧正たる自分にそれができないばかりでなく、一たん長老に課せられた戒律を解き得る権力は、世界ぢゆうの何處にもない。否あり得ない。それができるのは、戒律を課した當の長老あるのみだ、とのことであつた。かういふ次第で、長老といふものは或る一定の場合に於いて、限りのない、不可思議な権力を賦與せられてゐるのである。わが國の多くの修道院で、初めのうち長老制度が迫害を蒙つたのは、これがためである。けれども、間もなく長老は、民間で非常に高い尊敬をうけるやうになつた。例へば當地の修道院の長老の許へも、庶民と貴族の別なく、等しく長老の前へ身を掛け出して、めいめいの懷疑や罪惡や苦惱を懺悔して、忠言と教訓を乞ふために群り集まつたのである。これを見た反長老派の連中は、さまざまに非難を浴びせると共に、ここでは懺悔の神祕が專斷輕率に貶し卑しめられてゐると告發した。——ところが、道心なり俗人なりが、絶えず自分の内心を長老に打ち明けけるに際して、何ら神祕らしいところはないのである。しかし結局、長老制度は維持されて来て、次第次第に露西亞の修道院に根をおろすに至つた。尤も奴隸状態から自由と精神的完成とに向かつて、人間を更生させるところの、既に千年の經驗を積んだこの武器も、場合によつては兩刃の兇器となることがある。それで、中には、忍従と完全な自己制御に赴かないで、反對に惡魔的な倨傲へ、すなはち自由へではなくて、束縛へ導かれる者がないとも限らないのである。

ゾシマ長老は年齢六十五歳で、生まれは地主階級だつたが、ごく若い頃、軍務に服して、コーカサス

で尉官を勤めてゐたこともある。彼が何かしら一種獨特な性格でアリョーシヤの心を震駭させたのは、疑ひもない事實である。アリョーシヤは長老の深い愛顧をうけて、その庵室に住む事を許されてゐた。茲でちよつと斷つて置くが、當時アリョーシヤは修道院に住んでゐると言つても、まだ何の拘束も受けてゐなかつたので、何處へでも自由に、幾日もぶつとほしに出かけても構はなかつた。彼が僧服を着けてゐたのは、修道院の中で他の人と際立たないやうに、自からすすんで、さうしてゐたのであつた。しかし、言ふまでもなく、それが彼に氣に入つてもゐたのである。ことによつたら、長老を常に取り巻いてゐる権力と名聲とが、彼の若々しい心に強く働きかけたのかも知れない。ゾシマ長老に就いては、多くの人がこんなことを言つてゐた——彼の許へあらゆる人々が、めいめいの心中を打ち明けて、靈驗のある言葉や忠言を聴かうといふ渴望に燃えながらやつて來るので、長老は多年かういふ人達と接して、その懺悔や、苦惱や、告白を限りなく自分の心に受け入れたので、しまひには自分のところへ來る未知の人を一目見ただけで、どんな用事で來たのか、何が必要なのか、如何なる種類の苦しみがその人の良心を苛んでゐるかといふやうなことまで、見抜いて、本人がまだ口をきかない先に、その靈魂の秘密を正確に言ひ當てて、當人を驚ろかしたり極まり惡がらせたり、時には氣味悪く思はせたりするほどの、繊細な洞察力を獲得してゐるのであつた。しかも殆んどいつもアリョーシヤの氣づいたことは、最初、長老のところへ差し向かひで話しに來る多くの人が、大抵みな恐怖と不安の表情で入つて行くが、出て來る時には、晴れやかな悦ばしさうな顔つきになつてゐることであつた。まつたく、恐ろしく陰氣だつたものが、さも幸福さうな顔に變るのであつた。いま一つアリョーシヤを非常に感動させたのは、長老が

決して嚴格ではなかつたことである。そればかりか、却つてその應對ぶりは大抵いつでも、いかにも愉快さうであつた。それに、彼は少しでも餘けい罪の深い者に同情し、誰よりも最も罪の深い者を誰よりも一番に愛するのだ、と僧たちは話してゐた。僧たちの中には、長老の生涯が終りに近づいた今でさへ、彼を憎んだり猜んだりする者があつた。しかしそんな人も次第に少なくなつて、あまり悪口をつかなくなつた。尤もさういふ連中の中には、修道院でも非常に名の通つた、有力な人物も幾人かあつた。例へばその中の一人は、古參の僧で、偉大な無言の行者で且つ稀有の禁慾家であつた。しかしそれでも大多数の者は、既に疑ひもなくゾシマ長老の味方であつた。然もその中には、全心を打ちこんで熱烈眞摯に彼を愛してゐる者も少くなかつた。ある者に至つては、殆んど狂信的に彼に傾倒してゐた。かうした人たちは公然にこそ言はないが、長老は聖者である、それには些の疑ひもないと噂してゐた。そしてほどなき長老の逝去を豫想してゐたので、ごく近いうちにその死體から急に奇蹟が現はれて、この修道院にとつて偉大な名譽となるに違ひないと期待してゐたのである。長老の奇蹟的な力は、アリョーシヤも絶對に信じて疑はなかつた。それは丁度、寺の中からけし飛んだ棺の話で、絶對に信じたのと同じであつた。彼は病氣の子供や大人の親族の者どもを連れて来て、長老がその病人の頭にちよつと手を載せて、祈禱を唱へてくれるやうにと懇願する多くの人を見た。彼等は間もなく、中にはすぐその翌日、再びやつて来て、涙と共に長老の前にひれ伏して、病人を治癒して貰つた禮を述べるのであつた。果たしてそれが事實、長老によつて治されたのか、それとも病氣の經過が自然に快方に向かつたのか、——そんなことはアリョーシヤにとつて問題ではなかつた。といふのは、彼はすつかり師の精神力を信じきつて、

その聲望を自分自身の勝利か何ぞのやうに思つてゐたからである。

殊に彼が胸のときめきを、とどめかね、歡喜の光りに輝くやうだつたのは、長老を拜し、その祝福をうけるために、露西亞の全土から集まつて来て、庵室の門口に待つてゐる百姓町人の巡禮の群れへ、しづしづと長老が姿を現はす時であつた。彼等はその前へひれ伏して、泣きながらその足に接吻し、その足の踏んでゐる土を接吻し、聲を上げて慟哭した。また女どもは彼の方へ子供を差し出したり、病める『憑かれた女』を連れて來た。長老は彼等と言葉を交へ、短い祈禱を唱へ、祝福を與へて、彼等を退出させるのであつた。最近では、病氣の發作のため、時とすると、僧房を出るのも難かしいほど衰弱してしまふことがあつたので、巡禮者たちはよく數日のあひだ、彼が出て來るのを修道院で待ち受けてゐた。どうして彼らがこれほど長老を愛慕するのか、なぜ、彼らは長老の顔を見るや否や、その前に身を投げて有難涙に咽ぶのか、それは、アリョーシヤにとつては何の疑問にもならなかつた。おお、彼はよく理解してゐた！ 常に勞苦と災禍に、いや、それよりも一層、日常坐臥の生活につき纏ふ不公平や、自己の罪のみならず世間の罪にまで苦しめられてゐる、露西亞庶民の謙虚な魂にとつては、聖物もしくは聖者を得て、その前にひれ伏して額づくこと以上の、強い要求と慰藉はないのである。『よし我々に罪悪や、嘘偽や、誘惑があつても構はない、その代り地球の上の何處かに聖者高僧があつて、眞理を保持してゐる。その人が眞理を知つてゐる。つまり眞理は地上に亡びてはゐないのだ。して見れば、その眞理はいつか我々にも傳はつて来て、やがては神の約束どほり、全世界を支配するに違ひない。』と、こんな風に庶民が感じてゐるばかりか、考へてさへゐることをアリョーシヤはよく知つてゐた。そしてゾシ

マ長老が庶民の信じてゐるその當の聖人であり、眞理の保持者であるといふことを疑はなかつた。その點に於いて彼自身も、これ等の有難涙に暮れる百姓や、子供を長老の方へ差し出す病的な女房などと變りはなかつた。また、長老が永眠ののち、この修道院に並々ならぬ名聲を與へるといふ信念は、修道院内の誰にもまして最も深く、アリョーシャの心に根ざしてゐた。それに總じて、最近は、何がしら深遠な、焰のやうな心内の歡喜が、いよいよ烈しく彼の胸に燃えさかるのであつた。何と言つても、自分の目前に立つてゐるのは、この長老ただ一人に過ぎないといふことも、決して彼を困惑させなかつた。『どつちにしても、長老は神聖な人だから、この人の胸の中には萬人に對する更新の秘訣がある、つひには眞理を地上に押し立てる偉力がある、それでやがては萬人が神聖になり、互ひに愛しあふやうになるだらう。そして貧富高下の差別もなくなつて、一同が一樣に神の子となり、かうして遂に基督の王國が實現されるだらう。』これがアリョーシャの胸に浮かぶ空想であつた。

これまで全然知らなかつた二人の兄の歸省は、アリョーシャに非常に強い印象を與へたらしい。長兄ドミトリー・フョードロキツチとは、同腹の兄イワン・フョードロキツチとよりずつと早くかつ親しく知り合ふことが出来た。そのくせ、長兄の方が遅れて歸つて來たのである。彼は兄イワンの人となりを知ることに非常な興味を抱いたが、その歸省以來ふた月の間に、二人はかなり度々顔を合せたにも拘らず、未だにどうしても親密になれなかつた。アリョーシャ自身も無口な方で、何ものか待ち設けてゐるやうな、何ものか蓋らつてゐるやうな風であつたし、兄イワンも初めのうちこそ、アリョーシャの氣がつくほど長い、物珍しさうな視線をじつと弟に注いだものだが、やがて間もなく、彼のことなど考へて

見ようともしなくなつたやうだ。アリョーシャもこれに氣がついて幾らか極まりが悪かつた。彼は兄の冷淡な態度を二人の年齢、殊に教育の相違に歸したが、また別様にとれないでもなかつた。それは、イワンのかうした好奇心や同情の缺乏は、事によつたら、アリョーシャの全然知らない、何か別の事情に起因するのではあるまいか？ といふのである。彼はなぜかこんな氣がしてならなかつた——イワンは何か心奪はれてゐる、何か重大な心内の出來事に氣を取られてゐる、恐らく何か非常に困難な、ある目的に向かつて努力してゐる。それで彼は弟のことどころではないのだ、これがアリョーシャに對する彼の放心したやうな態度の唯一の原因に違ひない。アリョーシャはまた、こんなことも考へた——この態度の中には自分のやうな愚かしい道心に對する、學識ある無神論者としての侮蔑が交つてゐるのではなからうか？ と。彼は兄が無神論者だといふことを百も承知してゐた。もしそんな侮蔑の念があつたにしても、それに對して彼は腹を立てる譯にゆかなかつたが、それでも彼は、何か自分にもよく分らない、不安な擾亂をもつて、兄がもう少し自分の方へ近よる氣持になるのを待つてゐた。長兄ドミトリー・フョードロキツチはこの上もなく深い尊敬と、何か特別な熱中を以つてイワンのことを取り沙汰した。アリョーシャは、近頃二人の兄を目立つて緊密に結び合はした、あの重大な事件の詳しいいきさつを、この長兄の口から聞いたのである。ドミトリーのイワンに關する感に堪へたやうな取り沙汰が、アリョーシャに一層面白く感じられたのは、兄ドミトリーがイワンに比べると、殆んど無教育といつていいほどの人間で、二人を一緒に並べてみると、性質にしる人格にしる、これくらゐ似ても似つかぬ二人の人間を想像することは難かしいほど、極端な對照をなしてゐたことである。

丁度この頃、長老の庵室で、この亂脈な一家の者一同の會見、といふよりは寧ろ、寄り合ひが催されて、それがアリョーシャに異常な影響を與へたのである。實際この寄り合ひの口實は甚だ眉唾ものであつた。當時、例の遺産のことや、その算定に關するドミトリイ・フォードロキッチとその父フォードル・パーヴロキッチとの反目は、既に飽和點に達してゐたらしい。その間がいよいよ尖鋭化して、もはや堪へ難いものになつたので、何でもフォードル・パーヴロキッチの方から、まづ冗談半分に、一つ皆でゾシマ長老の庵室へ集まつたらどうだ、といふ案を持ち出したものらしい、それは眞正面から調停を仰ぐといふ譯ではないけれど、何とか穏便に話がつくかも知れない。それに長老の高い地位や人物が、何か和解的な示唆を與へないとも限らないから、といふのであつた。これまで、一度も長老を訪ねたことも、顔を見たこともないドミトリイは、勿論、長老を持ち出して、自分を脅しつけようといふ肚だなどと思つたが、最近、父との諍ひに際して、ともすれば亂暴な舉動に出たがる自分自身を、内々心に咎めてゐた矢先であつたから、彼もその相談に乗つたのである。因みに、彼はイワン・フォードロキッチのやうに父の家にならぬので、町はづれに別居してゐた。當時この町に逗留してゐたビョートル・アレクサンドロキッチ・ミウソフが、無性にこのフォードル・パーヴロキッチの思ひつきに賛成した。四五十年代の自由主義者であり、また自由思想家で無神論者たる彼は、退屈しのぎのためか、それとも氣輕な慰み半分にか、とにかくこの事件に非常に力を入れた。彼は急に、修道院や『聖者』が見たくなつたのである。で、例の領地の境界や、森林の伐採權や、河の漁業權など、いろいろの事柄に關する古い係争が尙ひき續き、修道院相手の訴訟が遷延してゐたので、彼は親しく修道院長に會つて、何とか事件を圓

滿に解決する譯には行かないものな、ひとつ談合して見たいといふ口實の下に、それを利用しようと思つたのである。かういふ有益な意圖を持つた來訪者は、修道院でも單なる好事家より一倍と注意を拂つて遇するに違ひない。かうして事情を綜合して見ると、近ごろ病氣のために普通の訪問者さへ拒絶して、殆んど全く庵室を出なくなつた長老に對しても、修道院の内部から何とか都合のいい口添へをしてくれるかも知れなかつた。結局、長老は承諾して、日取りまで決められた。『いつたい誰がわしをあの人たちの仲へ割り込ませたのだらう？』と、ただ一言、アリョーシャに向かつて微笑を含みながら言つた。會合の話聞いて、アリョーシャはひどく當惑した。もしこれらの相争へる不和な人たちの中で、誰かこの會合を眞面目に見る人があるとすれば、それはまさしく兄ドミトリイだけである。爾餘の連中に至つては、ただ輕薄な、長老にとつて侮辱的な目的のためにやつて來るのに過ぎない——とアリョーシャはこんな風に考へたのだ。兄イワンとミウソフは無作法きはまる好奇心からやつて來るのだらうし、父はまた何か道化じみたお芝居の一幕を演ずるためにやつて來るのだらう。實際、アリョーシャは口にごそ言はないけれど、かなり深く父を知つてゐた。返すがへすも、この青年は決して皆の考へてゐるほどおめでたい人間ではなかつた。彼は重苦しい氣持を抱きながら、その日になるのを待つてゐた。彼が心中ひそかに、さうした家庭の紛擾に、何とかして梟がついてくれればと、只管それを氣遣つてゐたのは疑ひもないことである。とはいへ、彼のおもなる懸念は長老の身の上であつた。彼には長老の名譽が心配で堪らなかつた。長老に加へられる侮辱、殊にミウソフの繊細で慇懃な嘲笑や、博學なイワンの人を見下げたやうな皮肉が恐ろしかつた。そしてこんなことが絶えず彼のところに懸つてゐるので

あつた。彼は長老に向かつて、近いうちにやつて来るに違ひないこれらの連中について、何とか警戒しておかうかと思つたが、しかし考へ直して口を噤んだ。ただ會合の前日、彼は知人を通して兄ドミトリーに、自分は彼を愛してゐる、そして彼が約束を實行して呉れるのを期待してゐると傳言した。ドミトリーは何も約束した覚えがないので、いろいろ考へたすゑ、手紙で『卑劣な言行』を見聞きしても、一生懸命に自分を抑制する、そして長老と弟イワンに對しては深い尊敬を拂つてゐるけれど、今度のこととは自分をはめるための良か、でなければ馬鹿馬鹿しい茶番に違ひないと確信してゐる。『しかしとにかく、自分の舌を噛み切つても、お前がそんなに尊敬してゐる長老に對して、不敬なことは決してしない。』さういふ文句でドミトリーの手紙は結んであつた。だが、アリオージャには、それもさして心を引きたてるよすがにはならなかつた。

第二篇

お門ちがひを寄り合ひ

I

修道院に着く

美しく澄み渡つた暖かい晴朗な日和であつた。それは八月の末のことであつた。長老との會見は晝の彌撒のすぐあと、大體十一時半ごろといふことに決つてゐた。わが訪問者たちは彌撒には列しないで、丁度その終る頃に到着した。彼らは二臺の馬車に乗つて來たが、二頭の高價な馬をつけた、瀟洒な先頭の輕馬車には、ピョートル・アレクサンドロキッチ・ミウソフが、その遠い親戚に當る、ピョートル・フォミッチ・カルガーノフといふ二十歳くらゐの非常に若い青年と同乗してゐた。この青年は大學へはいらうとしてゐたが、ミウソフ——この人の家に彼は何かの事情で當分同居してゐたのだ——は、自分といつしよに外國へ、チューーリッヒかイエナへ行つて、そこの大學を卒業したらと、彼を唆か

してゐた。が、この青年はまだ決心がつきかねてゐるのであつた。彼は何となく瞑想的で、どこか放心したやうなところがあつた。その顔は感じがよく、體格もしつかりしてゐて、脊はかなり高い方であつた。時々その眸が奇妙に固定することがあつたが、それはすべて放心した人の常で、じつと長いあひだ人の顔を見つめることがあるけれど、その癖、ちつとも相手を見てゐるのではない。彼は無口の方で、どこか少しぎこちないところがあつた。しかしどうかすると、——尤も誰かと二人きりで差し向かひの時に限るが、急に喋り出して、何がかしいのか無性に笑ひ出すことがあつた。けれどもかうした元氣は、起こり初めと同じやうに、不意にぱつたり消えてしまふのであつた。彼はいつも立派な、しかも上品な服装をしてゐた。もうなにがしかの獨立した財産を持つてゐる上に、まだこの先き、ずつと大きな遺産を相続することになつてゐた。アリョーシャとは親友であつた。

ミウトソフの馬車から大分遅れて、二頭の青鹿毛の老馬に曳かせた、ひどく古びてがたがたする、だつ廣い辻馬車に乗つて、フォードル・パーヴロキッチが息子のイワン・フォードロキッチといつしよに乗りこんで來た。ドミトリイ・フォードロキッチは、きのふ時刻も日取りも知らしてあつたのに遅刻した。一行は馬車を圍ひの外の宿泊所に乗り捨てておいて、徒歩で修道院の門をはいつた。フォードル・パーヴロキッチ以外の三人は、これまで一度も修道院といふものを見たことがないらしい。ミウトソフに至つては、もう三十年ばかりの間、教會へさへ足踏みをしなくらゐである。彼は取つて附けたやうなゆとりを現はした好奇の眼で、あたりを見廻してゐた。しかし修道院の中へ入つても、本堂や塔や庫裡の建物——それも極めて平凡なものであつた——の外には、彼の觀察眼に映するものは何一つな

かつた。本堂からは、最後に残つた參詣者たちが、帽子を取つて十字を切りながら出て來た。それらの庶民階級の中に、旅の人らしい比較的上流の、二二三の婦人と、一人のひどく年の寄つた將軍も交つてゐた。この人たちは宿泊所に泊まつてゐるのであつた。乞食どもが早速われらの一行をとり巻いたが、誰も施しをする者がなかつた。ただベトルーシャ・カルガノフだけが、金入から十哥銀貨を一つ取り出したが、どうした譯か妙にあわてて、ひどくどぎまぎしながら、大急ぎで一人の女乞食の手へそれを押し込んで、『皆で同じに分けるんだよ』と早口に言つた。同行者のうち誰ひとり、それに對してかれこれ言ふ者はなかつたのだから、少しも極まり悪がることはない筈なのに、それに氣がつくと、彼はなほ一層どぎまぎしてしまつた。

しかし合點の行かぬことであつた。本來ならば、修道院ではこの一行を待ちうけてゐるばかりでなく幾分の敬意さへ拂つて出迎へるべき筈であつた。一人はまだついこのあひだ千留の寄進をしたばかりだし、いま一人は富裕な地主で、然もいはば最高の教養を有する人で、訴訟の經過如何によつては、河の漁業權に關して修道院内の人を悉く左右し得る人物である。それなのに、いま公式に彼らを出迎へる者が一人もゐないのである。ミウトソフは堂のまはりにある墓石をぼんやり見廻しながら、かういふ『聖域』に葬られる權利のために、この墓はさぞ高いものについたことだらう、と言はうとしたが、ふと口を噤んでしまつた。それは罪のない自由主義的な反語が、肚の中で殆んどもう憤懣に變りかけてゐたからである。

「ちえつ、それはさうと、ここでは……この譯の分からんところでは、いつたい誰に物を訊ねたらいい

いんだ……。それからして先づ決めてかからなきやならない。時間がぐんぐん経つてしまふばかりだから。」かう、出し抜けに、獨語か何ぞのやうに彼は呟いた。

このとき突然、一行の傍へ一人いい加減の年の行つた、少々頭の禿げた男が、ゆつたりした夏外套を着て、甘つたるい目つきをしながら近寄つて來た。彼はちよつと帽子を持ち上げて、甘えた調子で頻りにしゆつしゆつといふ音を立てながら、誰とはなしに一同に向かつて、自分はツラ縣の地主マクシーモフといふものだと言乗つた。そしてさつそく一行の懸念してゐることに口を入れた。

「ゾシマ長老は庵室に暮らしてをられますよ。修道院から四百歩ばかり離れた庵室に閉ぢ籠つてをられますので、あの林のむかふですよ、あの林の……。」

「それはわしも知つてをりますよ、林のむかふだといふことはな、」とフォードル・パーヴロキッチが答へた。「ところが、わしらは道をはつきり覚えてをりませんのぢやよ、だいぶ長い御無沙汰をしましたのでな。」

「ああ、それならこの門をはいりましてな、眞直に林を通つて……林を通つて……。さあ参りませう。もし何でしたら……わたくしが……。さあ、こちらへおいでなさい、こちらへ……。」

一同は門をくぐつて林の中を進んで行つた。地主のマクシーモフは、六十くらゐの男であつたが、さつさと歩くといふよりは、横つちよに駆け出すやうにしながら、身慄ひの出るやうな、殆んど名狀し難い好奇心をもつて、一行を眺め廻すのであつた。その目のうちには、何となく厚かましい表情があつた。

「實は、僕たちがあの長老のところへ行くのは、特別な用事のためなんですよ。」とミウソフは嚴しく彼に注意した。「僕たちはいはば『あの方』に謁見を許されてゐるんだからね、道案内をして下さるのは有難いけれど、御一緒にお入りを願ふ譯には行かんですよ。」

「わたくしは行つて参りましたよ、行つて参りましたよ、わたくしはもう行つて参りましたんで…… Un chevalier parfait! 立派な騎士です。」と地主は宙で指をばちりと鳴らした。

「Chevalier 〇〇誰のことですか?」
「長老のことですよ。素晴らしい長老ですよ。實に素晴らしい……。この修道院の譽れですよ。ゾシマ長老。あの方はまことに……。」

しかし、その纏りのない言葉を、ちやうど一行に追ひついた、一人の僧が遮つた。それは頭巾をかぶつた、脊のあまり高くない、恐ろしく顔の蒼さめて瘦せさらばへた僧であつた。フォードル・パーヴロキッチとミウソフとは立ちどまつた。僧は殆んど顔が帯にくつつくらゐ可憐な會釋をしてから、かう言つた。

「皆さま、庵室の方の御用が済みましたら、修道院長が皆さまにお食事を差し上げたいと申してをられます。時刻は正一時で、それより遅くなりませぬやうに。あなたもどうぞ。」と彼はマクシーモフの方へ振り返つてつけ加へた。

「それは是非おうけ致しますよ!」と、フォードル・パーヴロキッチはその招待にひどく恐悦して、叫んだ。「是非とも。それに何ですよ、わたしたちはこちらにをる間ぢゆうは行儀に氣をつける約束を

しましたのぢや……。ところで、ミウーソフさん、あなたもおいでになりますか？

「無論、行かないでどうします。僕がここへ来ましたのは、つまり修道院の習慣をすっかり見せて貰ふためなんですからね。ただ一つ困るのは、あなたと御一緒に来たことでしたな、フォードル・パーヴロキッチ……。」

「それに、ドミトリーがまだ来ませんしな。」

「左様さ、あの男がするけて呉れたら有難いんですがね。一體あなたの家のごたごたが僕にとつて、愉快だらうとでもいふんですか？ おまけにあなたと一緒にですからね。それぢやあ、お食事に参上しますから、修道院長に宜しくお傳へ下さい。」と、彼は僧の方へ振り返つて言つた。

「いえ、わたくしはあなた方を長老のところへ御案内しなくてはなりませんので。」と僧が答へた。

「では、わたくしは修道院長のところへ……、わたくしはその間に、ぢかに修道院長のところへ参りますわい。」とマクシーモフが囁りはじめた。

「修道院長はただ今お急がしいのですけれど、でもあなたの御都合で……。」と僧は澁りがちに言つた。

「何てうるさい爺だらう」と、マクシーモフがまた修道院の方へ引つ返して駆け出した時、ミウーソフは口に出して言つた。

「フォン・ゾンに似てらあ。」と出しぬけにフォードルが言つた。

「あなたの知つてるのはそんなことくらゐですよ。……どうしてあの男がフォン・ゾンに似てるんです！ あなたは自分でフォン・ゾンを見たことがあるのですか？」

「寫眞で見ましたよ。別に顔つきが似てをる譯ぢやないが、どことなしにそんなところがあるんですよ。真正正銘フォン・ゾンの生き寫しだ。わしはいつでも顔つきを見ただけでさういふことが分かるんでしてね。」

「おほきにね、あなたはその道の通人だから。ただね、フォードル・パーヴロキッチ、あなたがたつた今、御自分で仰しやつた通り、僕たちは行儀に氣をつけるつていふ約束をしたんですよ、ね、いいですか。どうか、氣をつけて下さいよ。あなたが道化した眞似を始めなされるやうなら、僕はここであなたと同列に置かれる氣は、さらさらないのですからね……。どうです、何といふ人でせうね。」と彼は僧の方へ振り向いた。「僕はこの人と一緒にきちんとした人を訪問するのが、心配で堪らないですよ。」

血の氣のない蒼ざめた僧の唇には、一種するさうなところのある、微かな無言の微笑が浮かんだ。けれども、彼は何とも答へなかつた。その沈黙が自分の品位を重んずる心から出たものだ、といふことは明瞭すぎるくらゐであつた。ミウーソフは一層ひどく眉を擧げた。

「ええ、碌でもない、幾世紀もかかつて仕上げたやうな顔をしてゐるが、その實、駄法螺だ、荒唐無稽だ！」かうした考へが彼の頭を掠めた。

「あああれが庵室だ、いよいよ来ましたぜ！」とフォードルが叫んだ。「ちやんと圍ひがしてあつて、門がしまつとるわい。」

彼は門の上や、その兩側に描いてある聖徒の像に向かつて、仰山さうな十字を切り始めたものだ。

「郷に入つては郷に従へ」といふことがあるが、と彼が言ひ出した。「この庵室の中には二十五人から

の聖人様が浮世を遁がれて、お互ひに睨みつこをしながら、キャベツばつかり食べてござる。そのくせ女は一人もこの門を入ることができん——ここが肝心なところなんです。然もこれは全く本當のことなんです。しかし、長老が婦人方に會はれるといふ話を聞きましたが、どんなものでせうな？」かう彼は不意に案内の僧に向かつて訊いた。

「平民の女性には、今でも、そら、あすこの廊下の傍に待つてをります。ところで、上流の貴婦人方のためには小部屋が二つ、この廊下に建て添へてありますが、しかし圍ひ外になつてをりますので。そら、あすこに見えてをる窓がさうです。長老は氣分のよい時には内側の廊下を通つて、婦人方に會ひに行かれるのです、つまり、圍ひの外で。今も一人の貴婦人の方が——ハリコフの地主でホフラーコフ夫人とかいふ方が、病み衰へた娘御を連れて待つてをられます。多分お會ひすると、約束をされたのでございませう。尤も、このころは非常に衰弱されて、一般の人たちにも滅多に會ひに出られませんが。」

「ぢやあ何ですか、やつぱり庵室から婦人方のところへ、抜穴が作つてある譯ですか。いやなに、神父さん、わしが何かその、妙なことも考へてをるなどと思はんで下さいよ。別に何でもないので。ところで、アトスでは、お聞き及びでせうが、女性の訪問が禁制になつとるばかりか、どんな生物でも牝はならん、牝鶏でも、牝の七面鳥でも、牝の犢でも……」

「フォードル・パーヴロキッチ、僕はあなたを一人ここへうつちやつといひ、歸つてしまひますよ。僕がゐなかつたら、あなたなんぞ両手を擱んで引つ張り出されてしまひますぞ、それは僕が豫言しておきますよ。」

「何でわしがあなたの邪魔になるんです、ミウソフさん？ おや、御覽なさい、」庵室の圍ひ内へ一步踏み込んだ時、彼は出しぬけにかう叫んだ。「御覽なさい、ここの人達は、まるで薔薇の谷に暮らしてゐるんですな！」

見ればなるほど、薔薇の花こそ今はなかつたが、めづらしく美しい秋の花が、植ゑられるかぎり、到るところに夥しく咲き誇つてゐた。どれもこれも、見うけるところ、なかなか老練家の手で世話をされてゐるらしい。花壇は堂の圍ひ内にも、墓の間にも設けてあつた。長老の庵室のある木造の平家も、同様に花が植ゑめぐらしてあつて、その入口の前には廊下が續いてゐた。

「これは先代のワルソノーフイ長老の時分からあつたのですかい？ 何でも、あの方は優美なことが大嫌ひで、婦人たちさへ杖で打たれたといふぢやありませんか。」と、フォードル・パーヴロキッチは正面の階段を上りながらいつた。

「ワルソノーフイ長老は、實際、時として、宗教的騎人のやうに見えることがありましたけれど、人の噂には随分つまらぬことが多いのでございませう。杖で人を打たれたなどいふことは決して一度もありません。」と僧は答へた。「それではちよつと皆さん、お待ち下さい、ただ今皆さんのおいでを知らせて参りますから。」

「フォードル・パーヴロキッチ、これが最後の約束ですよ。いいですか。十分に言行を謹んで下さいよ。でない、僕にも考へがありますよ。」ミウソフは急いでもう一度さう囁いた。

「何でまた、あなたがさうひどく興奮されるのか、とんとわからん、」とフォードル・パーヴロキッチ

はからかふやうに言つた。「それとも罪障のほどが恐ろしいんですかい？ 何でも長老は相手の眼つきだけで、どんな人物で何の用に來たかといふことを見抜いてしまふさうですから。しかし、あなたのやうなちやきちやきの巴里ついで自由主義の紳士が、どうしてそんなに坊主どもの思惑を氣になさるんでせう。まったく、びつくりしてしまいましたぜ、ほんとに！」

しかし、ミウソフがこの厭味に應酬する暇もないうちに、一同はなかへ招じ入れられた。彼は幾分むしやくしやした氣色ではいつて行つた……。

『もう、ちやんと今から分かつてる、おれは癩癩を起こして喧嘩をおつばじめる……赫となつたが最後——自分も自分の思想も卑しめるくらゐがおちだ。』さういふ考へが彼の頭をかすめた。

II

老いたる道化

彼等が部屋の中へ入ると殆んど同時に、長老が自分の寢室から出て來た。僧房では一行に先立つて二人の修道僧が、長老の出て來るのを待ちうけてゐた。一人は司書で、もう一人はさして年寄りではないが、病身で、人の噂では非常に學識の高い、バイーシイ神父であつた。その他にもう一人、片隅に立

つて待つてゐる若い男があつた（この男はそれから後もすつと立ちどほしであつた）。見たところ二十二くらい年の恰好で、普通のフロックコートを着てゐる。これはどういふ譯でか修道院と僧侶團の庇護をうけてゐる神學校卒業生で、未來の神學者なのであつた。彼はかなり脊が高く、生々とした顔に、顴骨が廣く、聰明らしい注意深い眼は細くて鶯色をしてゐる。その顔には非常に恭しい表情が浮かんでゐるが、それは極めて禮儀にかなつたもので、少しも人にとりいらうとするやうなところが見えない。入つて來た客に對しても、彼は挨拶をしなかつた。それは自分が人の指揮監督をうける身分で、對等の人間ではないからと遠慮したのである。

ゾシマ長老は別の道心とアリオーシャに伴はれて出て來た。僧たちは立ち上つて、指の先が床に届くほど、極めて恭しく彼に敬禮した。それから長老の祝福をうけると、その手に接吻するのであつた。彼らを祝福してから、長老もやはり指が床につくらゐる一人一人に會釋を返して、こつちからも一々祝福を求めた。かうした禮式はまるで毎日しきたりの型のやうではなく、非常に謹嚴に殆んど一種の感激さへ伴なつてゐた。しかしミウソフには一切のことが、わざとらしい思はせぶりのやうに見えた。彼は一緒にはいつた仲間の先頭に立つてゐた。で、よし彼がどんな思想を抱いてゐるにもせよ、ただ禮儀のためとしても（ここではそれが習慣なのだから）、長老の傍へ寄つて祝福をうけなければならぬ、手を接吻しないまでも、せめて祝福を乞ふくらゐのことはしなくてはならない——それは彼が昨夜から考へてゐたことである。ところが、今かうした僧たちの會釋や接吻を見ると、彼は忽ち決心を翻してしまつた。そして勿體らしく生眞面目に、普通世間一般の會釋をすると、そのまま椅子の方へ退いてしまつ

た。フォードル・パーヴロキツチも非常に物々しい町囃な會釋をしたが、やはり直立不動の姿勢をとつてゐた。カルガーノフはすつかりまごついてしまつて、まるつきりお辭儀もしなかつた。長老は祝福のために上げかけた手をおろして、もう一度客に會釋をして着席を乞ふた。紅潮がアリョーシャの頬に上つた。彼は羞かしくて堪らなかつた。不吉な豫感が事實となつて現はれはじめたのである。

長老は革ばりの、恐ろしく舊式な造りのマホガニイの長椅子に腰をおろし、二人の僧を除く一同の客を、反對の壁際にある、黒い革のひどくすれた四脚のマホガニイの椅子に、並んで坐らせた。二人の僧は兩側に、一人は戸の傍に、もう一人は窓際に座を占めた。神學生とアリョーシャと、もう一人の道心とは立つたままであつた。僧房全體が非常に狭くて、何となく殺風景であつた。調度や家具の類は粗末で貧弱な、ただもうなくてはならない品ばかりであつた。鉢植の花が窓の上に二つと、それから部屋の隅に澤山の聖像が掛けてある——その中の一つは大きな聖母の像で、どうやら宗派分裂よりよほど前に描かれたものらしい。その前には燈明がとぼつてゐる。その傍らには金色燦然たる聖飾をつけた聖像がもう二つ、またそのぐるりには作りものの第一天使やら陶器の卵やら、『嘆きの聖母』に抱かれた象牙製の加特力式十字架やら、前世紀のイタリイの名畫から複製した、舶來の版畫やらであつた。かうした優美で高價な版畫のほかに、聖徒や殉教者や僧正などを描いた、どこの定期市でも三哥か五哥で賣つてゐる、極めて稚拙な露西亞できの石版畫が、幾枚も麗々しく掲げてある。また現在や過去の露西亞の主教の肖像を石版にしたものも少し掛かつてゐたが、それはもう別の壁であつた。ミウソフはかういふ『繁文得禮』にさつと一わたり目を通してから、じつと執拗な凝視を長老に投げた。彼は自分の見解を

自負する弱點を持つてゐた。尤も、これは彼の五十といふ年齢を勘定に入れれば、大抵ゆるすことのできる缺點である。實際、この年配になると、賢い、世馴れた、生活に不自由をしない人は、誰でもだんだん自分といふものを尊重するやうになる。

そもそも最初の瞬間からして、彼には長老が氣に入らなかつた。實際、長老の顔にはミウソフばかりでなく、多くの人の氣に入らなところがあつた。それは腰の曲つた、非常に足の弱い、脊の低い人で、まだやつと六十五にしかならないのに、病弱のため、すつと——少くとも十くらゐは老けて見える。顔はひどく萎びて小皺に埋もれてゐる。殊に眼の邊が一番ひどい。薄色の小さな眼ははしつこく、動いて、まるで蟬かしい二つの點のやうにきらきら光つてゐる。白い髪の毛は鬚のあたりに少々残つてゐるだけで、頤髯は疎らで楔がたをしてゐる。その笑を浮かべた唇は、二本の紐か何ぞのやうに細い。鼻は長いといふよりは、鳥の嘴のやうに鋭く尖つてゐる。

『どの點から見ても、意地悪で、高慢ちきな老爺だ。』さういふ考へがミウソフの頭をかすめた。概して彼は非常に不機嫌であつた。

時計が打ち出して話の緒口をつくつた。分銅のついた安もの小さな掛時計が、急調子でかつきり十二時を報じた。

「丁度かつきりお約束の時刻でございます。」とフォードル・パーヴロキツチが叫んだ。「ところが、俾のドミトリイはまだ参りませんので。あれに代つてお詫び申しますよ、神聖なる長老さま！」

* 十七世紀より十八世紀初頭に亘つて行はれた、舊正教よりの各宗派の分裂をいふ。(譯者註)

（この『神聖なる長老さま』でアリオーシャは、思はずぐりとした）當のわたくしはいつでも几帳面で、一分一秒とたがへたことがございません——正確は王者の禮儀なり、といふことをよく辨へてをりますので……。」

「だが、少くとも、あなたは王者ではない。」我慢がならなくて、ミウーソフが直ぐかう呟いた。

「さやう、全くその通りで、王様ぢやありませんよ。それに何ですやミウーソフさん、わしもそれくらゐのことは知つてをりますわい。まつたく！ 狓下さま、わたくしはいつもこんな風に、取つてもつかん時に口を辻らすのでございまして！」どうしたのか一瞬、感慨無量といつた調子で、彼はかう叫んだ。「御覽のとほり、わたくしは真正正銘の道化でございます！ もう正直に名乗をあげてしまひます。昔からの悪い癖でございまして！、しかし、時々取つてもつかん出鱈目を言ひますのも、當があつてのことでございますよ。——どつと人を笑はして、愉快な人間にならう、といふ當があるのでございませわい。とかく愉快な人間になるつてえことが必要でございますからなあ、さうぢやありませんか？ 七年ばかり前に、ある町へ出向いたことがございます。ちよつとした用事がありました。そこでわたくしは幾たりかの小商人と仲間を組んで、警察署長のところへ参りました。それは、ちよつと依頼の筋がありましたして、食事に招待しようといふ寸法だつたのでございます。出て来たのを見ますと、その署長といふのは肥えた、薄い髪の、むつつりとした人物で、——つまりこんな場合に一番けんんな代物なんで。なんしろ、こんな手合は癩癩もちですからなあ、癩癩もちで……。わたくしはその方へづかづかと近寄つて、世馴れた人間らしい無雜作な調子で、『署長さん、どうかその、我々のナブラーウニッ

クになつて頂きたいものでして、』とやつたものです。すると、『一體ナブラーウニックとは何ですわね？』と、かうなんです。わたくしはもう、その初手の瞬間に、こいつはしくじつた、と思ひましたよ。眞面目腐つた顔で突つたつたまま、いつかな頑張つてゐるぢやありませんか。『いえ、その、わたくしは一座を浮き立たすために、ちよつと冗談を言つたまででございますよ。つまりナブラーウニック氏は有名な露西亞の音楽隊長ですからね。ところで、我々の事業の調和のためにも、音楽隊長のやうなものが入用なんでして……。』なかなか巧くこじつけて、ばつを合せたぢやありませんか？ ところが、『眞平だ、わしは警察署長ですぞ、自分の官職を地口にするとは怪しからん。』さう言つてくるりと背中を向けて、出て行かうとします。わたくしはその後から、『さうですよ、さうですよ、あなたは警察署長で、ナブラーウニックぢやありません。』と喚きました。『いいや、一旦さう言はれた以上、わしはナブラーウニックです。』とさ。どうでせう、お蔭でまんまとわたくし共の仕事はおじやんになつてしまひましたわい！ いつもわたくしはかうなんです。決つてかうなんです。徹頭徹尾、自分の愛嬌で損ばかりしてをるのでございます！ もう何年も前のこと、ある一人の勢力家に向かつて『あなたの奥さんは随分くすぐつたがりの御婦人ですな。』と言つたのです。つまり、名譽にかけて、と言ふつもりだつたので、その、精神的な特質をさして言つたのです。ところが、その人はいきなり、わたくしに『ぢや、あなたには家内を搦つたんですか？』と訊きました。わたくしはその、つい我慢が出来なくなつて、まあお愛嬌のつもりで、『ええ、搦りましたよ。』とやつたのです。ところが、その人は早速わたくしをこつび

どく揀つてくれましたたて……。これはもうすつと昔のことなんで、お話しても恥しいとは思ひませんがね。かういふ風に、わたくしは始終、自分の損になることばかりしてをるのでございますよ！」

「あなたは今もそれをやつてるんですよ。」とミウーソフは吐き出すやうにかう言つた。

長老は無言のまま、二人を見くらべてゐた。

「さうでせうとも！　そして、どうでせう、ミウーソフさん、わしは口をきると一緒に、ちやんとその事を感じましたよ。そればかりか、あなたが眞先きにそれを注意して下さる、といふことまで感じてをりましたんで。猥下様、わたくしは自分の茶番が巧く行かないと思ふと、その瞬間は、兩方の頬が下の齒齦（はぐら）に干乾びついて、身うちが極（きま）撃つて来るやうな感じがいたしますよ。これはまだ、わたくしが若い時分、貴族の家に居候をして、冷飯（ひやま）にありついてをった頃からの癖でしてな。わたくしは根から生まれている道化で、まあ氣ちがひも同然でございますな、猥下様、これあ屹度、わたくしの中には悪魔が棲んでをるのに違ひございません。尤も、あまり大した代物ぢやありませんまいよ、もう少しどうかした奴だつたら、もつとほかの宿を選びさうなものですからなあ。但し、ミウーソフさん、あんたぢやありませんぜ、あんたもあまり大した宿ではありませんからな。けれど、その代りにわたくしは信じてゐますよ。神様をな。ついこの頃ちよつと疑ひを起こしましたが、その代り、今ではじつと坐つて、偉大な言葉を待つてをります。猥下さま、わたくしはちやうど、あの哲學者のチデロートのやうなものでございますよ。猥下さまは哲學者のチデロートが、あのエカテリーナ女帝の御世の大司教プラトンのところへ參つた話を御存じでございますか。入るといきなり『神はない！』と言ひました。それに對して

偉い大僧正は指を上へあげて、『狂へる者は己が心に神なしと言ふ！』と答へられました。するとこちららは、いきなりがばとその足許へ身を投げて、『信じます、そして洗禮をうけます。』と叫んだのでございます。そこで直ぐさま洗禮が施されましたが、ダシニワ公爵夫人が教母で、ポチョームキン元帥が教父でしてな！……」

「フョードル・パーヴロキッチ、もう聞いちゃあゐられない！　あなたは自分でも出鱈目を言つてることが分かつてるんでせう、その馬鹿々々しい口癖が眞赤な嘘だつてことが。一體あなたは何のためになそんな駄法螺を吹くんです？」ミウーソフは、もう少しも自分を抑へようとしないうで、聲を慄はせながら、かう言つた。

「これは嘘だ——といふ感じは生涯、抱いて來ましたんで、」とフョードル・パーヴロキッチは夢中になつて叫んだ。「その代り皆さん、今度は嘘いつはりのないところを申し上げますよ。長老さま！　どうぞお赦し下さい。一番しまひに申しました、あのチデロートの洗禮の話は、わたくしがたつた今、自分で作つたのでございます。今お話ししてゐるうちに考へついたことで、以前には頭に浮かんだこともありません。つまりびりつとさせるために、つけ足したのでございます。ミウーソフさん、わしが駄法螺を吹くのは、ただ少しでも愛嬌者になりたいからですよ。尤も、時々自分でも何のためだか分からんことがありますね。そこで、チデロートの事ですな、あの『狂へる者は』つて奴ですよ、あれはわたしがまだ居候してゐた若い時分に、こちらの地主たちから、二十ぺんも聞かされたものですよ。あなたの伯母御のマーウラ・フオーミニシツナからも、いつか聞いたことがあります。あの連中は、無

神論者のチデロートが神様の議論をしに、プラトン大司教のところへ行つたことを、いまだに信じてゐるのですよ……」

ミウソフは立ちあがつた。それは我慢しきれなくなつたためばかりでなく、前後を忘れてしまつたからである。彼は狂暴な怒りに驅られてゐたが、そのために自分自身が滑稽に見えることも自覺してゐた。實際僧房の中には、何かしら殆んどあり得べからざるものが起つてゐたのである。この僧房へは、先代、先々代の長老の時分から、もう四五十年ものあひだ、毎日來訪者が集まつて來たが、しかしそれは凡て深い敬虔の念を抱いて來るものばかりであつた。この僧房へ通される人は大抵誰でも、非常な恩恵を施されたやうな心持で、ここへはいつて來るのであつた。多くの者は一たん跪くと、初めから終りまで、その膝を上げることができなかった。單なる好奇心か、又はその他の動機によつて訪ねて來る『上流の』人たちや、最も博學多才な人々のみならず、過激な思想を抱いた人たちですら、ほかの者と同席か、または差し向かひの對面を許されて、この僧房の中へはいつて來ると、すべて一人残らず、會見の初めから終りまで深い尊敬を示し、細心の注意を拂ふのを、第一の義務と心得るのであつた。その上、ここでは金銭といふものは少しも問題にならず、一方からは愛と慈悲、他方からは懺悔と渴望——自己の心靈上の困難な問題、もしくは自己の心内の生活の困難な瞬間を解決しようといふ渴望が存在するばかりであつた。それ故、今フョードル・パーヴロキッチが場所柄も辨へずにさらけ出した、かうしたふざけた態度は、同席の人々、少くともその中のある者に、疑惑と驚愕の念を喚び起こした。それでも二人の憎は少しも表情を變へず、眞面目な心構へで、長老が何と言ふたらうかと注視してゐたが、や

はりミウソフと同じやうに、もう座にゐたたまれない様子であつた。アリョーシャは今にも泣きださうな顔をして、首うな垂れて立つてゐた。何より不思議なのは兄のイワンである。彼は父に對してかなり勢力を持つてゐる唯一の人間だから、今にも父を宥めてくれるかと、アリョーシャはそればかり當てにしてゐるのに、彼は眼を伏せたまま、身じろぎもしないで椅子に腰かけてゐる。そしてこの事件には何の關係もない赤の他人のやうに、物珍らしさうな好奇の色を浮かべながら、事件がどんな風に落着するかを、待ち設けてゐるかの觀があつた。アリョーシャはラキーチン（神學生）の顔さへ、眺める事ができなかつた。それはやはり彼の親しい知合ひで、親友といつてもいいほどの間柄であつた。彼はその肚の中をよく知つてゐた（尤も、それが分かるのは、修道院ぢゆうでアリョーシャ一人きりであつた）。「どうかお赦し下さい、」とミウソフは長老に向かつて口をきつた。「事によると私も、この悪巫山戯の共謀者のやうに、あなたのお目に映るかも知れませんが、たとへフョードル・パーヴロキッチのやうな人でも、ああいふ尊敬すべき方をお訪ねする場合には、自分の義務を辨へてゐることと信じたのが、私のそもその過ちでございました……。私はまさかこの人と一緒に伺つたことで、お赦しを乞ふやうなことになるとは、思ひもかけませんでした……」

ミウソフは最後まで言ひきらないうちに間違つてしまつて、そそくさともう出て行きさうにした。

「御心配なされますな、お願いですぢや。」突然、長老はひよわい足を伸ばして中腰に席を立つと、ミウソフの兩手を取つて再び彼を肘椅子に坐らせた。「落ちついて下され、お願いですぢや。別してあ

なたには、わしの客となつて貰ひたうござりますのぢや。」彼は會釋をすると、向きを變へて再び自分の長椅子に腰をおろした。

「神聖な長老さま、どうか仰しやつて下さいまし、わたくしがあんまり元氣すぎるために、お腹立ち
はなさりませんか、どうか？」と不意に、肘椅子の手摺を両手に掴んで、返答次第では、その中から飛
び出しかねないやうな身構へをしながら、フォードル・パーヴロキツチが叫んだ。

「どうかお願ひですぢや、あなたも決して、御心配や御遠慮をなさらぬやうにな、」と長老は諭すやう
に言つた。「どうか遠慮をなさらぬやうにな、自分の家にゐるのと同じつもりでゐて下され。何はとも
あれ第一に自分で自分を恥ぢぬことが肝腎ですぞ。これがそもそも、一切のもつてすからな。」

「自分の家と同じやうに？　つまり開けつばなしでござりますな？　ああそれは勿體なさ過ぎます、
勿體なさ過ぎます、がしかし——悦んでおうけいたしませう！　ところで、長老様、開けつばなしでな
どと、わたくしを煽らないで下さい、險存でござりますよ……開けつばなしといふところまでは、ちよ
つと當人のわたくしも、行き着きかねます。これは、つまりあなたを護るために、前もつて御注意す
るのでございます。まあ、その他のことは、まだ未知の闇に包まれてをります。尤も、中には、わたく
しといふ人間を誇張したがつてをる御仁もあります。これはミウソフさん、あなたに當てて言つ
てることです。ところで、猥下、あなた様にむかつては満腔の歡喜を披瀝いたします！」彼は立ち
上つて両手を差し上げると、言ひ出した。「『汝を宿せし母胎と、汝を養ひし乳頭は幸なり』、別して乳
頭でございます！　あなた様はただ今『自分を恥ぢてはならぬ、これは一切のもつた』と御注意くだ

さりましたが、あの御注意でわたくしを腹の底まで見透しなさいましたよ。實際、わたくしはいつも人
の中へはいつて行くと、自分は誰よりも一番卑劣な人間で、人がみんな寄つてたかつてわたくしを道化
あつかひにするやうな氣がするのでございます。そこで、『よし、そんなら本當に道化の役をやつて見
せてやらう。人の思惑など構ふものか。どいつもこいつもみんな、わしより卑劣な奴らばかりだ！』つ
てんで、わたくしは道化になつたのでございます。恥かしいが因の道化でございますよ、お偉い長老さ
ま、恥かしいが因なのでございます。小心翼々たればこそ、やんちやもするのでございます。もし、わ
たくしが人前へ出る時に、みんながわたくしを面白い利口な人間だと思つてくれるといふ、確信があつ
たならば、その時のわたくしは、どんなに人間になつたこととございませうなあ！　師の御坊！」
と、いきなり彼は跪いて、「永久の生命をうけ繼ぐために、わたくしは一體どうすれば宜しいのでござ
いませう？」

果たして彼はふざけてゐるのか、それとも實際に感動してゐるのか、今はどちらとも決定することが
難かしかつた。

長老は眼をあげて彼を眺めながら、微笑を含んで、かう言つた。

「どうすればよいかは、自身で疾うから御存じぢや。あなたには分別は充分にありますでな。飲酒に
耽らず、言葉を慎み、女色、別して拜金に溺れてはなりませんぞ。それからあなたの酒場を、皆といふ
譯に行かぬまでも、せめて二つでも三つでもお閉ぢなされ。が、大事なことは、一ばん大事なことは——
—盛をつかぬといふことですぢや。」

「と申しますと、チデロートの一件なんですか？」

「いや、チデロートのことといふ譯ではない。肝腎なのは、自分自身に嘘をつかぬことぢや。自らを欺き、自らの偽りに耳を傾ける者は、つひには自分の中にも他人の中にも、眞實を見分けることができぬやうになる。従つて、自らを侮り、他人を蔑にするに至るのぢや。何びとをも尊敬せぬとなると、愛することも忘れてしまふ。愛がなければ、自然と氣を紛らすために、淫らな情慾に溺れて、畜生にも等しい亂行を犯すやうなこともなりますのぢや。それもこれもみな他人や自分に對する、絶間のない偽りから起こることですぞ。自ら欺く者は何よりもさきにすぐ腹をたて易い。實際、時としては、腹をたてるのも氣持のよいものぢや。な、さうではありませんかな？ さういふ人はちやんと承知してをりますのぢや、——誰も自分を辱めたのではなく、自分で侮辱を思ひついて、それに潤色を施すために嘘をついたのだ。一幅の繪に仕上げるために、自分で誇張して、僅かな他人の言葉に楯衝いて、針ほどのことを棒のやうに言ひふらしたのだ、——それをちやんと承知してをる辯に、われから先に腹を立てる。それもいい氣持になつて、何とも言へぬ満足を感じるまでに腹を立てるのぢや。かうして本當の仇敵のやうな心持になつてしまふのぢや……。さあ、立つてお掛け下され、どうかお願ひですぢや、それもやはり偽りの所作ではありませんかぬかな。」

「お聖人様——どうぞお手を接吻させて下さいませ。」フォードル・パーヴロキツチはびよんびよんと飛びあがると、長老の瘦せこけた手をすばやくちゆつと接吻した。「まったく、まったくその通り、腹を立てるのがいい氣持なんですか。ほんとによく仰しやりなされました、これまで、わたくし

はさういふお話は聞いたことがありません。まったくその通りで、わたくしは生涯の間いい氣持になるまで腹を立てて参りました。つまりその、美的に腹を立てたのでございますよ。なぜといつて、侮辱されるといふやつは、氣持がいいばかりでなく、どうかすると美しいことがございますからな。この美しいといふことを一つお忘れなされましたよ、長老様！ これは手帳へ書きつけて置きますわい！ところで、わたくしは徹頭徹尾、嘘をつきました。それこそ一生のあひだ毎日毎時間、嘘をつきました。まことに偽りは偽りの父なり！——でございますよ。もつとも、偽りの父ではないやうでございますすな。いつもわたくしは聖書の文句にはまごつきますので。まあ、偽りの子にしたところで結構なんですよ。ただしかし……長老様……チデロートの話も、時には宜しうございますよ！ チデロートは害になりません、害になるのは別の話でございます。時に、お偉い長老様、ついでにちよつと伺ひますが、あ、うつかり忘れるところでした、これはもう三年も前から調べて見るつもりで、こちらへ伺つてぜひともお訊ねしようと思つてをりましたのでございます。しかし、ミウソフさんに口出しをさせないやうにお願いいたします。ほかでもありませんが、『殉教者傳』の何處かにこんな話があるついでいふのは、まったくでございますか——それは何でも、ある神聖な奇蹟の行者が、信仰のために迫害を蒙つてをりましたが、とどのつまり首をちよん切られてしまひましたんで。ところが、その行者はひよいと起きあがるなり、自分の首を拾つて、『いとほしげに接吻しぬ』とあるんです。しかも長い間それを手に持つて歩きながら、『いとほしげに接吻しぬ』なんださうです。全體これは本當のこととせうか、どうとせう、神父さん方？」

「いや、それは嘘ですちや。」と長老が答へた。

「どの『殉教者傳』にもそんなやうなことは載つてをりません。一たい何聖人のことがそんな風に書いてあると仰しやるのですか？」と司書の僧が訊ねた。

「それはわたくしもよく存じませんので。いや、一向に知りませんよ。何でもべてんにかけられたとかいふ話ですがな。わたくしも人からの又聞きでして。ところで、いつたい誰から聞いたと思し召しますか。このミウソフさんですよ。たつた今チデロートのことで、あんなに腹を立てたミウソフさんですよ。この人がわたくしに話して聞かせたのです。」

「僕は決して、そんな話をあなたにしたことはありませんよ。それに全體、僕はあなたとなんか、てんで話をしやしませんよ。」

「なるほど、わしにお話しなされたことはありませんが、あなたが人中で話してをられた席に、わしも居あはせたといふ譯ですよ。何でも四年ばかり前のことでしたなあ。わしがこんなことを持ち出したのも、この可笑しな話でもつて、あなたがわしの信仰をぐらつかせなされたからですぜ、ミウソフさん。あなたは何も御存じなしたが、わしはぐらついた信仰を抱いて歸りましたのちや。それ以来いよいよますます、ぐらついて來てをるんですぜ。ほんとにミウソフさん、あなたは大きな墮落の原因なんですぜ。これはもうチデロートどころの騒ぎぢやないて！」

フォードル・パーヴロキッチは悲痛な聲でまくしたてた。しかし一同は、又しても彼が芝居をしてゐるといふことを、もうはつきりと見抜いてゐた。それでもミウソフはひどく氣を悪くした。

「何てくだらないことだ、何もかもくだらないことだ。」と彼は呟いた。「實際、僕はいつか話したことがあるかも知れん……しかしあなたに話したのではない。僕自身も人から聞いたんですからね。何でも巴里にゐた時分に、ある佛蘭西人が、露西亞では『殉教者傳』の中で、こんな話を、彌撒に朗讀するといつて、話して聞かせたんです……その人は非常な學者で、露西亞に関する統計を専門的に研究してゐたんです……露西亞にも永らく住んでゐたことがあります……僕自身は『殉教者傳』など讀んだことはありません……この先きも讀まうとは思つてゐません……いや、全く食事の時などには、どんなことを喋るか知れたもんぢやない……そのときも、ちやうど食事をしてゐたんですからね……」

「左様さ、あなたはそこで食事をしてをられたのでせうが、わじはこの通り、信仰をなくしてしまつたんですよ。」とフォードル・パーヴロキッチがまぜつかへした。

「あなたの信仰なんか、僕に何の用があるんです！」とミウソフは喚きかけたが、急に己れを制して、さげすむやうに言つた。「あなたは全く文字どほりに、自分の觸つたものには泥を塗らずにおかぬ人ですよ。」

長老は不意に席を立つた。

「御免くださいよ、皆さん、わしはちよつと、ほんの數分間、中座させて頂かねばなりませんのぢや。」彼は客に向かつてかう言つた。「實は、あなた方より先きに見えた御仁が待つてをられるのでな。したが、あなたは何にしても、嘘をつかぬがようござりますぞ。」彼はフォードル・パーヴロキッチに向かつて、にこやかな顔でかういひ足した。

彼は僧房を出て行かうとした。アリョーシヤと道心とは階段を扶けおろすために、その後から駆け出した。アリョーシヤは息をはずませてゐた。彼はこの席をはずせるのが嬉しかったのだが、長老が少しも腹を立てないで、機嫌のいい顔をしてゐるのも嬉しかったのだ。長老は自分を待ち構へてゐる人達を祝福するために、廊下をさして歩を運んだ。けれども、フォードル・パーヴォキッチは僧房の戸口で彼を引き止めた。

「あらたかな長老さま！」と彼は思ひ入れたつぷりで叫んだ。「どうかもう一度お手を接吻させて下さりませー 實際あなたはなかなか話せますよ、一しよに暮らせますよ！ あなたはわたくしがいつもこのやうに嘘をついて、道化た真似ばかりしてをるとお思ひなされますか？ とところが、わたくしはあなたを試して見るために、わざとあんな真似をしたのでございますよ。あれは、あなたと一緒に暮らすことができるかどうか、脈を取つて見た譯ですよ。つまり、わたくしのやうな謙遜な者に高慢ちきなあなたと折合がつくかどうかと思ひましてな。ところが、あなたには褒状を差し上げてもよろしいよ——一緒に暮らすことができませんわい。さあ、これでもう口はききません、すつとしまひまで黙つてをります。ちやんと椅子に腰かけて、黙つてをりますよ。さあミウツフさん、今度はあなたが話をする番ですぜ。いよいよあなたが一番役者です……尤も、ほんの十分間だけちやが。」

信心深い女たち

外圍ひの塀に建て増しをした木造の廻廊の下には、今日は、女ばかりが二十人ばかりも押しかけてゐた。彼女らはいよいよ長老様のお出ましと聞いて、かうして集まつて待ちかまへてゐるのであつた。同様に長老を待ちながら、上流の婦人訪問者の爲に設けられた別室に控へてゐた、地主のホフラーコワ夫人も廻廊へ出た。それは母と娘の二人連れだつた。母なるホフラーコワ夫人は富裕な貴婦人で、いつも垢抜けたした服装をしてゐる上に、年もまだかなり若い方で、少し顔色は蒼いけれど、非常に愛嬌のある女で、殆んど眞黒な眼がひどく生々してゐる。年はまだせいぜい三十三四だが、もう五年ばかりも前から寡婦になつてゐる。十四になる娘は足痛風を患つてゐた。この不仕合せな娘はもうこの半年ばかり歩くことができないため、車のついた長い安樂椅子に乗せて、あちこち曳きまはされてゐた。その美しい顔は病氣のために少し瘦せてはゐるけれど、にこにこしてゐた。睫の長い暗色の大きな目には、何となく悪戯らしい光りがあつた。母は春頃からこの娘を外國へ連れて行く氣でゐたが、夏の領地整理のため時期を遅らしてしまつたのだ。母娘はもう二週間ばかりもこの町に滞在してゐるが、それは神信心のた

めといふよりは、寧ろ所用のためであつた。しかし三日前にも一度、長老を訪れたのに、今日また突然二人は、もう長老が殆んど誰にも會へなくなつたことを承知しながら、再びここへ出むいて、もう一度『偉大な治療主を拜む幸福』の恵まれんことを歎願したのである。長老が出て来るのを待つ間、母夫人は娘の安樂椅子の傍の椅子に腰掛けてゐたが、彼女から二歩ばかり離れたところに一人の老僧が立つてゐた。これはこの修道院の人ではなく、あまり有名でない北國の寺から来た僧である。彼も同じやうに長老の祝福を受けようとしてゐるのだ。しかし廻廊に姿を現はした長老は、そこを通り過ぎて眞直ぐに先づ群集の方へ進み寄つた。群集は低い廻廊と庭を繋いでゐる、三段の階段を目ざして詰め寄せた。長老は一番上の段に立つて、袈裟を着けると、自分の方へ押し寄せる女たちを祝福し始めた。と、一人の『憑かれた女』が兩手を取つて、前へ曳き出された。その女は長老の姿を一目見ると、何やら愚かしい叫び聲を立てて、しゃつくりをしながら、まるで驚風患者のやうに全身をがたがた慄はせ始めた。長老がその頭の上へ袈裟を載せて、短い祈禱を唱へると、病人は忽ち靜かになつて落ちついてしまつた。今はどうか知らないが、自分の子供時代には、村や修道院で、よくこんな『憑かれた女』を見たり、噂に聞いたりしたものである。かういふ病人を教會へつれて來ると、堂内に響き渡るやうなけたたましい叫び聲をあげたり、犬の吠えるやうな聲を立てたりするが、聖餐が出て、その傍へ連れて行かれると、『憑きものの業』はすぐやんで、いつでも病人は暫くのあひだ落ちつくものだつた。かうした事實は子供の自分をひどく驚かせた。しかしその頃、地主の誰彼や、殊に町の學校の先生などに根柢り葉掘り訊いて見たら、あれは仕事をするのが厭であんな眞似をするだけで、適當な非常手段を用ひさへすれば、いつ

でも根絶することのできるものだを説明して、それを裏書きするやうないろの珍談を持ち出して聞かせてくれた。ところが後日、専門の醫者から、それは決してお芝居ではなくて、わが露西亞に特有のものらしい恐ろしい婦人病だと聽いて、二度びつくりした次第である。これはわが國農村婦人の慘澹たる運命を説明する病氣で、何ら醫藥の助けを借りない無茶な難産をした後、餘りに早く過激な労働につくことから生ずるものであるが、その他、か弱い女性の常として、とても堪へられるものでない、絶對絶命の悲しみとか、折檻とかいふやうなものも、その原因になるとのことである。病人を聖餐の傍へ連れて行くや否や、今まで荒れ狂つたり、じたばた跳いてゐたものが、不意にけろりと治る不思議な事實も、それはただのお芝居で、事によつたら『賣僧ども』の手品かも知れぬ、とのことだつたけれど、これも多分きはめて自然に生じたことであらうと思ふ。恐らく病人を聖餐の傍へ連れて行く女たちと、殊に病人自身が聖餐の傍へ寄つて頭を屈めさへすれば、病人に取り憑いてゐる悪靈が、どうしても踏みこたへることができないものと、一定の眞理か何ぞのやうに、信じきつてゐるのであらう。それゆゑ必然的な治癒の奇蹟を期待する心と、その奇蹟の出現を信じきつてゐる心とが、聖餐の前に屈んだ瞬間、神經的な精神病患者の肉體組織に、非常な激動を惹き起こすのであらう（否、惹き起こすべき筈である）。かやうにして奇蹟は、僅かの間ながら、出現するのであらう。長老が病人を袈裟で蔽ふやいなや、丁度それと同じ奇蹟が起こつたのである。

長老のそば近く奔いてゐた多くの女たちは、その瞬間の印象に喚び醒まされた感動に隨喜の涙を流した。中にはその法衣の端でも接吻しようとして押し寄せる者もあれば、何やら經文を唱へる者もあつ

た。長老は一同を祝福して、二三の者と言葉を交した。『憑かれた女』は彼もよく知つてゐた。これはあまり遠くない、修道院から六露里ほど離れた村から連れられて來たので、以前もちよいちよい來たことがあつた。

「ああ、あれは遠方の人ぢや！」と、決して年を取つてゐる譯ではないが、恐ろしく瘦せほうけて、目に焼けたといふではなくて、眞黒な顔をした、一人の女を指さして、彼は言つた。その女は跪いて、じつと目を据ゑたまま長老を見つめてゐた。その目の中には何となく法悦の色があつた。

「遠方でございますよ、神父様、遠方でございますよ、ここから二三露里もござります。遠方でございますよ、神父様、遠方でございますよ」と、首をふらふらと左右に振るやうな鹽梅に、掌へ片頬を載せたまま、歌でもうたふやうに女は言つた。その口調がまるで愚痴をこぼしてゐるやうであつた。民衆の間には無言の、どこまでも辛抱づよい悲しみがある。それは自己の内部に潜んで、じつと黙つてゐる悲しみである。しかし、また張ち切れてしまつた悲しみがある。それは一たん涙と共に流れ出すと、その瞬間から愚痴つぽくなるものである。それは殊に女に多い。しかし、これとても決して無言の悲しみより忍び易い譯ではない。愚痴といふものは、ひとときは心を刺戟し、掻き撈ることによつて、やうやく悲しみを紛らすばかりである。かうした悲しみは慰藉を望まないで、諦めきれぬ苦惱を餌食にするものである。愚痴とは、ひたぶるに傷口を喰ひ裂いてゐたいといふ要求に他ならない。

「町家の御仁ぢやらうな？」と、好奇の目で女を見つめながら、長老は語をついだ。

「町の者でございます、神父様、町の者でございます、農家の生まれでございますが、今は町方の

者でございます。町に住まつてをりますんで。お前様に一目お目にかかりに参りました。お噂を聞きましたのでなあ。小さい男の子の葬ひをしておいて巡禮に出たのでございます。三ところのお寺へお参りしましたところ、わたくしに、『ナスターシャ、こちらへ——つまりお前さまのことでございますよ、——こちらへ行つて見ろ』つて教へて呉れましたので。こちらへやつて参じまして、昨日は宿屋に泊りました。今日はかうしてお前さまのところへ参じましたんで。」

「何を泣いてをいでぢやな？」

「俵が可哀さうなのでございます、神父さま、三つになる子供でございました、まる三つにたつた三月足りないだけでございました。俵のことを思つて苦しんでをるのでございます。それも、たつた一人あとに残つた子でございました。ニキートカとの間に四人の子供をまうけましたが、どうもわたくし共では子供が育ちません。どうも、神父さま、育たないのでございます。上を三人なくした時には、それほど可哀さうにも思ひませなんだが、こんどの末子だけは、どうにも忘れることができません。まるでかう目の前に立つてをるやうで、どかないのでございます。まるで胸の中も濁あがつてしまひました。あれの小さい着物を見ては泣き、シャツや靴を見ては泣くのでございます。あの子が後に残して行つたものを、一つ一つ擴げて見れば、おいおい泣くのでございます。そこで配偶つなごのニキートカに、どうか巡禮に出しておくれと申しましたのでございます。配偶は馬車屋でございますが、さほど暮らしに困りませぬので、神父様、さほど暮らしには困りませぬので。獨り立ちで馬車屋もいたしてをりまして、馬も車もみんな自分のものでございます。けれど今となつて、こんな身上が何の役に立ちませう？ わたく

しがをりませんでは、屹度うちのニキートカは無茶なことをしてゐるに違ひありません。それはもう確かな話でござりますよ。以前もさうでございました。わたくしがちよつと眼を放すと、すぐもうぐらつくのでございますよ。でも今ではあの人のことなど考へはいたしません。もう家を出てから三月になります。わたくしはすっかり忘れてしまひました、何もかも忘れてしまつて、思ひ出すのも厭でございませぬ。それに今更あの人と一緒にたつたところで、何といたしませう。わたくしはもうあの人とは縁を切つてしまひました。誰とも縁を切つてしまひました。自分の家や持物なんぞ見たいとも思ひませぬ。なんにも見たいとは思ひませぬ！」

「のう、おつかさん、」と長老が口をきつた。「昔の豪い聖人様が、お前と同じやうに寺へ来て泣いてをる母親を御覧になられてな、それはやつぱり、神様に召された一人子を思つて泣いてゐる母親ぢやつたのぢやが、聖人さまのいはれるには、『一體お前は小さい子供が神様の前では、わがまま一杯にしてをるといふことを知らぬのか？ 幼い子供ほど神の國でわがまま一杯なものはないのぢや。子供らは神様に向かつて、あなたはわたしたちに生命を恵んで下さつたけれど、ちらと世の中を覗いただけで、もう取り上げておしまひになつた、など駄々を捏ねて、今すぐ天使の位を授けて下されと強請むのぢや。ぢやによつてお前も悦ぶがよい、泣くことはないのぢや、お前の子供はいま神様のお傍で、天使たちといつしよに暮らしてゐるのぢやから。』かうその昔、聖人が泣いてをる母親を諭された。それは豪い聖人のことぢやから、間違つたことを言はれる筈がない。そなたの子供も今はきつと、神様の御坐所の前で遊び戯れながら、そなたのことを神様に祈つてをることぢやらう。それぢやによつて、そなたも泣か

ず、悦ばねばならぬのぢや。」

女は片手で頬杖をつきながら、伏目になつて聴いてゐた。彼女はほうつと溜息をついた。

「それと同じことを言つて、ニキートカもわたくしを慰めてくれました。お前さまのお言葉とそつくりそのままでございました。『譯の分らん奴ぢやよ、何を泣くことがあるんだ、うちの坊やも今ごろはきつと神様のそばで、天使たちと一緒に歌でもうたつてをるにきまつてをるよ。』配偶はかう言ひながら、その辯、自分でも泣いてをるのでございます。見ると、やつぱりわたくしと同じやうに、泣いてをるのでございますよ。で、わたくしはさう言つてやりました。『お前さん、それはわしも知つてゐるよ、あの子は神様のそばでなくては、ほかにゐるところはありませんさ。けれど、今ここに、わしらの傍には一緒にをらん、前のやうにここに坐つてはをらんだもの！』とね。ほんとは、わたくしはほんの一遍きりでも、あれが見たうございます。ほんのちよつとでよいから、あれが見たいのでございますよ。傍へ寄つたり聲を掛けたりできなくても構ひませぬ。あれが以前のやうに、戸外で遊んでゐるところや、こちらへやつて来て、あの可愛らしい聲で、『母ちゃん、どこにゐるの？』つて呼ぶのを、どこかの隅に隠れてをつて、ほんのちらりとでも、見たり聴いたりしたうございます。あの小さい足で部屋の中を歩くのが聞きたうございます。あの小さい足でここと歩くのを、たつた一度でも聴きたい。以前よくわたくしのところへ走つて来て、叫んだり笑つたりしましたが、わたくしはたつた一度あれの足音が聴きたい、どうしても聴きたいのでございます。けれども神父さま、もうあれはをりませぬ、あれの聲を聞く時はもうございませぬ！ これここにあれの帯がござりますが、あれはもうをりませぬ。もうあ

れを見ることはできません。あれの聲を聞くことはできません……」

彼女は懐ろから小さな組紐の、わが子の帯を取り出したが、それを一目見ると、両手で顔を蔽つて、身を慄はせながら泣き崩れた。そして不意に迸り出した涙は指の間をつたつて流れるのであつた。

「ああそれは、」と長老が言つた、「それは昔の『ラケルわが子らを思ひ歎きて慰むことを得ず。何となれば子らは有らざればなり』とあるのと同じぢや。それがそなたたち母親のために置かれた地上の隔てなのぢや。ああ慰められぬがよい、慰められることはいらぬ。慰められずに泣くがよい。ただ、泣く度毎に携えず、そなたの息子は神様の御使ひの一人となつて、天國からそなたを見おろし、そなたの涙を見て悦んで、それを神様に指さしてをるといふことを、忘れぬやうに思ひ出すがよい。そなたの母としての大きな歎きはまだ永く続くけれど、やがてはそれが静かな悦びとなり、その苦い涙も静かな感動の涙と變つて、罪障を拂ひ心を淨めるよすがとなるだらう。そなたの子供に回向をして進ぜようが、名前は何といつたのぢやな？」

「アレクセイでございます。神父さま。」

「よい名前ぢや。アレクセイ尊者にあやかつたのぢやな？」

「尊者でございます。神父さま、アレクセイ尊者でございます！」

「それは何といふ聖い子ぢや！ 回向をして進ぜよう、回向をして進ぜよう！ それからそなたの悲しみも祈禱の中で告げてあげようし、配偶つれづれの息災も祈つてあげよう。ただ、配偶つれづれを捨てて置くのはそなたの罪になるのぢや。歸つて面倒を見てやりなされ。そなたが父親を見捨てたのを天國から見たら、そ

の子はそなたたちのことを思つて泣くぢやらう。どうしてそなたは子供の冥福に傷をつけるのぢや？ その子供は生きてをるのぢやよ。おお生きてをるとも、魂は永久に生きるものぢやもの。家にこそ居らねど、見え隠れにお前がたの傍についてをるのぢや。それなのにそなたが、自分の家を憎むなどといったら、どうして子供が家へはいつて来られよう！ お前がた二人が、父親と母親がいつしよにをらぬとしたら、子供は一體どつちへ行つたらよいのぢや？ 今そなたは子供の夢に苦しんでをるが、配偶つれづれのところへ歸つたなら、子供が穩かな夢を送つてくれるぢやらう。さあ、おつかさん、歸りなされ、今日すぐに歸りなされ。」

「歸ります、神父さま、お前さまのお言葉に従つて歸ります。お前さまはわたくしの心を見抜いて下されました。ああ愛しいニキートカ、お前さんはこのわたしを、待ちかねてゐさつしやらうなあ、ニキートカ、さぞ待ちかねてゐさつしやらうなあ！」とまたもや女は、愁歎を繰り返しかへしさうになつたが、長老はもう別の老婆の方へ向いてゐた。それは巡禮風ではなく、町の者らしい服装をしてゐた。その眼つきから、何か用事があつて相談に来たものらしいことが、それと窺はれた。彼女は遠方から来たのではなく、この町に住んでゐる下士の寡婦あづまだなと名乗つた。息子のワーシエンカといふのが、どこか被服廠あたりに勤務してゐたが、西伯利亞のイルクーツクへ出むいて、そこから二度手紙をよこしたきり、もうまる一年もたよりがない。老婆は問ひ合せもして見たが、正直なところ、何處へ問ひ合せたらいいか

* 三六〇……四一、有名な羅馬人の息、結婚の日の母の涙を出奔して修道生活を送り、十七年の後、人知れず生家へ歸り、無りを離りながら、悔める者の脚に身を捧げし人。このアレクセイを指へた祈禱歌は聖西亜で有名なものである。

もわからないのであつた。

「ところがつい先き頃、ステパニーダ・イリイニシナ・ペドリヤーギナといふ、金持の商家のお内儀さんが、『プローホロヴナ、いつそ息子さんの名前を過去帳へ書き込んで、お寺様へ持つて行つてお経を上げてお貰ひよ。さうすれば息子さんの魂が惱み出して、きつと手紙を寄こすやうになるよ。それは現金なもので、これまでも度々験されたことなんだから』つて、さうステパニーダさんが言ふんですけれど、わたしはどうかと存じますんで……。神父さま、一體ほんたうでございませうか、そんなことをして宜しいものでございませうか？」

「そのやうなことは考へることもなりませぬぞ。訊ねるのも恥かしいことぢや。第一、生きてをる魂を、それも現在生みの母が供養をするなどといふことが、どうしてできるのぢや？ それは大きな罪で、妖術にも等しいことぢや。ただ、そなたは何も知らなんだのぢやから是非もないが。それよりも、すぐに、誰にでも味方をして助けて下さる聖母様にお祈りをして、息子の息災でをりますやうに、また間違つた考へを起こした罪をお赦し下さりませやうにと、お願いしたがよろしいぞ。それからプローホロヴナ、わしはそなたにこれだけのことを言つておかう。——その息子さんは近いうちに自分で歸つて来るか、それとも手紙を寄こすにきまつてをる。そなたもそのつもりでをるがよい。さあもう安心して歸りなされ、そなたの息子は息災でをるのぢやよ。」

「お有難い長老さま、どうかあなた様に神様のお恵みのありますやうに！ ほんにあなた様はわたくし共の恩人でございます。わたくし共一同のために、またわたくし共の罪障のために、代つて祈つて下

さるお方様でいらつしやいます！」

が、長老はもう、自分の方へじつと注がれた、瘦せ衰へた肺病やみらしい、まだ若い百姓女の、熱した二つの瞳を群集の中に見とめてゐた。彼女が無言のまま、見はつてゐる兩眼は、何か希ふもののやうであつたが、彼女は傍へ近づくのを怖ぢ恐れてゐるやうな様子だつた。

「そなたは何の用で來たのぢやな？」

「わたくしの魂を救して下さいませ。」低い聲で徐ろにかう言ひながら、彼女は膝をついて長老の足もとにひれ伏した。

「神父さま、わたくしは罪を犯しました、自分の罪が恐ろしくございます。」

長老は一番下の段に腰をおろした。女は膝を突いたまま、その傍らへにじり寄つた。

「わたくしは寡婦になつて三年になります。」女はぶるぶると身を慄はすやうにしなから、囁き聲でかう言つた。「わたくしは嫁に行つて辛い辛い思ひをいたしました。配偶が年寄りで、ひどくわたくしをぶち打擲いたしましたのでございます。それが病氣で寝つきました時、わたくしはその顔をつくづくと見ながら思ひました、もしこの人が快くなつて起きるやうになつたらどうしようか？ と、その時、あの恐ろしい考へが、ふとわたくしの心に浮かんだのでございます！」

「お待ち！」さう言つて長老は、耳を女の口の間近へ持つて行つた。女は低い囁き聲でさきを續けたので、殆んど何ひとつ聞き取ることが出来なかつた。間もなく女は話し終つた。

「三年になるのぢやな？」

「三年目でございます。はじめのうちは何とも思ひませなんだが、この頃では、ぶらぶら病にかかるほど、気がふさいで参りました。」

「遠方かな？」

「ここから五百露里でございます。」

「懺悔の時、話したのぢやな？」

「話しましてございます、二度も懺悔をいたしました。」

「聖餐は頂いたかな？」

「頂きました。恐ろしいでございます、死ぬのが恐ろしいでございます。」

「何も恐れることはない、決して恐れることはない、くよくよすることもいらぬ。ただあなたが懺悔の心を衰へぬやうにしさへすれば、神様は何もかも赦して下さるのぢや。それに、眞實ところに後悔してをる者を神様が赦して下さらぬやうな、そんな罪業は、決してこの世にあるものではない、またあるべき筈もないのぢや。それにまた、限らない神様の愛をさへ失つてしまふやうな、そんな大きな罪が犯せるものではない。それとも神様の愛でさへ追つつかぬやうな罪でもあるといふのか？ ひたすら怠りなく、懺悔精進して、恐ろしいといふ心を追ひ退けるがよい。神様はあなたのたうてい考へ及ばぬやうな愛を持つてゐらつしやるぞ、たとへそなたに罪があらうとも、そなたの罪のままに、そなたを愛していらつしやるといふことを信じなされ。一人の悔い改むるもののためには、十人の正しきものによつてよりも、天國に登びほすべければと、昔から言つてある。さあ歸りなされ、恐れることはない。人のい

ふことを気にしたり、侮蔑に腹を立てたりしてはならぬ。死んだ配偶がそなたを辱しめたことは一切ゆるして、眞底から伸直りをするのぢや。もし後悔してをるとすれば、つまり愛してをるのぢや、もし愛してゐるならば、そなたはもはや神の子ぢや……愛はすべてのものを贖ひ、すべてのものを救ふ。現にわしのやうにそなたと同じく罪ぶかい人間が、そなたの身の上に心を動かして、そなたを憫んでをるくらゐぢやもの、神様はなほのことではないか。愛はまことにこの上もない寶で、これがあれば世界ぢやうを買ふこともできる。自分の罪はいふまでもなく、人の罪でさへ贖ふことができるのぢや、さあ歸りなされ、怖れることはない。」

彼は女に三度まで十字を切つてやり、自分の頭から聖像をはづして、それを女にかけてやつた。女は無言のまま地に額づいて伏し拜んだ。長老は立ち上ると、乳呑子を抱いた丈夫さうな一人の女を、機嫌よく眺めるのだつた。

「ウイシェゴリーエから参りましたよ。」

「それは六露里からあるところを、子供を抱いて、さぞ草臥れたぢやらう。何の用ぢやな？」

「お前さまを一目おがみに参りました。わしはようお前さまのところへ参じますだに、お忘れなされましたかね？ わしを忘れなされたとすりや、あんまり物憶えのええお方ではないと見えるだ。村ではお前さまが患つてゐなさるちうこんだで、ちよつとお見舞ひにと思つて参りました。ところがお目にかかつて見れば、何の御病氣どころか、まだこの先き二十年でも生きなされますよ、本當に。どうか息災でゐておくんなさりました！ それにお前さまのことを祈つてをる者は大勢ありますで、お前さ

まが思ひなどなされる筈がござりましねえだよ。」

「いや、いろいろと有難う。」

「ついでに一つ、ちよつくらお願いがござりますだよ。そうら、ここに六十哥ござりますだで、これを、わしより貧乏な女子衆にくれてやつて下さりまし。ここへ來てから考へましただ、長老さまに頼んで、渡してお貰ひ申した方がええ、あの方は誰にやつたらええか、よう御存じぢやから、となあ。」

「有難うよ、かみさん、有難う。わしはそなたの美しい心がけが氣に入つた。必らずその通りに入れて進んぜよう。抱いてをるのは娘かな？」

「娘でござります、長老さま、リザエータと申しますだ。」

「神様がそなたたちふたりに、そなたと稚ないリザエータとに祝福を垂れ給はんことを。ああ、おつかさん、そなたのお蔭で心が晴れ晴れして來ましたわい。では左様なら、皆の衆、左様なら、大切な愛しい皆の衆！」

彼は皆の者を祝福して、一同に叮嚀に會釋した。

IV

信仰の薄い婦人

旅の地主の婦人は下層民との會釋や、その祝福の有様を残らず打ち見やりながら、靜かに流れる涙を手巾で拭いてゐた。それは多くの點でまことに善良な性格をもつた、濃やかな感じの上流婦人であつた。やがて長老が彼女の方へ近づいた時、彼女は歡喜に溢れてそれを迎へた。

「わたくしはただ今の美しい光景を残らず拜見しました、ほんとにどんな切ない思ひをいたしましたでせう……」彼女は感動のために、最後まで言ひきることができなかつた。「ああ、わたくしにはよく分かります、人民はあなたを愛してゐます。わたくしは自分でも人民を愛します、いえ、愛さうと思つてをります。あの偉大な中にも美しい單純なところのある露西亞の人民を、どうして愛さないでゐられませう！」

「お嬢さんの御健康はいかがですか？ あなたはまた、わしと話したいと言はれるのかな？」

「ええ、わたくしは無理やりになつてお願いいたしましたのでございます。わたくしはあなたのお許しが出るまでは、お窓の外にこの膝を地べたに突いたまま、三日でもじつとして待つてゐる覺悟でございます

した。わたくし共はこの歡びに溢れた感謝の心を、腹藏なくお目にかけるために参つたのでございます。あなたは宅のリーザを癒して下さいました、すつかり癒して下さいました。それもあなたは、ただ木曜日にごのお祈りをして下さいまして、お手を頭へ載せて下さつただけではございませんか。わたくし共はそのお手を接吻して、わたくし共の心持を、敬慕の念を汲みとつて頂くために、急いで参つた次第でございます！」

「どうして癒したと仰しやられるのかな？ お嬢さんはやはり椅子に寝てをられるではござりませぬか？」

「ですけれど、夜毎々々の發熱は、ちやうどあの木曜日からすつかりなくなりまして、これでもう二晝夜少しも起こらないのでございます。」と夫人は神經的にせき込みながら言つた。「そればかりか、足までしつかり致しました。昨晩はぐつすりよく寝みましたので、けさ起きました時などびんびんいたしてをりました。この血色を見て下さいまし、この生々した眼を御覽下さいまし。いつも泣いてばかりをりましたものが、今ではにこにここと、いかにも上機嫌で、嬉しさうにしてをります。今日はどうしても立たせてくれと申して聴かないのでございます。そしてまる一分間、自分一人で、何にもつかまらないうで立つてゐるのでございますよ。この子はもう二週間もしたら四班舞踏を踊ると申しまして、わたくしと賭をしたのでございます。わたくしがこの町のお醫者のヘルツェンシエトウベさん呼びましたところ、肩を疎めながら、驚いた、どうも訝しい、とばかり申してゐるのでございますよ。それですのあなた様は、わたくし共がお邪魔をしなればいい、こちらへ飛んで来て禮など言はなければいいが、

とお思ひになつていらつしたのでございますか？ リーズや、お禮を申し上げないかえ、お禮を！」とそれまで笑つてゐたリーズの愛くるしい顔は、急に眞面目になつた。彼女は出来るだけ肘椅子の上から身を浮かせて、長老の顔を見つめながら、彼の前に手を合はせた。が、怵へきれなくなつて、突然笑ひ出した。

「あたしあの人のことを笑つたのよ、そらあの女よ！」我慢がならなくなつて笑ひ出してしまつた自分に對して、子供らしい忌々しさを浮かべながら、彼女はかう言つて、アリオシーヤを指さした。誰にもせよ、この時、長老の一步うしろに立つてゐるアリオシーヤを眺めたものは、一瞬にして彼の兩頬を染めた紅潮に氣がついたことであらう。彼の眼はぱつと輝いて伏せられた。

「アレクセイ・フォードロキッチ、この子はあなたに託かりものをしてゐますのよ……御機嫌は如何？」突然、母夫人はアリオシーヤの方を向いて、美しく手袋をはめた手を差し出したが、語をついだ。長老はつと振り返ると、急にアリオシーヤをじつと見つめた。アリオシーヤはリーザに近寄ると、何となく妙な、間のわるさうな薄笑ひを浮かべながら、彼女の方へ手を差し出した。リーズは勿體らしい顔つきをした。

「カテリーナ・イワーノヴナが、あたしの手からこの手紙をあなたに渡してくれつて。」と彼女は小さな手紙を差出した。「そしてね、是非、至急に寄つて頂きたいつて仰しやつたわ。どうぞ瞞さないで是非いらつして下さいつて。」

* リーズの愛稱。リーズを偽稱西遊記にしたもの。

「あの人が僕に来てくれたつて？ あの人のところへ僕が……どうしてだらう？」アリオーシャは深い驚きの色を浮かべながら、かう呟いた。彼の顔は急にひどく心配さうになつた。

「それは、ドミトリー・フォードロキッチのことや……それから近頃おこつた色んなことで御相談があるのでせうよ。」と母夫人はかいつまんで説明した。「カテリーナ・イワーノヴナは今ある決心をしていらつしやいますの……けれど、そのために是非あなたにお目にかからなければならぬですつて……どうしてですか？ それは無論、存じませんが、何でも至急につてお頼みでしたよ。あなたもさうしておあげになるでせう、屹度、さうしておあげになりますわね。だつて、それは基督教的感情の命令ですもの。」

「僕はこの人にはたつた一度逢つたきりですよ。」と、アリオーシャは依然として合點の行かぬ様子で言葉を續けた。

「ほんとにあの方は高尚な、とても眞似もできないやうな方ですわ！……あの方の苦しみだけから言つてもねえ……まあ、考へても御覽なさいな、あの方がどんなに苦勞をしていらつしたか、またどんなに苦勞をしていらつしやるか、そしてこの先どんなことがあの方を待ちうけてゐるか……ほんとに何もかも恐ろしいことですよ、恐ろしいことですよ！」

「よろしい、では僕参りませう。」とアリオーシャはきつぱり言つて、短い謎のやうな手紙にざつと眼を通して見たが、是非とも来てくれといふ依頼のほかに、何の説明もしてなかつた。

「ああ、それはあなたとして本當に美しい、立派なことなのよ。」不意にリーズは活氣づいてかう叫ん

だ。「だつて、あたしお母さんにさう言つてたのよ——あの人ほどんないことがあつても行きやしない、あの人はお寺で行をしてるんですものつて。まあ本當に、あなたは何といふ立派な方なんでせう！ あたしね、いつもあなたを立派な方だと思つてゐたの。だから今そのことを言ふのが、とてもいい氣持なのよ！」

「リーズや！」と母夫人は窘めるやうに言つたが、すぐにつこり笑つた。

「あなたはすつかりわたしを忘れておしまひになつたのね、アレクセイ・フォードロキッチ、あなたはちつとも宅へいらして下さらないぢやありませんの。ところが、リーズはもう二度もわたしに向かつて、あなたと御一緒にゐる時だけ氣分がいいつて申しましたのよ。」アリオーシャは伏せてゐた眼をちよつと上げたが、また急に眞赤になつて、それからまた突然、自分でもなぜだか分からない微笑を浮かべた。けれども長老はもう彼を見まもつてはゐなかつた。彼は、前に述べた通り、リーズの椅子の傍らで自分を待つてゐた、旅の僧と問答を始めたのである。それは見たところ、極めて質朴な僧らしかつた。つまり身分も低くて、單純で危なげのない世界觀を抱いてはゐるが、それだけに頑固な信仰を持つた僧の一人である。その言葉によれば、彼はすつと北の果てのオブドルスクにあつて、僅か十人しか僧侶のゐないといふ、貧しい聖シルズトル寺院からやつて來たとのことであつた。長老はこの僧を祝福して、いつでも都合のいい時に庵室を訪ねてくれと言つた。

「あなたはどうしてあんなことを思ひきつてなされるのでございませうか？」と僧はだしぬけに、非難するやうに物々しい態度で、リーズを指しながら訊ねた。それは彼女の『治療』のことを仄めかしたの

である。

「これに就いては勿論、まだ語るべき時ではありませんちや。少し軽くなつたからとて、すつかりと治りきつた譯ではないし、それにまた、何か他に原因があるのかも知れませぬでな。しかし、たとへ何か効驗があつたとしても、それは誰の方でもなく、偏に神様の思し召しぢや。何もかも神意から出てるのぢや。時には是非お訪ね下され、」と彼はつけたして僧に言つた。「でない、いつでもといふ譯には参りませぬでな。病身のこと、もうわしの命數もかぞへ盡されてをるのぢやから。」

「いいえ、いいえ、神様は決してわたくし共からあなたを奪ひ取りはなさいませぬ。あなたはまだ長く御存命にたりますとも。」と母夫人が叫んだ。「それにどこがお悪いのございませう？ お見受けしたところ、大層お丈夫さうで、楽しさうなお仕合せらしいお顔つきをしておいでになるではございませんか。」

「今日わしは珍らしく氣分がよいが、しかしそれはほんの束の間のことぢや。それはわしにもよう分かつてをりますちや。わしはもう今では自分の病氣を間違ひなしに見抜いてをりますのぢや。あなたはわしが大變樂しさを顔をしてをると言はれたが、さう言つて頂くほど、わしにとつて嬉しいことはありませんわい。人は幸福のために創られた者ですから。それで、本當に仕合せな人間は、自分はこの世で神の遺訓を果したといふ資格があるのぢや。すべての公明な人、すべての聖徒、すべての殉教者は、みな悉く幸福であつたのぢや。」

「ああ何といふお言葉でございませう、何といふ勇ましい高遠なお言葉でございませう！」と母夫人は叫んだ。「あなたのおつしやることは、一々わたくしの心を突き通すやうでございませう。ですけれど、幸福……幸福……それはいつたい何處にあるのでございませう？ ああ、あなたが若しわたくし共に今日、二度目の對面をお許し下さるほど、御親切でみせられますのなら、この前申し上げなかつたことを——思ひきつてよう申し上げなかつた、永い永い間のわたくしの惱みの種をお聞き下さいまし！ わたくしが惱んでをりますのは、お赦し下さいまし、わたくしが惱んでをりますのは……」かう言ひながら熱烈な感情の發作に驅られて、夫人は長老の前に両手を組み合せた。

「とりわけ何ですか？」

「わたくしの惱んでをりますのは……不信でございませう……」

「神を信じなさらぬのかな？」

「いいえ、違ひます、違ひます、そんな大それたことは考へもいたしません。けれど來世——それが大きな謎でございませう！ これに對しては誰ひとり、誰ひとりとして答へてくれる者がございませぬ！ どうぞお聞き下さいまし。あなたはお醫者でいらつしやいます、あなたは人の心をお見抜きになる方ですらつしやいます。わたくしは、勿論自分の申しあげることに残らず信じて頂かうなどといふ、大それた望みは持つてをりませんが、決して輕はずみな考へで、只今こんなことを申し上げるのではないことは、どこまでも立派に斷言いたします、ほんとにこの來世といふ謎のやうな考へが、苦しいほど、怖ろしいほど、わたくしの心を掻き亂すのでございませう……それだに誰にこの苦しみを訴へたらよいか、生涯わたくしは存じ及びませんでした……けれども今、わたくしは思ひきつてあなたにこれをお訴

へいたします……。まあ、ほんとにあなたは、このわたくしをどんな女だとお思ひ遊ばすでございますか！」夫人は思はず手を拍つた。

「わしの思惑など懸念することはありませんぞ。」と長老が答へた。「わしはあなたの惱みの眞實なことを、何處までも信じきつてをりますぢや。」

「まあ、ほんとに有難うございます！　それで、わたくしはよく目をつぶつて、こんなことを考へるのでございます——若しすべての人が信仰を持つてゐるのだつたら、何處からそれを得たのでせう？　或る人たちの説くところでは、すべてそれは、はじめ自然界の恐ろしい現象に對する恐怖の念から起つたもので、本來は何もあるものではないといふのださうでございます。ところで、わたくしさう思ひますの——かうして一生、信じとほしても、死んでしまへば急に何もかもなくなつてしまつて、ある小説家の書いたもので見ましたやうに、『ただ墓の上に山午夢が生えるばかり』であつたら、まあどうでございますか。それは恐ろしいことでございます！　ほんたうにどうしたら信仰を呼び戻すことができませうかしら？　尤も、わたくしが信じてをりましたのは、ほんの小さい子供の頃だけで、それも何の考へもなく機械的に信じてゐたのに過ぎませんけれど……。どうしたら、本當にどうしたらこのことが證明できませうか、今日わたくしはあなたのお前にひれ伏して、このことをお訊ねしようと思つて、お邪魔に上がったのでございます。だつて、もしこの機をのがしましたら、生涯わたくしの問ひに答へてくれる人はございせんもの。どうしたら證明ができませんか、どうしたら信念が得られませうか？　ほんとにわたくしは薄倖でございます。じつと立つてぐるりを眺めましても、みんな、大抵の人が平氣

な顔をしてゐます、今ごろ誰一人そんなことに心を煩はしてゐる人はありません。ただ一人わたくしだけ、それが堪へられないのでございます。本當にそれは死ぬほど辛いこと、死ぬほど！」

「それは疑ひもなく死ぬほど辛いことですぢや！　しかし、これについては證明するといふことは到底できぬが、信念を得ることならばできますぞ。」

「どうしたら？　どういふ風にいたしましたらよろしうございませうか？」

「それは實行の愛ぢや。あなたの隣人を實際に、根氣よく愛するやうに努めてご覧なされ。その愛の努力がすすむにつれて、神の存在も自分の靈魂の不滅も確信されるやうになりますのぢや。もし隣人に對する愛に於て、完全な自我の否定に到達したならば、その時こそ、もはや疑ひもなく信仰が得られたので、いかなる疑惑もあなたの心に忍び込むことはできませんのぢや。これはもう實驗すみの、確かな方法なのぢやから。」

「實行の愛？　それがまた問題でございます。しかも大變な問題でございます！　長老様、わたくしは時々、自分が持つてゐる一切のものを投げ棄て、リーザも見棄てて、看護婦にでもならうかと空想するくらい、人類を愛してゐるのでございます。じつとかう眼をつぶつて空想してをりますと、わたくしは自分の中に抑へることのできない力を感じるのでございます。どんな傷口も、どんな膿だらけの腫瘍も、わたくしを脅かすことはできないでせう。わたくしは自分の手で傷所を纏帯したり洗つたりして、苦しめる人々の看護婦になるでせう。膿だらけの傷口を接吻することもできるくらいです……」

「他ならぬさういふことを空想されるとすれば、それだけでも大變結構なことぢや。いや、いや、そ

のうちひよつくりと、何か本當に善いことをなされる時もありませうわい。」

「けれど、わたくし、さういふ生活に長く辛抱できなくてございませうか？」と、夫人は殆んど無我無中の熱烈な調子で言葉を續けた。「これが一ばん大切な問題でございませう！　これがわたくしにとつて一ばん苦しい問題なのでございます。わたくしは目をつぶつて、本當にさういふ道を長く歩み續けられるかしら、と自分で自分に訊ねて見ます。もしわたくしが傷口を洗つてやつてゐる病人が、即刻に感謝をもつて酬いなければかりか、却つてわたくしの博愛的な行ひを認めも尊重もしないで、いろんな我儘を言つて困らせたり、嗚鳴りつけたり、無理な要求をしたり、誰か上役の人に告げ口をしたりなど（それはひどく苦しんでゐる人に、よくあり勝ちのことでございます）したら——その時はまあどうせう？　わたくしの愛は續くでせうか、續かないでせうか？　ところで、どうせう——わたくしは胸をわななかせながらも、この疑問を解決したのでございます——若しわたくしの人類に對する『實行的な博愛を、その場かぎり冷ましてしまふものがあるとするれば、それはつまり忘恩そのものでございます。一口に申しますれば、わたくしは賃銀めあての労働者でございます。わたくしは即時拂ひの報酬を——つまり自分への賞讃と、愛に對する愛の報酬を要求したしてをるのでございます。これではなくては、わたくしは誰をも愛することができません！』」

「それはある醫者がわたしに話したのとそつくりそのままの話ぢや、尤も大分以前のことですがな。」と長老が言つた。「それはもういい加減の年配の、紛れもなく賢い人であつたが、その人があなたと同じやうなことを、あけすけに打ち明けたことがありますのぢや。尤も冗談にはあつたが、痛ましい冗

談でしたわい。その人が言ふには『わたしは人類を愛してゐるけれど、自分でも淺間しいとは思ひながら、一般人類を愛することが深ければ深いほど、個々の人間を愛することが少くなる。空想の中では人類への奉仕といふことに就いて、寧ろ奇怪なほどの想念に達して、もしどうかして急に必要になつたら、人類のためにほんとに十字架を背負ひかねないほどの意氣込みなのだ、その癖、誰かと一つ部屋に二目と一緒に暮らすことができない。それは経験でわかつてゐる。相手がちよつとでも自分の傍へ近寄つて來ると、すぐにその個性がこちらの自尊心や自由を壓迫する。それ故、わたしは僅か一晝夜のうちに、優れた人格者をすら憎み出してしまふことができる。ある者は食事が長いからとて、またある者は鼻風邪を引いてゐて、しつきりなしに鼻汁をかむからといつて憎らしがる。つまりわたしは、他人がちよつとでも自分に觸れると、忽ちその人の敵となるのだ。その代り、個々の人間に對する憎悪が深くなるに従つて、人類全體に對する愛はいよいよ熱烈になつて來る。』と、かういふ話なのぢや。」

「ですけれど、どうしたら宜しいのでせう？　そんな場合にはどうしたら宜しいのでございませうか？　それでは絶望する他ないではございませんか？」

「いや、さうではないのぢや。あなたがこのことに就いて、そのやうに苦しみなされる……ただそれだけで澤山なのぢやから。できるだけのことをなされれば、そのうちに、うまく帖尻が合つて來ますのぢや。あなたがそれほど深く、眞剣に自分といふものを知ることができたからには、もはやあなたは多くのことを行つた譯になりますのぢや！　がもし、今あのやうに誠實に話されたのも、その誠實さをわしに褒めて貰ひたいがためだとすれば、勿論あなたは實行的な愛の道で、何物にも到達されることはあり

ませんぞ。すべてが空想にとどまつて、一生は幻のごとくに閃めき過ぎるばかりなのぢや。やがては來世のことも忘れ果てて、遂には勝手な諦めに安んじてしまはれることは分かりきつてをりますわい。」

「あなたはわたくしを壓し潰しておしまひなされました！ たつた今あなたにさう仰しやられて、わたくしははじめて気がつきました。ほんとにわたくしは、恩知らずな仕打ちを我慢することができないと白状いたしました時、自分の誠實さを褒めて頂くことばかり當てにしてをりました。あなたはわたくしに自分といふものを知らせて下さいました。あなたはわたくしの正體を取り押へて、わたくしに見せて下さいました！」

「あなたはしんから、さう言はれるのかな？ さういふ告白をなされたからには、今こそわしは、あなたが誠實な方で、善良な心を持つておゐるのだと信じますぢや。よしや幸福にまでは到らぬにしても、いつも自分は善き道に立つてをるといふことを覺えてをつて、その道を踏みはづさぬやうに心掛けられたい。何より大切なのは偽りを避けることぢや、あらゆる偽り、殊に自分自身に對する偽りを避けなければなりません。自分の偽りを觀察して、一時間ごと、いや一分間ごとにそれを吟味なさるのぢや。それから、他人に對しても、自分に對しても、餘り潔癖すぎるのもよくありませんぞ。あなたの心の中にあつて汚く思はれるものも、あなたがそれに氣づいたといふ一事で、既に淨められてをりますのぢや。恐怖もやはり同じやうに避けなければなりませんぞ——尤も、恐怖はすべて偽りの結果に他ならぬのぢやが。また愛の到達に就いても、決して自分の狭量を恐れなさるな。そればかりか、その際に犯した自分の良からぬ行ひも、あまり恐れなさることはありませんぢや。どうもこれ以上に愉快なお話をす

ることができないのは残念ぢやが、なにしろ實行的な愛は空想的な愛に比べると、なかなか困難な、そして怖ろしいものぢやからな。空想的な愛は急速な功蹟を渴望し、人に見られることを望むものぢや。實際、極端なのは、まるで舞臺の上か何ぞのやうに、一刻も早くそれが成就して、人に見て感心して貰ひたいが山々で、それがためには命を捧に振つても惜しくない、といふほどになるのぢや。ところが、實行の愛となると、これは取りも直さず勞働と忍耐ぢや。またある人にとつては一つの立派な學問かも知れぬ。しかし前もつて言つて置きますが、どのやうに努力しても目的に達することができぬばかりか、却つてそれから遠のいて行くやうな氣がして、慄然とする時、さういふ時、あなたは忽然として目的に到達せられるのぢや。そして絶えずあなたを愛し、ひそかにあなたを導かれた神の奇蹟的な力を、自己の上にはつきりと認められるのぢや。御免なされ、もうこれ以上あなたとお話をしてをる譯に参りませぬのぢや、待つてをる人がありますぞ。左様なら。」

夫人は泣いてゐた。

「リーズを、リーズを、どうぞあれを祝福して下さいまし、祝福して下さい！」不意に彼女は飛びあがつた。「お嬢さんは愛をうける値打ちがありませんぢや。お嬢さんが初めから終ひまでふさけてをられたのを、わしはちやんと知つてをりますぞ。」と長老は冗談まじりに言つた。「あんたはどういふ譯で、始終アレクセイをからかひなされたのぢや。」

事實リーズは初めから終ひまでその惡戯に心を奪はれてゐたのである。彼女はもう疾うから——この前の時から、アリョーシャが彼女に着かんで、なるべく彼女の方を見まいとしてゐるのに氣がついた。

それが彼女にはひどく面白かつたのだ。彼女は根氣よく待ち構へて、相手の視線を捕へようとした。ア
リョーシャは執拗く自分に注がれた視線に堪へきれないで、打ち克ち難い力に曳きずられて、不覺にも
自分から娘の方を見やる。と忽ち彼女はまともに相手の顔を見つめながら、勝ち誇つたやうな微笑をに
つと浮かべる。アリョーシャは一そう羞かんで焦れるのであつた。たうとう終ひには、彼はすつかり顔
をそむけて、長老の後ろへ隠れてしまつた。數分の後、彼はまた同じ打ちかち難い力に曳きよせられて、
自分を見てゐるかどうかと、娘の方へ振り返つて見た。するとリーズは殆んど安樂椅子から身を乗り出
すやうにして、横手からじつと彼を見つめながら、彼が自分の方へ振り向くのを一心に待ち構へてゐた
のだ。そこでまんまと彼の視線を捕へると、長老ですら我慢がならないやうな笑ひ聲をあげてしまつた
のである。

「どうしてあんたはこの人にさう恥かしい思ひをさせなされるのぢやな、悪戯つ見さん？」

リーズは突然、まつたく思ひがけなく眞赤になつて、目を輝かした。彼女の顔は恐ろしく生眞面目に
なつた。彼女はいきりたつた不不満々たる調子で、早口に神経的に喋り出した。

「ぢやあ、どうしてこの人は何もかも忘れてしまつたの？ だつて、この人はあたしが小さい頃、よ
くあたしを抱いて歩いたり、一緒に遊んだりしたのよ。それから家へ来てあたしに讀み方を教へてくれ
たのよ、あなたはそれを御存じ？ 二年前に別れる時にも、あたしのことば決して忘れない、二人は永
久に、永久に、永久に親友だつて言つたわ！ それなのに、今になつて急にあたしを怖がり出したんで
すもの。あたしがこの人を取つて食べるとでもいふのでせうか？ どうしてあたしの傍へ寄つて、お話

をしようとしないでせう？ なぜこの人は家へ来て呉れないんでせう？ あなたがお出したさらない
の？ だつて、この人がどこへでも出て歩くことは、あたし遠うく知つてゝよ。あたしの方からこの
人を呼ぶのは無嫌だから、この人から先きに思ひ出してくれるのが本當だわ、もし忘れないでゐて呉れ
るのなら……いいえ、駄目だわ、あの人は今、行をしてるんですもの！ だけど、何だつてあの人にあ
んな裾の長い法衣を着せたの……嘘け出したら轉ぶぢやないの……」

そして彼女は不意に怵へきれなくなつて、片手で顔を隠すと、持前の神経的な、からだぢゆうを揺ぶ
るやうな、聲を立てぬ長い笑ひ方で、烈しく、とめどなく笑ひ續けるのであつた。長老は微笑を含みな
がら彼女の言葉を聞き終ると、優しく祝福してやるのだつた。リーズは長老の手に接吻しようとした時、
突然その手を自分の眼に押し當てて泣き出した。

「ね、あたしを怒らないで頂戴、あたしは馬鹿だから、何の値打もないのよ……アリョーシャがこん
なをかした女のところへ来たがらないのも、尤もかもしれないわ、いいえ本當に尤もだわ。」
「いや、わしが是非とも行かせますぢや。」と長老がきつぱり言ひきつた。

長老が庵室を出てゐたのは凡そ二十五分くらゐだつた。もう十二時半を廻つてゐるのに、この集まりの主要人物たるドミトリイ・フォードロキッチは未だに姿を見せなかつた。しかし一同は殆んど彼のこゝろなど忘れてしまつた形で、長老が再び庵室へはいつて来た時には、恐ろしく活氣のある談話が客の間に取り交されてゐた。その話の牛耳をとつてゐたのはイワン・フォードロキッチと二人の僧であつた。見うけるところ、ミウソフも熱心にその話に容喙しようとしてゐたのだが、この時もまた彼は運が悪かつた。どうやら彼は二流どころの役割しか當てがはれてゐないらしく、彼の言葉には答へるものもあまりなかつた。この新しい情勢が、次第に鬱積した彼の癩癩を、ますます募らせるばかりであつた。彼はもう以前からイワン・フォードロキッチと學識の競合ひをしてゐたのだが、相手の示す粗略な態度を、冷靜に我慢することができなかつたのだ。『少くとも、今日まで我々は歐羅巴に於ける、一切の進歩の頂上に立つてゐたのに、この青二才が思ひきり我々を輕蔑してやがる。』と彼は吐の中であつた。さつき、椅子にじつと腰をおろして、口を噤んでゐることを誓つたフォードル・パーヴロキッチは、本

當に暫くのあひだは口を開かなかつたが、人を小馬鹿にしたやうな薄笑ひを浮かべて、隣りに坐つてゐるミウソフをじろじろ眺めながら、そのいらいらした様子にすつかり喜んでしまつてゐる様子であつた。彼はすつと前から何か敵を討つてやらうと待ち構へてゐたのだから、この好機會を見逃すことはできなかつた。たうとう辛抱がしきれなくなつて、ミウソフの肩へ屈みこみながら、小聲でもう一度彼をからかつた。

「あんたがさつき『いとしげに接吻しぬ』の後ですぐ歸らないで、かうした無作法な仲間といつしよに踏みとどまる様になられたのはどういふ譯でせうな？ それは他でもない、あんたは自分が卑められ、侮辱されたやうな氣がするものだから、その意趣返しに、一つ利口なところを見せつけてやらうと思つて踏みとどまつたのでせう。もうかうなつては、利口なところを見せないことには、お歸りになる譯には行きませんからなあ。」

「またですか？ なんの、今すぐにも歸りますよ。」

「どうして、どうして、一ばん後からお歸りでせうて！」フォードル・パーヴロキッチはもう一度ちくりと刺した。ちやうどその時、長老が戻つて来たのである。

論争は一瞬間はたとやんだが、長老は以前の席に着くと、さあお續けなさいと愛想よく勸めるやうに、一同をひとわたり見廻した。長老の顔の、殆んどすべての表情を研究し盡したアリョーシヤは、このとき彼が恐ろしく疲れ果てて、やつと我慢してゐることを明かに見てとつた。近ごろ彼は體力の衰弱から、ときどき卒倒することがあつた。その卒倒の前と同じやうな蒼白い色が、今その顔に擴がつて、

唇も白けてゐた。しかし、明かに彼はこの集りを解散させたくなさうであつた。その上、何かまだ目的があるらしい、——さて、どんな目的だらうか？ アリョーシャはじつと彼に目を注いだ。

「この方の至極めづかしい論文の話をしてをるところでございます。」司書の僧ヨシフがイワン・フォードロキッチを指しながら、長老を顧みてかう言つた。「いろいろ新しい説が述べてありますが、根本の思想は曖昧なものでございます。この方は教會的社會裁判とその權利範圍の問題について、一冊の書物を著した或る桑門の人に答へて、雑誌に論文を發表されましたので……」

「残念ながら、わしはその論文を読んでをりませんちや。しかしその話がかねがね聞いてをりましたわい。」長老はじつと鋭い目つきでイワン・フォードロキッチを見つめながら、かう答へた。

「この方の立脚されてゐる點はなかなか面白うございませう。」と司書の僧は語をついだ。「つまり、教會的社會裁判の問題について、教會と國家の區別を全然否定してをられるらしいのでございます。」

「それは珍しいが、ところでどのやうな意味あひですか？」と長老はイワン・フォードロキッチに訊ねた。

イワンはやがてそれに返事をしたが、その調子は前夜アリョーシャが心配したやうに、上から見下したやうな悪町囃さではなく、つつましく、控へ目で、著しく用心ぶかいところがあり、底意らしいものは少しもなかつた。

「僕はこの二つの要素、すなはち教會と國家といふ別個な二者の本質の混淆は、無論、永久に續くだらうといふ假定から出發してゐるのです。尤もそれは全然不可能なことで、正常な状態に導くどころ

か、幾分でも我慢のできる状態に導くことすらできません。と言ひますのは、抑その根本に虚偽が横たはつてゐるからであります。例へば裁判といふやうな問題に於て國家と教會とが妥協することとは、純粹な本質から言つて不可能であります。僕が辯駁を試みた僧侶の方は、教會が國家の中に確然たる一定の地歩を占めてゐると斷定してをられますが、僕は反對に、教會こそそれ自身の中に國家全體を包含すべきであつて、國家の中に確かな一隅を占めるべきものではない、たとへ今は、何かの理由でそれが不可能であつても、その根本に於ては、基督教社會の今後の發展に對する直接かつ重要な目的とならねばならぬ、とかう論駁したのであります。」

「全然公正なる御意見です。」と、無口で博學な僧バイシイ神父が、強い神經質な聲で口を挿んだ。

「純然たる法王集權論ですよ！」と、じれつたさうに交るがはる兩方の足を置き換へながら、ミウソフが叫んだ。

「なんですと！ それに第一、露西亞には山たどありませんよ！」と司書の僧ヨシフ師が叫んだ。そして更に長老の方を向きながら語をついだ。「就中この方が、論敵たる僧侶の、次ぎのやうな根本的かつ本質的な命題を辯駁してをられる點に御注意なされませ。第一の命題は、『如何なる社會的團體と雖も、自己の團體員の民法的、並びに政治的權利を支配する權力を所有する能はず、且つまた所有すべからず。』第二は……『刑事及び民事裁判權は教會に屬すべからず。且つ教會は神の制度にかかるとして、その性質上、かかる權利と兩立することを得ず。』最後に第三は——『教會は現世の王國にあ

* 法王集權論は超國體的 ultra montane (山の彼方) から出た言葉、蓋し中央歐州に對して羅馬は山の彼方だからである。

らす。』と云ふのはいかゞですか！」

「桑門の人にあるまじき言語の遊戯でございます！」とパイシー神父は我慢がしきれないで、また口を出した。「わたくしはあなたの論駁されたあの本を読んで、」と彼はイワン・フォードロキツチの方を向いて、「あの僧侶の『教會は現世の王國にあらず』といふ言葉には一驚を喫しました。もし現世のものでないとするれば、この地上に教會は全然存在する筈がないではありませんか。聖書の中にある『この世のものならず』といふ言葉は、そのやうな意味で用ひられてゐるのではありません。このやうな言葉を弄ぶとはあるまじきことです。主イエス・キリストは正しく、この地上に教會を建てるためにおいてなされたのです。天國は言ふまでもなく、この世のものでなく、天上にあるに違ひありませんが、そこへはいつて行くには、地上に立てられた教會を通るより他には道がありません。それ故この意味に於ける俗世間的地口は不可能で、かつあるまじきことです。教會は眞に王國であり、王國たるべき使命を持つてゐるのであります。そして、究極に於ては疑ひもなく全世界に君臨する天國とならなければなりません——それは、われわれが神より誓約されてゐることでもあります！……」

彼は急に自制するもののやうに口を噤んだ。イワン・フォードロキツチは敬意と關心を以つて、その言葉を聴き終ると、落ちつき拂つて、しかし依然としてはしはしした率直な調子で言つた。

「つまり僕の論文の要旨はかうなのです。古代、すなはち基督教發生以來二三世紀の間、基督教は單に教會として地上に出現して、單に教會であるにすぎなかつたのです。ところが、羅馬といふ異教國が基督教國になる望みを起こした時、必然の結果として次のやうな事實が生じました。羅馬帝國は基督教

國にはなつたけれど、それは單に國家の中へ教會を包含したのみで、多くの施政に顯れたその本質は、依然たる異教國として存在を續けたのです。本質上、是非かうなるべきだつたのです。しかし、國家としての羅馬には異教的な文明や知識の遺物が澤山に残つてゐました。例へば、國家の方針とか基礎とかいふものがそれです。然るに、基督教會は國家の組織にはいつたとしても、自己の立つてゐる土臺石、即ち根本の基礎のうち一物をも讓歩することを得ずして、上帝自身によつて一旦固く定められ且つ示された究極の目的に向かつて進むより他なかつたことは疑ひもない事實であります。つまり全世界を、従つて、あらゆる古い異教國を打つて一丸として教會に化してしまふのであります。斯くの如くにして（つまり未來の目的に於いて）教會は『社會的團體』または、『宗教目的を有する人間の團體』（僕の論敵は教會のことをかう言ひ表はしてゐる）としても、國家の中に一定の地歩を求むべきではなくして、かへつてあらゆる地上の國家こそ、結局教會に全然同化し、單なる教會そのものになりきつて、教會の目的と兩立しないやうな、あらゆる目的を排除すべきであります。然も、それは決してその國家の大帝國たる名譽を辱しめもしなければ、その君主の榮光を奪ひもしないばかりか、却つて誤れる異教的な虚偽の道から、永遠の目的に達する唯一の正しき道へ導くことになるのです。かういふ譯で、もし『教會的社會裁判の基礎』の著者が、これらの根據を發見し提唱するに當つて、それを、まだ現今のやうな罪障多き未完成な時代に於ては避けることの出来ない、一時的の妥協に過ぎないと観たならば、彼の判斷も正しいものとなつたでせう。ところが、もし著者が現に提唱してをり、且つ只今ヨシフ神父に依つてその一部を數へあげられた論據を目して、永久不變の本質的原理であるなどと、假りにも口幅つたいこ

とを廣言する限りは、既に教會そのものに反抗し、その永久不變の使命に背馳することになるのであります。これが僕の論文です、その概要の全部です。」

「つまり簡単に申しますと、」とバイーシイ神父は、一語々に力を入れながら、再び口を挿んだ。

「わが十九世紀に於てあまりにも喧傳されて來た或る種の理論に従へば、教會は、下級のものが上級のものに形を變へるやうに、國家の中へ同化されて、結局、科學だの、時代精神だの、文明だのといふものにけおされて、亡びてしまはなければならぬのです。もし、それを厭つて反抗すれば、教會のためには國家のほんの僅かな一隅が當てがはれて、それも一定の監視の下に置かれるであります。これは現今の歐羅巴の各地いたる處に行はれてをる事實であります。しかし、露西亞人の考へたり、希望なりによりますと、教會が下級から上級への形をとつて、國家へ同化するのではなくして、反對に國家が究極に於て單に教會そのものとなるべきであります。神よ、まことにかくあらしめ給へ、アーメン、アーメン！」

「いや、實のところ、そのお話を伺つて僕も少々元氣が出て來ましたよ。」とミウソフはまた足を交る交る置きかへながら、にやりと笑つた。「僕の考へるところでは、どうやらそれは基督再生の時にでも實現せられる、やたらに先の方にある理想のやうですね。それはまあ御意のままに。戦争や外交官や銀行などといったものの根絶を豫想する美しい理想郷的な空想ですね。何處やら、寧ろ社會主義に似てゐますね。僕はまた、それを眞面目なことだと思つて、教會はこれから刑事事件を裁判して、管刑や流刑や、悪くすると死刑の宣告さへするやうになるのぢやないかと考へたんですよ。」

「もし今でも教會的社會裁判だけしかなかつたなら、今でも教會は流刑や死刑を宣告するやうなことはしないでせう。また犯罪も、それに對する見解も、疑ひもなく一變すべき筈です。勿論それは、今すぐ早速にといふ譯ではありません、次第々々にさうなるのですが、しかしその時期はかなり早くやつて來るでせう……」イワン・フォードロキツチは落ちつき拂つて、瞬き一つしないで、かう言つた。

「君は眞面目なんですか？」と、ミウソフはじつと彼を見据ゑながら言つた。

「もし國家全體が教會になつてしまつた暁には、教會は犯罪者や抵抗者を破門するだけにとどめて、決して首なんか切らないでせう。」とイワン・フォードロキツチは語り續けた。「ぢやあ、一つあなたに伺ひますが、破門された人間はいつたい何處へ行つたらいいのでせう？ その時破門された人間は、今日の受刑者のやうに、單に人間社會から離れるばかりではなく、主キリストからも去つてしまはなければならぬでせう。つまり彼は自分の犯罪によつて、單に人間に對してのみならず、キリストの教會に對しても叛旗を翻すことになるぢやありませんか。これは勿論、今日でも嚴格な意味に於いては同じことですが、それでもやはり、さう明白に告示されてゐる譯ではありません。だから今の犯罪者の良心は極めて容易に、自分と自分で妥協することが出來ます。『おれはなるほど盗みをした。けれど教會に叛く譯ではない、基督の敵になつた譯ではない。』今の犯罪者は絶えずこんな氣休めを言つてゐるのです。ところが、教會が國家に取つて代つた場合には、地上に於ける教會の全部を否定してしまはないう限り、こんなことを言ふ譯には行きません。『誰も彼もみんな間違つてゐる、みんな岐路ちかにそれてゐる、すべてのものが偽りの教會だ。ただ人殺しで泥棒の自分一人だけが公正な基督の教會だ。』これはちよつと

言ひにくいことです。こんなことを言ふためには、餘ほど豪い條件と、滅多にないやうな情勢が必要で
すからね。翻つて犯罪に對する教會そのものの見解を考へて見ますに、果して教會は目下行はれてゐる
やうな殆んど異教的方法を廢して、社會保全のために行はれてゐる、感染せる肢體を切除するやうな、
機械的な方法をば、眞に、人間の更生と復活と救済の理想に向かつて、徹底的に變改してしまふ必要は
ないでせうか……」

「と言ふと、つまりどういふことになるのですか？ 僕はまた分からなくなつてしまいました。」とミ
ウソフが遮つた。「また何かの空想ですね。何だか形がないやうで、まるで譯がわかりませんよ。破門
とはいつたい何ですか、どういふ破門なんです？ 僕には何だか、面白半分と言つてゐられるやうな氣
がしてなりませんよ、イワン・フォードロキッチ。」

「ところが實は今でもそれは同じことですちや。」と、突然長老が口をきつたので、一同は一齊に彼の
方へ振り向いた。「實際、今でもキリストの教といふものがなかつたら、犯罪者の悪行には何らの抑制
がなくなり、ひいてはそれに對する刑罰すらもなくなつてしまつたに違ひないのちや。しかし刑罰とい
つても、只今あの人の言はれたやうな、多くの場合、單に人の心をいらだたせるに過ぎぬ機械的なもの
ではなしに、本當の刑罰なのちや。つまり眞に人を怖れ戦かせると同時に宥め柔らげるやうな、自分自
身の良心の認識中に納められてゐる本當の罰なのちや。」

「それはどういふ譯でせうか？ ひとつ伺ひたいものでございます。」とミウソフは烈しい好奇心に
驅られながら、かう訊ねた。

「それはかういふ譯ですちや。」と長老は説き始めた。「すべてこの答刑の後で流刑に處するといふや
り方は、決して人を匡正することは出来ませんちや。何より困つたことには、殆んど如何なる罪人にも
恐怖の念を起こさせず、決して犯罪の數を減少させることがないどころか、それは年を追うてますます
増加する一方なのちや。これはあなたも御同意の筈ですちや。で、つまり、このやうな方法では社會は
少しも保護せられぬといふことになる。即ち有害な人間が機械的に切り放されて、目も届かぬ遠方へ追
放されるとしても、すぐそれに取つて別の犯罪者が一人、乃至は二人現はれるからちや。もし現
代に於いて社會を保護するばかりか、罪人を匡正して別人に更生させるものが何かあるとすれば、それ
はやはり、自己の良心に含まれてゐるキリストの掟に他ならぬ。ただキリストの社會、即ち教會の子と
して自己の罪を自覺した時、始めて犯人は社會、即ち教會に對して、自己の罪を悟ることが出来るのち
や。かやうな譯で、ただ教會に對してのみ、現代の犯罪者は自己の罪を自覺するのであつて、決して國
家に對して自覺するのではないのちや。そこで、もし裁判權が教會としての社會に屬してゐたならば、
どんな人間を追放から呼び戻して、再び社會へ入れたらよいかといふことは、ちやんと分かつてゐる筈
ちや。今では教會は單に精神的譴責のほか、何ら實際的な裁判權を持つてをらぬから、犯人の實際的な
處罰からはこちらで遠ざかつてをるのちや。つまり犯人を破門するやうなことはせず、ただ父として
の監視の目を放さぬまでちや。その上、犯人に對しても努めて基督教的な交りを絶やさぬやうにして、
教會の勤行にも聖餐にも參列させるし、施物も領けてやる。そして罪人といふよりは寧ろ惡魔に魅られ
た者として遇するのちや。もし基督教の社會、即ち教會が、法律と同じやうに、罪人を排斥し放逐した

ならば、その罪人は抑どうなるであらう？ おお神よ！ もし教會がその都度、國法による刑罰に次いですぐさま破門の罰を下したらどうであらう！ 少くとも露西亞の罪人にとつて、これ以上の絶望はあ
るまい。なぜと言つて、露西亞の犯罪者はまだ信仰をもつてゐるからぢや。實際その時にはどんな恐ろ
しいことが持ちあがるかも知れぬ——犯罪者の絶望的な心に信仰が失はれたら、その時はどうなるのぢ
や？ しかし教會は優しい慈しみ深い母親のやうに、實行的な處罰は差し控へてをるのぢや。さなきだ
に罪人は、國法によつて恐ろしい刑罰を受けてをるのぢやから、せめて誰か一人でもそれを憐れむ者が
なくてはならぬ。しかし教會が處罰を差し控へる主なる原因は、教會の裁判は眞理を包蔵する唯一無二
のものであつて、従つて、たとへ一時的な妥協にもせよ、他の如何なる裁判とも本質的、精神的に結合
することが不可能であるからぢや。この場合いい加減な胡麻化しは到底許されませぬ。何でも、外國の
犯人はあまり改悔するものがないとのことぢや。つまり、それは現代の教育が、犯罪はその實犯罪では
なくて、ただ不正な壓制力に對する反抗である、といふ思想を鼓吹してをるからぢや、社會は絶對の力
をもつて、全然機械的に犯罪者を自分から切り離してしまふ。そしてこの追放には憎悪が伴ふ（少くとも
も歐羅巴では、彼ら自身が言つてをる）、憎悪ばかりでなく己が同胞たる犯人の將來の運命に關する極
度の無關心と忘却が伴ふのぢや。かういふ有様で、一事が萬事教會側のいささかの憐愍もなしに取り行
はれる。それといふのも多くの場合、外國には教會といふものが全然なくなつて、職業的な牧師と、壯
麗な會堂の建物が残つてをるに過ぎぬからぢや。教會そのものはとうの昔に、教會といふ下級の形か
ら、國家といふ上級の形へ移るのに汲々たる有様で、やがては國家といふものの中へ、すつかり姿を没

してしまはうとしてをるのぢや。少くともルーテル派の國々では、そのやうに思はれる。羅馬に至つて
は、もう千年この方、教會に代つて國家が高唱されてをる。それ故、犯人自身も教會の一員といふ自覺
がないので、追放に處せられると絶望のどん底に投げこまれてしまふのぢや。たとへ社會へ復歸するこ
とがあつても、しばしば非常な憎悪を抱いて歸るため、社會そのものが自分で自分を追放するやうなこ
とになつてしまふのぢや。これがどういふ結果に終るか、御自身で御判断がこきませう。わが國に於
ても、大體これと同じ有様のやうに思はれなくもないのぢやが、茲に異るところは、わが國には國法で
定められた裁判の他に教會といふものがあつて、何と言つてもやはり可愛い大切な息子ぢや、といふ風
に犯罪者を眺めて、いつ如何なる場合にも交渉を断たぬことにしてをる。尙その上に、思想的なもの
で、今は實際的なものでないにしても、未來のためにたとへ空想の中にでも生きてゐる教會裁判なるも
のが保存されてをつて、これが疑ひなく犯人によつて本能的に認められてをるのぢや。只今のお話も誠
に尤もなことですぢや。つまり、もし教會裁判が實現されて、完全な力を行使する時が來たなら、即ち
全社會が教會そのものになつてしまつたならば、單に社會が罪人の匡正に、會てその例しのなかつた影
響を及ぼすばかりでなく、事實、犯罪そのものの數も異常なる割合をもつて減少するぢやらう。疑ひも
なく教會は未來の犯罪者ならびに未來の犯罪をば、多くの場合、今とはまるで別な目をもつて見るに至
るぢやらう。そして追放されたものを呼び戻し、悪企みを抱くものを未然に警め、墮落したものを更生
させることが出来るに違ひない。實のところ、「と茲で長老は微笑を浮かべた。「いま基督教の社會はま
だ準備がすつかり整つてをらぬので、ただ七人の義人を基礎として立つてをるに過ぎないのぢやが、し

かしその義人の力はまだ衰へてをらぬから、未だ殆んど異教的な團體から、全世界に君臨する唯一無二の教會に姿を變へようといふ期待は今なほしつかりと擱んでをるのぢや。これは必らず實現せらるべき約束のものなれば、よしや八千代の後なりとも、この願ひの叶ひますやうに、アーメン、アーメン！ところで時節のために心を惑はすことはありませんのぢや。時節や期限の秘密は、神の叡智と、神の先見と、神の愛の中に納められてをるからぢや。それに人間の考へではまだ遠いやうに思はれることも、神の定めによれば、もう實現の間際にあつて、つい戸口へ來てをるのかも知れませんか。おお、これこそ眞にしかあらしめ給へ、アーメン、アーメン！

「アーメン、アーメン！」とパイーシイ神父は恭しくおごそかに調子を合はせた。

「奇妙だ、實に奇妙だ！」とミウーソフは口走つたが、その聲は熱してゐるといふよりも、寧ろ吐の底に何か憤懣を隠してゐるといふ風であつた。

「何がそのやうに奇妙に思はれますか？」と用心ぶかくヨシフ神父が訊ねた。

「本當に、これはいつたい何事です！」ミウーソフは突然、堰でも切れたやうに叫んだ。「地上の國家を排斥して、教會が國家の段階に登るなんて！それは法王ポピュラス・マクシムス集權論どころぢやなくつて、最上法王アルトゥル・トラモンニヌ集權論だ！こんなことは法王グリゴリイ七世だつて夢にも見なかつたでせうよ！」

「あなたはまるで正反對に解釋しておいでです！」とパイーシイ神父がいかつい聲で言つた。「教會が國家になるではありません、このことを御了解下さい。それは羅馬とその空想です。それは惡魔の第三の誘惑です！それとは正反對に、國家の方が、教會に同化するのです、國家が教會の高さまでのほ

つて全世界に跨がる教會となつてしまふのです。これは法王集權論とも、羅馬とも、あなたの御解釋とも全然正反對で、これこそ地上に於ける露西亞正教の偉大なる使命なのです。やがて東のかなたよりこの明星が輝き始めるのであります。」

ミウーソフは鹿爪らしく押し黙つてゐた。その姿には並々ならぬ勿體らしさが現はれてゐた。高い所から見下ろしたやうな、大様な微笑がその口邊に漂つてゐた。アリョーシヤは激しく胸を躍らせながら始終の様子に注意してゐた。この會話のすべてが極度に彼を昂奮させたのである。彼がふとラキーチンの方を見やると、この男は依然として戸の傍にじつと佇んだまま、眼こそ伏せてはゐるが、注意ぶかく耳を澄ましたがらすべてを觀察してゐた。しかしその頬に映えてゐる紅潮によつて、彼もアリョーシヤに劣らず昂奮してゐることが察せられた。彼が昂奮してゐる理由をアリョーシヤはよく知つてゐた。

「失禮ですが、皆さん、一つちよつとした逸話をお話しいたしませう。」突然ミウーソフが格別もつたいぶつた様子で、意味深長に語り出した。「あれは十二月革命のすぐ後のことですから、もう幾年か前の話ですが、ある時、僕は巴里で或る一人の非常に權勢のある政治家のところへ、私交上の訪問をしましたところ、そこで極めて興味ある人物に出會ひました。この人物は普通の探偵といふより、多勢の政治探偵の部隊を指揮してゐる人で、ですから、やはり一種の權勢家なんですね。この人物と、ふとしたきつかけから、僕は好奇心に驅られて、話を始めたのです。ところで、この人は別に知己として面會に來てゐた譯ではなく、ある種の報告を持つて來た屬官といふ資格でしたから、彼の長官の僕に對する應對振りを見て、幾分打ちとけた態度を示してくれました。しかしそれも無論ある程度までで、打ち解け

たといふより、寧ろ慇懃な態度だつたのです。實際、佛蘭西人は慇懃な態度をとるすべを知つてゐますからね。それに僕を外國人と見て餘計さういふ態度に出たのでせうね。僕にはその人のいふことがよく分かりました。話題にのぼつてゐたのは、當時官憲から追跡されてゐた、社會主義の革命家たちのことでした。その話の本题は抜きにして、ただこの人が何の氣なしに口をすべらした、大變面白い解釋を御紹介いたしませう。この人が言ふことに、『われわれには無政府主義者だの、無神論者だの、革命家だのといつた連中は、あまり大して恐ろしくはありません。われわれはこの連中を絶えずつけ狙つてゐますから、彼等のやり口も分かりきつてゐます。ところが、彼等の中に、ごく少數ではありますが、若干毛色の變つた奴があります。それは神を信仰してゐる立派な基督教徒で、然もそれと同時に社會主義者なのです。かういふ手合こそ我々が何より危険に思ふ、最も恐ろしい連中なのです！』『社會主義の基督教徒は、社會主義の無神論者より更に恐ろしいものです』この言葉は既に、當時の僕を驚かしたものです。今ここでお話を伺つてゐるうちに、なぜか不意にそれを思ひ出しましたんで……」

「つまりあなたは、それはわたくし達に當てはめて、われわれを社會主義者だと仰しやるのですな？」とパイシー師は單刀直入に、いきなり訊き答めた。しかし、ミウーソフが返事をしてやらうと思ふより先きに突然、戸が開いて、ひどく遅刻したドミトリー・フォードロキツチがはいつて來た。實のところ、一同はいつとはなしに彼を待つことを忘れてゐたので、この不意の出現は最初の瞬間、驚愕の念を惹き起こしたほどであつた。

VI

何のためにこんな人間が生きてゐるのだ！

ドミトリー・フォードロキツチは二十八歳で、氣持のいい顔だちをした、中背の青年だつたが、齡よりはずつと老けて見えた。筋骨がたくましく、素晴らしい腕力を持つてゐることが察せられたが、それにも拘らず、彼の顔には何となく病的なところが窺はれた。瘦せた頬がこけて、何かしら不健康らしい黄いろつぼい色つやをしてゐる。少し飛び出した大きな暗色の眼は、見たところ、何處か執拗さうなまなざしであるが、その實何やらそはそはしてゐる。昂奮して苛々しながら話してゐる時、さへ、その眼は内部の氣持に従はないで、何か別な、時とすると、その場の狀況に全然そぐはない表情をあらはすことがあつた。『あの男の肚の中はちよつと分らない。』といふのが、彼と話をした人の批評である。またある人は、彼が物思はしげな、氣難かしさうな眼つきをしてゐるなと思つてゐると、突然おもひもかけず笑ひ出されて、面喰ふことがあつた。つまり、そんな氣難かしさうな眼つきをしてゐると同時に、陽氣な巫山戯た考へが彼の心中に潜んでゐることの證據である。尤も、現に彼の顔つきが幾分病的に見えるのは、無理もない話である。彼がこのごろ恐ろしく不安な『遊蕩』生活に耽溺してゐることも、ま

た曖昧な金のことで父親と喧嘩をして、非常にいらいらした氣持になつてゐることも、等しく一同の者によく分かつてゐたからである。それに就いて町ぢゆうにいろいろな噂が持ち上つてゐた。尤も、彼は生れつき癩癩持ちで、『常軌を逸した突發的な性情』を持つてゐた。これは當市の判事セミヨン・イワーノキツチ・カチャリニコフが、ある集會の席で彼を批評した言葉である、彼はフロックコートフロックコートの釦をきちんとかけて、黒の手袋をはめ、絹帽子シルクハットを手に持つて、申分のない瀟洒な服装で入つて來た。つい最近退職したばかりの軍人のよくするやうに、口髭だけを蓄へて、鬚髪は今のところきれいに剃り落してゐる。暗色の髪は短く刈り込んで、額頭のところだけちよつと前へ梳き出してあつた。彼は軍隊式に活潑な大股で歩いて來た。一瞬間、闕の上に立ち止つて、一わたり一同を見廻すと、彼はそれがこの席の主人だとして、いきなり長老の方へつかつかと歩み寄つた。彼は長老に向かつて深く腰を屈めて祝福を乞ふた。長老は立ち上つて彼に祝福を與へた。ドミトリイ・フォードロキツチは恭しくその手を接吻すると、恐ろしく昂奮した、殆んど苛々したやうな調子で口をきつた。

「どうも、長らくお待ちせいたしましたし申譯ございません。實は父が使ひによこしました下男のスメルチャコフに時間のことを呉々も念を押して訊ねましたところ、一時だと、はつきり二度まで答へましたので。ところが今不意に……」

「御心配には及びませんぢや。」と長老が遮つた。「なあに、ちよつと遅刻されただけで、大したことはありませんぢや……」

「誠に恐縮でございます。お優しいあなたのお心として、さうあらうとは存じてをりましたが。」さう

言つてぶつきら聲に言葉を切ると、ドミトリイ・フォードロキツチはもう一ど頭を下げた。それから急に父の方を向いて、同じやうな恭しい町重な會釋をした。明らかに、彼は前からこの會釋のことをいろいろと考へた擧句、これによつて自分の敬意と善良な意圖を示すことを、自分の義務だと思ひついたのである。不意を打たれてフォードル・バーヴロキツチはちよつと間誤ついたが、すぐに彼一流の活路を見出した。ドミトリイ・フォードロキツチの會釋に對して、彼は椅子から立ち上りさま、同じやうな可憐な會釋をもつて息子に報いた。その顔は急に物々しく鹿爪らしくなつたが、それがまた却つて非常に陰險な影を添へるのであつた。それからドミトリイ・フォードロキツチは無言のまま、部屋の中にある一同に會釋を一つして、例の活潑な大股で窓の方へ近寄ると、パイーシイ神父の傍にたつた一つ残つてゐた椅子に腰をおろして、からだをすつかり乗り出すやうにして、自分が遮つた會話の續きを聞く身構へをした。

ドミトリイ・フォードロキツチの出席には、ほんの二分かそこいらしか暇どらなかつたので、會話はすぐに續けられなければならぬ筈であつた。ところが今度は、パイーシイ神父の執拗な、殆んど苛々した質問に對して、ミウソフはもう返事をする必要を認めなかつた。

「どうか、この話はやめさせて戴きたいもんですね。」と彼は世間馴れた無頓着な調子で言つた。「それになかなか難かしい問題ですからね。御覽なさい、イワン・フォードロキツチがこちらを見てにやにやしてゐますよ。屹度この問題に就いても何か面白い説があるんでせう。この人にひとつ訊いて御覽な

「いや、ほんのちよつとした感想のほか、別に説といふ程のことはないですよ。」とイワン・フォードロキツチはすぐに答へた。「一般に歐羅巴の自由主義ばかりでなく、露西亞の自由主義的素人道樂までが、久しい以前から、社會主義の結末と基督教の結末とをしばしば混同してゐます。かうした奇怪千萬な推斷は、勿論、彼らの特性を暴露するものであります。しかし、つまるところ、社會主義と基督教とを混同するのは、單に自由主義者とデイレクタントばかりではなく、多くの場合、憲兵もその仲間にはいるやうですね。尤も、これは勿論外國の憲兵のことですが。ミウーツフさん、あなたの巴里のお話にはなかなか妙味がありますよ。」

「全體として、やはりこの問題はやめて載きたいですね。」とミウーツフは繰り返した。「その代りに僕は、當のイワン・フォードロキツチに關する、非常に興味に富んだ、最も特性的な逸話を、もう一つ皆さんにお話いたませう。つい五日ばかり前のことですが、當地の、主に婦人ばかりの會話の席で、イワン・フォードロキツチは堂々と、こんな議論をはかれたのです。即ち、地球上には人間同志の愛を強制するやうなものは決して存在しない。人類を愛すべしといふやうな法則は決してない。若しこの地上に愛があるとすれば、またこれまでであつたとすれば、それは自然の法則によつてではなく、人が自分の不死を信じてゐたからである——といふのであります。その上、イワン・フォードロキツチはちよつと括弧の中へ挟んだやうな形で、かういふことを附け加へられました。つまり、この中にこそ自然の法則が全部含まれてゐるので、人類から不死の信仰を滅ぼしてしまつたならば、人類の愛が立ちどころに枯死してしまふのみならず、この世の生活を續けて行くために必要な、あらゆる生命力を失つてしまふ。」

のみならず、その場合に不道德といふものは全然なくなつて、どんなことをしても許される、人肉食さへ許されるやうになるといふのです。まだ、そればかりではなく、現在の我々のやうに、神も己れ的不死を信じない各個人にとつて、自然の道德律がこれまでの宗教的なものは全然正反對になつて、悪行と言ひ得るほどの利己主義が人間に許されるのみならず、却つてさういふ状態に於いては避けることのできない、最も合理的な然も高尚な行爲としてすら認められるだらう、といふ斷定をもつて結論とされたのであります。皆さん、このやうな逆説から推して、わが愛すべき奇人にして逆説家たるイワン・フォードロキツチの唱道され、かつ唱道せんとしてをられる爾餘のすべての議論は、想像するに難くないではありませんか。」

「ちよつと」と突然ドミトリイ・フォードロキツチが叫んだ、「聞き違へのないやうに伺つて置きますが、『無神論者の立場から見ると、悪行は單に許されるばかりでなく、却つて最も必要な、最も賢い行爲と認められる！』と、さういふのですか？」

「その通りです。」とパイーシイ神父が言つた。

「覚えて置ませう。」
かう言ふとすぐ、ドミトリイは黙り込んでしまつた。それは藪から棒のやうに話へ口を入れたと同じく、唐突だつた。一座の者は好奇の眼眸を彼に注いだ。

「本當にあなたは人間が靈魂不滅の信仰を失つたら、そのやうな結果が生じるものと確信しておいでなのかな？」と、不意に長老がイワン・フォードロキツチに問ひかけた。

「ええ、僕はさう断言しました。もし不死がなければ善行もありません。」

「若しさう信じてをられるのなら、あなたは幸福な人か、それともまた、恐ろしく薄倅な人かぢや！」

「なぜ薄倅なのですか？」イワン・フォードロキッチは薄笑ひをした。

「なぜかといへば、あなたはどうかやら自分の靈魂の不滅も、そればかりか自分で教會や教會問題に就いて書かれたことも、信じてをられぬらしいからぢや。」

「或ひは仰せの通りかも知れませんが……しかしそれでも、僕はまるきり巫山戯たわけではないのです……。」と、イワン・フォードロキッチは不意に奇妙な調子で白状したが、その顔はさつと赧くなつた。

「まるきり巫山戯たのではない、それは本當ぢや。この思想はまだあなたの心の内で決しられてゐないで、あなたの心を悩ましてをるのぢや。しかし、悩める者は、時には絶望のあまり、己れの絶望を慰みとすることがある。あなたも今のところ、絶望のあまりに雑誌へ論文を載せたり、社交界で議論をしたりして慰んでをられる。しかも自分で自分の議論が信ぜられず、胸の痛みを感じながら、心の中でその議論を冷笑してをられるのぢや……。實際あなたの心の中でこの問題は決してをらぬ。茲にあなたの大きな悲しみがある、なぜといへば、それが執拗に解決を強要するからぢや……。」

「これが僕の心中で解決されることがありませうか？ 肯定的に解決されることが？」依然としてえたいの知れぬ薄笑ひを浮かべたまま、長老の顔を見つめながら、イワン・フォードロキッチは奇妙な質問を續けるのであつた。

「もし肯定の方へ解決することが出来なければ、否定の方へも決して解決せられる時はない——かういふあなたの心の特性は、御自身でも承知してをられるぢやらう。これが、あなたの心の苦しみのぢや。しかしかういふ苦しみを苦しむことのできる、高遠なる心をお授け下された創世主に感謝せられるがよい。『高きものに思ひをめぐらし高きものを求めよ、何となれば我らの棲家は天國にあればなり。』希くば神の御恵みを以つて、まだこの世にをられるうちに、この解決があなたの心を訪れまするやうに、そしてあなたの歩まれる道が神によつて祝福せられまするやうに！」

長老は手を舉げて、その場からイワン・フォードロキッチに向かつて十字を切つてやらうとした。しかしこちらは突然、椅子を立つて長老に近寄り、その祝福をうけて、手を接吻すると、無言のまま自分の席へ戻つた。彼の顔つきはしつかりしてゐて生眞面目だつた。この振舞と、それに前述のイワン・フォードロキッチとしては思ひもかけない長老との會話は、その謎のやうな點と、それにまた嚴肅な點において一同を驚ろかした。人々は一瞬、聲をひそめた。アリオーンヤの顔には殆んど憎えたやうな表情が浮かんだほどである。しかし、突然ミウソフがひよいと肩を竦めると、それと同時にフォードル・パーヴロキッチは椅子から飛び上つた。

「神のごとく神聖な長老様！」かう彼はイワン・フォードロキッチを指しながら叫んだ。「これはわたくしの息子で、わたくしの肉から出た肉、わたくしの最愛なる肉でございます！ これはわたくしの、いはば最も尊敬すべきカルル・モールでございます！ たつた今はいつて参りました息子のドミトリイ・フォードロキッチ、つまり、かうしてお裁きをお願いすることになりました當の相手で

「ございますが——これは最も尊敬すべからざるフランツ・モールでございます——どちらもシルレルの『群盗』の中の人物でございますが——ところで、わたくしは差詰 Regierender Graf von Moor の役廻りでございます！ どうか御判断の上、お助けを願ひます！ あなた様のお祈りばかりでなく、御豫言までお聴かせ願ひたいでございます。」

「そのやうな氣ちがひじみた物の言ひ方をなされぬがよい。また自分の家族を辱しめるやうな言葉で、口を切るものではありませんぢや。」と長老は弱々しい疲れきつた聲で答へた。明らかに彼は、疲勞が加はるにつれて、だんだん目に見えて氣力を失つて行つた。

「愚にもつかない茶番です。それは僕がこちらへ參る道すがら、もう感づいてゐたことです！」と、ドミトリイ・フョードロキツチは憤懣のあまり、さう叫ぶと、同じく席をとび上つた。「お許し下さい、長老様！」と、彼はゾシマの方へ振り向いて「僕は無教育な男ですから、何と言つてあなたをお呼び申したらいいかさへ知らないくらゐですが、あなたは騙されていらつしやるのです。わたくし共にここへ集まることをお許し下さつたのは、あんまりお心が優し過ぎたのです。親爺に必要なのは不體裁な馬鹿騒ぎだけなんです。何のためか——それは親爺の方寸にあることです。親爺にはいつも自己流の打算があるのですから。しかし今になつて、どうやらその目的が僕に分かつて來たやうです……」

「みんなが、みんながわたくし一人を悪しざまに申します！」と今度はフョードル・パーヴロキツチの方が喚き立てた。「現にミウソフさんもわたくしを責めます。いいや、ミウソフさん、責めましたよ、責めましたよ！」と、不意に彼はミウソフの方を振り向いた。だがミウソフは別に口出しを

した譯ではないのである。「つまりわたくしが子供の金を靴の中へ隠してちよろまかしてしまつたと言つて責めるのです。が、しかし裁判所といふものがありますからね。ドミトリイ・フョードロキツチ、あすこへ出たら、お前さんの書いた受取りや手紙や契約書を基にして、お前さんのところに幾ら幾らあつたか、お前さんが幾ら幾ら使つたか、そして今、幾ら幾ら残つてゐるかを、すつかり勘定してくれませぬね！ ミウソフさんが裁判にかけるのを嫌ふ譯は、ドミトリイ・フョードロキツチがこの人にとつても萬更の他人ではないからですよ。それでみんながわたくしに食つてかかるんですけれど、ドミトリイ、フョードロキツチは差引きわたしたしに借りがあるのでせう。それも少々端した金ぢやなくつて、何千といふ額ですから。それにはちやんと證文があります！ 何しろこの人の放蕩の噂で、いま町ぢゆうがひつくり返るほどの騒ぎですからなあ！ それに、以前勤めてをつた町でも、良家の娘を誘惑するために、千の二千のといふ金を使つたもんでさあ。それはもう、ドミトリイ・フョードロキツチ、よつく承知しておりますよ、極内密な詳しいことまで知つとりますよ、わしが立派に證明して見せますよ……。神聖な長老様。あなたは本當になさるまいけれど、この男は高潔無比な良家の娘を迷はしたのでございます。父御といふのは自分の以前の長官で、聖アンナ利剣章を頸にかけた、勳功の譽れ高い勇敢な大佐なのです。そのお嬢さんに結婚を申し込んで酷い目に逢はせたために、當の令嬢は今みなし兒としてこの町に暮してをります。もう許婚の間柄である癖に、あれはその女を目の前に置いて、この町の淫賣女のところへ通つてをるのでございます。尤もこの淫賣女はさる立派な男といはば内縁關係を結んでゐて、それになかなか氣性のしつかりした女ですから、誰にかけても難攻不落の要塞で、まあ正妻も同じ

こつてさあ。何しろ貞淑な女ですからなあ、まつたく！ ねえ、神父さん方、實に貞淑な女でございますよ！ ところがドミトリイ・フォードロキッチはこの要塞を黄金の鍵で以つて開けようとしてをるのですよ、そのために今わたくしを相手に力み返つてをりますので。つまり、わたくしから金を抜き取らうと企らんでをるのでございます。もうこれまでも、この淫賣のために何千といふ金を湯水のやうに注ぎこんでをるのですからなあ。だから、のべつ借金ばかりしてゐるんです。しかも誰から借りてゐるんだとお思ひになりますか？ なあミーチャ、言はうか言ふまいか？」

「お黙りなさい！」とドミトリイ・フォードロキッチが叫んだ。「僕の出て行くまで待つて下さい。僕のある前で純潔な處女を穢すやうなことは言はせません……。あなたがあの女のことを嘔びに出したといふ一事だけでも、あの女の身の穢れです……。僕は斷じて許しません！」

彼は息をはずませてゐた。

「ミーチャ！ ミーチャ！」と、フォードル・パーヴロキッチは弱々しい神経的な聲で、涙を無理に絞り出したが叫んだ。「いつたい生みの親の祝福は何のためなんだ？ 若しわしがお前を呪つたら、その時はどうなるのだ？」

「恥知らずな偽善者！」と、ドミトリイ・フォードロキッチは狂暴に嗚りつけた。

「これが父親に、現在の父親に向かつて言ふ言ひ草ですもの、他の人にどんなことをするか分かつたもんぢやありません！ 皆さん、ここに一人の退職大尉があります。貧乏だが尊敬すべき人物です。思ひがけない災難のため退職を命ぜられました。公けに軍法會議に附せられた譯ではなく、名譽は立派

に保持されてゐたのです。いま多勢の家族を抱へて難澁してをります。ちやうど三週間までドミトリイ・フォードロキッチが或る酒屋で、この人の髯を掴んで往來へ引つ張り出して、人前で散々打擲したのでございます。それと言ふのも、その人がちよつとした用件で、内密にわたくしの代理人を勤めたからのことです。」

「それはみんな嘘です！ 外見は事實だが、内面から見ると嘘の皮です！」ドミトリイ・フォードロキッチは憤怒に全身をわなわなと慄はせた。「お父さん、僕は自分の振舞を辯解する譯ではありません。いや、皆さんの前でまつすぐに白状します。僕はその大尉に對して獸のやうな振舞をしました。今でもあの獸のやうな憤りを悔んで、自分に愛想をつかしてゐるくらゐです。しかしあなたの代理人とかいふあの大尉は、今お父さんが淫賣だといはれた當の婦人の許へ行つて、もし僕が餘りうるさく財産の清算を迫るやうな場合には、あなたのところにある僕の手形をその婦人が引き受けて、訴訟を起こして、僕を監獄へぶち込んでくれるやうにと、あなたの名前をもつて申し入れたのです。お父さんは僕がこの婦人に對して弱みを持つてゐると非難されましたが、その實あなたがこの婦人を嫉かして、僕を誘惑させたのぢやありませんか！ ええ、あの女は僕に面と向かつて話しましたよ、自分で僕にぶちまけて、あなたのことを笑つてゐましたよ！ とところで、あなたが僕を監獄へ入れたがる譯は、あの婦人のことで僕を嫉妬んでゐるからです。それは、あなた自身があの婦人に變な氣持を起こして附きまといひ始めたからです。そのこともやはり、あの女が笑ひながら話して聞かせたから、僕は百も承知してゐるのです。放しいですか、あなたのことを笑ひながら、話して聞かせたんですよ。神父さん方、この通りです。放

蕩息子を怒め立てる父親がこの通りの人間なんです！ 皆さん、どうか僕の病癪を赦して下さい。しかし僕は始めからこの狸爺が、ただ不體裁な空騒ぎのために、皆さん御一同をここへ呼んだのだつてことは、ちやんと感じてゐたのです。僕はもし親爺が折れて出てくれたら、こちらから赦しもし、また赦しを乞はうとも思つてやつて来たのです。ところが今、親爺は僕一人なら兎も角、僕が尊敬の餘り故なくしてその名前を口にすることさへ憚つてゐる、純潔無比な處女まで辱かしましたから、こちらもこの男のからくりを皆さんの前へすつかり曝露してやる氣になつたのです。僕にとつては肉身の父なんですけれど……」

彼はそれ以上つづけることができなかつた。眼はぎらぎらと光り、息使ひも苦しうだつた。しかし僧房の中にあつた一座の人々も動亂してゐた。長老以外の一同の者は不安に驅られて席を立つた。二人の僧は嚴つい眼を瞪つてゐたが、それでもなほ長老の意見を待つてゐた。當の長老は眞蒼な顔をして坐つてゐたが、それは昂奮のためではなく、病軀の衰弱のせりであつた。祈るやうな微笑がその唇に漂つてゐた。彼は猛り狂ふ人々を押しとどめようとするものやうに、ときどき手を振り翳すのであつた。勿論その身振り一つで、この騒ぎを鎮めるのに充分な筈であつたが、彼はまだ何かはつきりせぬことがあつて、それをよく呑み込んで置かうとするかのやうに、じつと視線を凝らしながら、何ごとかを待つてゐた。たうとうミウソフは、決定的に自分が辱しめられ、穢されたやうな心持を覺えた。

「この醜態の責任はわれわれ一同にあるのです」と彼は熱した口調で語り出した。「しかし僕はここへ来る途すがら、まさかかゝるまでとは思ひもよらなかつたのです。尤も、相手が誰だかつてことは承

知してゐましたけれど……。これは即刻覺をつけなくちやなりません！ 親下、どうぞ信じて下さい、僕は今ここで曝露された事實の詳細を知らなかつたのです。そんなことは本當にしたくなかつたのです……。まづたく今が初耳なのです……。現在の父親が卑しい稼業の女のことと息子を嫉妬して、當の賣女とぐるになつて息子を牢へ入れようとするなんて……。僕はこんな連中と共にこちらへ參るやうに仕向けられたのです……。瞞されたのです、皆さんの前で言明します、僕は誰にも劣らず瞞されたのです……」

「ドミトリイ・フォードロキッチ」突然、フォードル・パーヴロキッチが、何かまるで借物のやうな聲を振り絞つた。「もし、お前さんがわしの息子でなかつたら、わしは即刻、お前さんに決闘を申し込むところなんだ……。武器は拳銃、距離は三步……。手巾を上から被せてな……。手巾を！」彼は地團太を踏みながら、言葉を結んだ。

かうした、生涯を茶番狂言に終始した嘘つき親爺でも、昂奮のあまり實際に身慄ひをして泣き出すほどの、眞に迫つた心持になる瞬間があるものである。尤もその瞬間（もしくはほんの一秒もしてから）に、『えい、恥知らずの老耄め、貴様がどんなに『神聖な』怒りだの『神聖な』怒りの瞬間を感じたつて、やつぱり貴様は嘘をついてゐるのだ、今でも茶番をやつてゐるのだ。』と肚の中で呟くのはあるが。

ドミトリイ・フォードロキッチは恐ろしく顔を擧げて、何とも言ひやうのない侮蔑の色を浮かべながら、父をちらつと眺めた。

「僕は……僕は、」と、彼は妙に静かな、抑へつけるやうな聲で言つた。「僕は故郷へ歸つたら、自分の心の天使ともいふべき未來の妻といつしよに、父の老後を慰めようと思つてゐたのです。ところが來て見ると、父は放埒きはまる色情狂で、しかも卑劣この上もない茶番師なんです！」

「決闘だ！」と老爺は息を切らしながら、一語々々に唾をはね飛ばしながら、喚き聲をあげた。「ところで、ピョートル・アレクサンドロキッチ・ミウソフさん、今あなたが大胆にも『賣女』呼ばはりなされた、あの女ほど、高尚で潔白な——いいですか、潔白なと言つてゐるんですよ——婦人は、あなたの御一門には恐らく一人もござすまいで——それから、ドミトリイ・フォードロキッチ、お前さんが自分の許婚をあゝ『賣女』に見かへたところを見ると、つまりお前さんの許婚でさへ、あの『賣女』の靴の裏ほどの値打もないと、自分で考へた譯だね。あの『賣女』はかういふえらい女だて！」

「恥かしいことですよ！」と、突然ヨシフ神父が口走つた。

「恥かしい、そして穢らはしいことですよ！」終始、無言でゐたカルガーノフが突然、眞赤になつて、子供つばい聲を慄はせながら、昂奮のあまりかう叫んだ。

「どうしてこんな男が生きてゐるんだ！」殆んど猫になるくらゐ、無性に肩を聳かしながら、ドミトリイ・フォードロキッチは憤怒のために前後を忘れて、空ろな吼えるやうな聲で言つた。「もう駄目だ、なほこの上大地を穢させておいてよいと仰しやるんですか。」片手で長老を指しながら、彼は一同を見廻した。彼の言葉は徐かて整然としてゐた。

「聞きまじたか、お坊さん方、父殺しの言ふことを聞きましたか？」と、フォードルは出し抜けに今

度はヨシフ神父に喰つてかかつた。「これがあなたの『恥かしいこと』に對する返答ですよ！何がいつたい恥かしいことですか？あの『賣女』は、あの『卑しい稼業の女』は、かうして此處で行ひ澄してござるあなた方より、すつと神聖かも知れませんか！若い時分には周囲の感化で墮落したかも知れませんが、その代りあの女は『多くのものを愛し』ましたよ。多く愛したるものは、キリストもお赦しになりましたからな……」

「キリストがお赦しになつたのは、そのやうな愛のためではありません……」温順なヨシフ神父も怯へきれないで、思はずかう言つた。

「いいや、お坊さん方、さういふ愛のためです。てつきりさういふ愛ですとも！あなた方はここで玉菜の行をして、それでももう上人だと思つてゐなさる！ 鮓を食べてからに、一日に一尾づつ鮓を食べてからに、鮓で神様が買へると思つてゐなさるのだ！」

「もう我慢がならん、もう我慢がならん！」さういふ聲が僧房の四方から湧き上がった。

しかし、醜態の極にまで達したこの場面は、まったく思ひもかけぬ出來事によつて中断された。突然、長老が席を立つたのである。師を思ひ一同を思ふ恐怖のために、殆んど度を失つてしまつてゐたアリョーシャは、それでも辛うじて、その手を支へることが出來た。長老はドミトリイ・フォードロキッチの方へと歩き出した。そしてびつたり傍まで近寄つた時、彼はその前に跪いたのである。アリョーシャは長老が力萎へて倒れたのかと思つたが、さうではなかつた。長老は膝をつくと、そのままドミトリイ・フォードロキッチの足許へぬかづいて、額が地につくほど叮嚀な、きつぱりした、意識的な禮拜を

するのであつた。アリオシヤはすつかり面喰つてしまつて、長老が立ち上がらうとした時にも、扶け起すことを忘れてゐたほどである。かすかな微笑がその口邊に僅かに漂つてゐた。

「御免下され！ 皆さん、御免下され！」と彼は四方に向かつて、來客一同に會釋をしながら言つた。ドミトリイ・フォードロキツチは暫らくの間、雷にでも打たれたやうに棒立ちになつてゐた。俺の足もとに禮拜するなんて、一體どうしたことだらう？ が、たうとう不意に『あの神様！』と叫びざま、兩手で顔を蔽つて、部屋の外へ駈け出してしまつた。それに續いて來客一同も、慌ててうつかり主人に挨拶も會釋もしないで、どやどやと外へ出てしまつたのである。ただ二人の僧だけは、再び祝福を受けるために長老の傍へ近寄つた。

「あの、長老が足にお辭儀をしたのは一たい何事せう、何かの象徴シメガタでせうかなあ？」なぜか急におとなしくなつたフォードル・パーヴロキツチが、また會話の緒口を見つけようとした。しかし特別、誰に向かつて話しかけようといふ勇氣もなかつた。ちやうど一行はこのとき庵室の圍ひの外へ出ようとするところであつた。

「僕は瘋癲病院や狂人どもに對しては責任を持ちませんよ。」と、ミウソフがいきなりむかつ腹を立てて答へた。「しかしその代り、あなたと同席はまつびら御免蒙りますよ、フォードル・パーヴロキツチ。それも、いいですか、永久にですよ。それはさうと、さつきのあの坊主はどこへ行つたんだらう？」

しかし、先刻、修道院長からの食事の招待を傳へた『あの坊主』はあまり長く待たせはしなかつた。一行が長老の庵室の階段をおりると、すぐに彼は、まるですつとそこに待ち受けてゐたやうに、さつそ

く出迎へたのである。

「神父さん、まことに恐縮ですが、わたくしの深い尊敬を修道院長にお傳へ下すつた上で、急に思ひがけない事情が起りましたため、誠に残念ですけれど、どうしても、お食事を戴く譯に参りませんからと、このミウソフになり代つて、あなたから宜しくお詫びをして下さいませんか。」と、いらいらした調子のミウソフは僧に向かつて言つた。

「その思ひがけない事情といふのは、わしのことではせう！」とすぐにフォードル・パーヴロキツチが擧足を取つた。「もし神父さん、このミウソフさんはね、わしと一緒に残りたくないから、ああ言はれるんですよ。さもなければ、すぐに出かけられる筈なんです。ね、だからおいでなさいよ、ミウソフさん、修道院長のとこへ顔をお出しなさい、そして——宜しく召しあがれ！ ようがすかね、あなたよりわしの方が御免を蒙りますわい。歸ります、歸ります、歸つて家で食べませうわい。此處ではとてもそんな勇氣がありませんからなあ、うちの大切な親類のミウソフさん。」

「僕はあなたと親類でもないし、これまで親類だつたこともありませんよ、本當にあなたは下種な人だ！」

「わしはあなたを怒らせようと思つて、わざと言つたんですよ。だつて、あなたは親類だと言はれるのが、馬鹿にお嫌ひですからな。しかし、あなたが何と胡麻化しなすつても、やつぱり親類には違ひありませんよ。それは寺曆を繰つて見れば證明できませぬ。ところがイワン・フォードロキツチ、お前も何なら残るがいいよ、わしが時刻を見はかつて馬車を寄越してやるからな。ミウソフさん、あな

たは禮儀から言つても、修道院長のそこへ顔を出さなくちやなりません、そしてわしたちがあんたと長老のところへ騒いだことを、お詫びしなくちやなりません……」

「あなたは本當に歸るんですか？ 嘘を仰しやるんぢやありませんね？」

「ミウソフさん、あんなことのあつた後で、どうしてそんな元氣があるものですか。つい夢中になつたのです、ほんとに御免なさい、皆さん、夢中になつてしまつたのです、おまけに打ちのめされたのですからな！ ほんとに恥かしいことです。ねえ、皆さん、人によつては、マケドニヤ王アレクサンドルのやうな心を持つてをるかと思へば、また人によつては、フィデルコの犬みたいな根性を持つたものもあります。わしの心はフィデルコの犬の方でしてな、すつかり氣おくれがしてしまひましたよ！ あんな狼藉を演じた後で、どの面さけてお食事に出たり、お寺のソースを平げたりできますか？ とても恥かしくつて、そんなことはできませんよ、失禮します！」

「とんと譯の分からない男だ、或ひは一杯くはすのかも知れないぞ！」だんだん遠ざかつて行く道化者を怪訝な眼つきで見送りながら、ミウソフは思案に暮れた。フォードル・バーヴロキツチは振り返つて相手が自分を見送つてゐるのに氣がつくと、投げ接吻を送るのであつた。

「いつたい君は修道院長のところへ行くのですか？」と、ミウソフはぶつきら棒にイワン・フォードロキツチに訊ねた。

「どうして行かない譯がありませんか？ それに、僕は昨日から修道院長に特別な招待をうけてゐるのですからね。」

「不幸にして、僕も同様、あの忌々しいお食事に、厭でも出席しなければならぬやうに思ふのですよ。」とミウソフは、僧が聞いてゐるのもお構ひなく、例の苦々しさうな苛立たしい調子で語をついだ。「それに我々が仕出かしたことを謝つた上で、あれは僕たちのせゐでないことを、説明するためにねえ……。君はどう思ひますか？」

「さう、あれが僕たちのせゐでないことを、明らかにする必要がありますね。それに親父も出ないことですから。」とイワン・フォードロキツチが答へた。

「さうさ、君の親父さんが一緒でたまるもんか！ 本當に忌々しい食事だよ！」

だがしかし、一同は先きへ進んで行つた。僧は押し黙つて、耳をすましてゐた。たつた一度だけ、森を通つて行く道すがら、修道院長がすつと前から一行を待つてゐることと、もう半時間以上も遅くなつてゐることを注意しただけであつた。誰一人それに答へるものはなかつた。ミウソフは憎々しげにイワン・フォードロキツチを見やりながら、

『まるで何事もなかつたやうに、しやあしやあとしてお食事へ出ようとしてゐやがる！』かう肚の中
で考へた。『鐵面皮即カラマゾフの良心だ！』

野心家の神學生

アリョーシャは長老を寢室へ扶け導いて寢臺の上へ坐らせた。それは、ほんのなくてはならぬ家具を並べただけの、ささやかな部屋であつた。寢臺は幅の狭い、鐵製のもので、その上には蒲團のかはりに毛氈が一枚だけ敷いてあつた。片隅には、聖像の前に經机が据わつてゐて、十字架と福音書とが載せてある。長老は力なく寢臺の上に腰をおろしたが、その眼はきらきらと光つて、息づかひも苦しうであつた。坐ると、彼は何か思ひめぐらすやうに、じつとアリョーシャを見つめるのであつた。

「行つておいで、な、行つておいで。わしの傍にはポルフィリーが一人をれば澤山ぢや、お前は急いで行くがよい。お前はあちらで入用な人ぢや、修道院長のお食事へ行つて給仕するがよい。」

「お願いですから、ここにをれと仰しやつて下さいまし。」と、アリョーシャは歎願するやうな聲で言つた。

「お前はあちらで餘計いり用なのぢや。あちらには人の和がない。お給仕をしてをつたら、何かの役に立たうも知れぬ。騒擾が持ちあがつたら、お祈りするがよい。それにな、俵へ長老は好んで彼をか

う呼んだ)この先き此處は、お前のあるべき場所ではないぞ。よいか、それをよく覚えてをるがよい。神様がわしをお召しになつたら、すぐ様この修道院を去るのぢやぞ。すつかり去つてしまふのぢやぞ。」アリョーシャはぎくりとした。

「どうしたのぢや? 當分ここはお前のをるべき場所ではないのぢや。お前が娑婆で大きな難業に耐へるやうに、今わしが祝福してやる。お前はまだまだ長い修行をすべき運命なのぢや。妻も娶らねばならぬぢや、どうしても。そして再びここへ來るまでには、まだいろいろ多くのことを耐へ忍ばねばならぬのぢやぞ。それに、なすべき仕事も澤山あるぢやらう。しかし、わしはお前といふ者を信じて疑はぬから、それでお前を娑婆へ送るのぢや。お前にはキリストがついてをられる。心してキリストをお守り申すがよい、さすればキリストもお前を守り給ふぢやらう! 大いなる悲しみに出逢ふでもあらうが、その悲しみの中にこそ幸福を見出すぢやらう。これがわしの遺言ぢや、——悲しみの中に幸福を求めるとよい。働け、撓みなく働け。よいか、今からこの言葉を覚えて置くのぢやぞ。まだお前とは話をすることもあらうけれど、わしの命數はもはや日限でなく、時刻で數へあげられてをるのぢやから。」

アリョーシャの顔には再び烈しい動亂の色が現はれた。唇の兩隅がびくびくと慄へた。

「またお前はどうしたのぢや?」と長老は靜かにほほ笑んだ。「俗世の人が涙で亡き人を送らうとも、われわれ沙門は神に召された法師を悦んでやればよいのぢや。悦んでその冥福を祈ればよいのぢや。さ、わしを一人にして置いてくれ、お祈りをせねばならぬからな。急いで行くがよい。兄の傍についてをるのぢやぞ、それも片方だけではなく、兩方の兄の傍にをるのぢやぞ。」

長老は祝福のために手を上げた。アリョーシャは無性にそこに居残りたかつたけれど、言葉を返す譯には行かなかつた。そのうへ、長老が兄ドミトリーに向かつて、地に額づいて禮拜したのはどういふ意味か、それが訊いてみたくて、危く口をこぼらせるところであつたが、しかし思ひ切つて問ひかけることができなかった。若しそれが叶ふことなら、訊ねるまでもなく長老の方から説明してくれる筈であつた。つまり、長老にはさうする意志がなかつたのである。しかし、あの禮拜は恐ろしくアリョーシャの心を打つた。彼はその中に神秘的な意味の伏在することを、盲目的に信じてゐた。神秘的な、そしてまた恐ろしい意味かも知れない。修道院長の晝餐の始まるまでと思つて（勿論、ただ食卓に侍するため）修道院をさして庵室の圍ひの外へ出た時、急に心臓を烈しく締めつけられるやうに覺えて、彼はその場に立ち竦んでしまつた。間近に迫まつた自分の死を豫言した長老の言葉が、再び彼の耳もとで響くやうな氣がしたのだ。長老の豫言、しかもあれほどきつぱりした豫言は、必らずや實現するに違ひない。それは飽くまでアリョーシャの信じて疑はぬところであつた。しかし、この人なき後の彼はどうなるだらう？ その姿を見、その聲に接することなく、どうして生きられよう？ それにどこへ行つたらいいのだらう？ 泣かずに修道院を出て行けと長老は命じてゐるのだ！ アリョーシャはもう長い間こんな悩みを経験したことがなかつた。彼は修道院と庵室を隔ててゐる木立の間を急ぎ足に進みながらも、己れの想念を持ちこたへることができなかつた。それほど彼は、その思ひに心を挫がれてゐたのである。彼は徑の兩側につらなる、幾百年を経た松の並木をじつと眺めた。その道程は大して遠くはなく、僅か五百歩ばかりに過ぎなかつたが、こんな時刻に誰ひとり出會す者はあるまいと思つてゐたのに、突

然、最初の曲がり角でラキーチンの姿を認めた。彼は誰かを待ち受けてゐたのである。

「僕を待つてるんぢやないかい？」アリョーシャはラキーチンと並び立つとかう訊ねた。

「まさしくその通り、君をさ。」ラキーチンにはやりと笑つた。「修道院長のところへ急いでるんだらう、知つてるよ。饗應があるんだからね。大主教がバハートフ將軍と一緒に來られたとき以來、あれほどの御馳走は今までなかつたくらゐだ。僕はあんなところへ行くのには御免だが、君は一つ出かけて、ソースでも配り給へ。ただ、一つ訊きたいことがあるんだ。一體あの寢言は何のことだい？ 僕はそれが訊きたかつたのさ。」

「寢言つて何？」

「あの、君の兄さんの、ドミトリー・フョードロキッチに向かつて、地に額づいてお辭儀をした奴さ。おまけに額がこつんといつたぢやないかい！」

「それは君、ソシマ長老のことなの？」

「ああ、ソシマ長老のことだよ。」

「額がこつんだつて？」

「ははあ、言ひ方がぞんざいだといふのかい！ まあ、ぞんざいだつていいやね。で、一體あの寢言は何を意味するんだ？」

「知らないよ、ミーシャ、何のことだかさつぱり！」

「さうだらう、長老が君に話して聞かせる筈はないと思つたよ。勿論、何も難かしい問題ではないの

さ。いつもお決りの有難い謔言に過ぎないらしい。しかし、あの手品はわざと拵へたものなんだぜ。今に見給へ、町ぢゆうの有難や連が騒ぎ出して、縣下一帯に持ち廻るから。『一體あの寝言は何の意味だらう？』つてんでね。ところが、あのお爺さんなかなか観察眼が鋭いよ。犯罪めいたものを嗅ぎ出したんだね。まづたく君の家は少々臭いぜ。』

「犯罪つてどんな？」

ラキーチンには何やら話したいことがあるらしかった。

「君の家で起こるのさ、その犯罪めいたものが。それは君の二人の兄さんと、有福な君の親爺さんの間に起こるんだよ。それでゾシマ長老も萬一の場合を慮つて、額でこつんをやつたのさ。後で何か起つた時に、『ああ、なるほど、あの上人が豫言した通りだ』と言はせるためなんだ。尤も、あの爺さんが額でこつんとやつたのは、豫言でも何でもありやしないよ。ところが、世間では、いやあれは象徴だの諷刺だのと、くだらないことをいふのさ！そして犯罪を未然に察したとか、犯人の目星をつけたとか言ひふらすのだ。宗教的畸人なんてものはみんなさうなんだよ。居酒屋に向かつて十字を切つて、お寺へ石を投げつけるつて奴さ。君の長老もその類ひで、正直なものは棒で追つばらひながら、人殺しの足もとに這ひつくばるつてね。』

「どんな犯罪なの？ 人殺しつて誰のことだい？」アリョーシヤは釘づけにされたやうに棒立ちになつた。ラキーチンも立ちどまつた。

「どんなつて？ いやに白はくれるね？ 君がもうこのことを考へてゐることあ、賭をしてもいい

よ。しかし、こいつあちよつと面白い問題だ。ねえアリョーシヤ、君はいつも二股膏藥だけれど、とにかく本當のことを言ふから、訊いてみるんだが、いつたい君はこのことを考へてたのか、それとも考へてゐなかつたのかい？」

「考へてたよ。」とアリョーシヤは低い聲で答へた。で、ラキーチンの方がいささか面喰つた形だ。

「何だつて？ 君は本當にもう考へてたのかい？」と彼は叫んだ。

「僕は……僕は別に考へてゐたつていふ譯ぢやないけれど、と、アリョーシヤは呟くやうに答へた。

「いま君があんな變なことを言ひ出したので、何だか僕自身もそんなことを考へてゐたやうな氣がしたのよ。」

「ほうら、(君ははつきり言ひ表はしたんだよ)ほうらね？ 今日お父さんとミーチエンカ兄さんを見てゐるうちに、犯罪のことを考へたんだろ？ して見ると、僕の推察に誤りはないだらう？」

「まあ、待ち給へ、待ち給へ。」とアリョーシヤは氣づかはしげに遮つた。「君はどういふところからそんな風に考へるの？……何だつて君はそんなことばかり氣にするのだ、これが先づ第一の問題だよ。」

「その二つの質問はまるで別々の問題だが、しかし尤もなことだよ。おのおの別々に答へよう。先づどういふところから感づいたかといへば、けふ君の兄さんドミトリイ・フォードロキツチの赤裸々の正體を、突然、一瞬の間にすつかり見抜いてしまつたからだ。さもなければ、こんなことを感づく筈はなかつたのさ。つまり、何かしらちよつとしたきつかけから、すつかりあの人の全貌を掴んでしまつたのさ。ああいふ正直一途で、しかも情慾の熾んな人には、決して踏み越えてならない一線があるのだ。ま

つたくあの人は、何時どんなことで親爺さんを刀でぐさりやらないにも限らないよ。ところが、親爺さんは酔つ拂ひの放埒な道樂者で、何ごとにつけても決して度といふものが分からない——そこでお互に己れを制するといふことがないから、あつといふ間に溝の中へ眞つ逆さまに……」

「違ふよ、ミーシャ、違ふよ。もしそれだけのことなら。僕も安心したよ。そこまでは行きやしないから。」

「何だつて君は、そんなにぶるぶる慄へてるんだい？ 一たい君にかういふことが分かるかい？ よしやあの人が、ミーチェンカが正直な人だとしても（あの人は馬鹿だけれど正直だよ）、しかし、あの人は好色だからね。これがあの人に對する完全な定義だ、あの人の内面的本質だ。これは、親爺さんからあの人が下劣な肉慾を承け継いだからだよ。僕はただ君にだけに驚ろいてるよ、アリョーシャ。君はどうしてそんなに純潔なんだらう？ だつて君もやつぱりカラマゾフ一族ぢやないか！ 君の家では肉慾が炎症ともいふべき程度に達してゐるんだものね。ところが、今三人の好色漢がどうどうめぐりをやつてゐる……短刀を長靴の中に隠してね。かうして三人が鉢合せをしたんだが、君は或ひは第四の好色漢かも知れないぜ。」

「君はあの女のことを思ひ違ひしてゐるよ。ミーチャはあの女を……輕蔑してゐるんだ。」妙に身慄ひをしながらアリョーシャがかう言つた。

「グルーシェンカをかい？ ううん、君、輕蔑しちゃゐないよ。現在自分の花嫁を公然とあの女に見變へた以上、決して輕蔑してゐるとはいへないよ。茲には……茲には……今のところ君に理解の可能な

い或るものが存するのさ。もし茲である男が一種の美、つまり女の肉體、もしくは肉體のある一部分に迷ひ込んだとしたら（これは好色家でなくては分からないことだが）、そのためには自分の子供でも渡してしまふ、父母も祖國露西亞も賣つてしまふのだ。正直でありながら盗みをやる、溫良でありながら人殺しをする、誠實でありながら裏切を犯す。女の足の詩人ブウシキンは、自分の詩の中で女の足を歌つてゐる。ほかの連中は歌ひこそしないが、女の足を見ては戰慄を禁ずることができないのだ。しかし、足だけには限らないがね……だから、あの人がグルーシェンカを輕蔑してゐるに決つてゐても、この際、輕蔑なぞ何の役にも立ちはないさ。輕蔑してゐる癖に、離れることができないんだ。」

「それは僕にも分かる。」と、アリョーシャが出し抜けに口を辻らせた。

「へえ？ 君がそんなにいきなり、分かるつて言つてのけたところを見ると、君はこのことが本當に分かつてるんだね。」と、ラキーチンは意地悪く北叟笑みながら言つた。「君は今、何の氣なしに、ふいと口を辻らせたんだが、それだけ君の告白はよけいに尊いんだよ。つまりこの問題はもう君にはお馴染なんだね。この肉慾といふことを、もう考へてたんだね！ おやおや、大變な童貞だよ！ と言ひたくなるね。ねえ、アリョーシユカ、君がおとなしい聖かい人間だつてことには、僕も異存はないが、おとなしい癖に君は大變なことを考へてるんだね、本當に大變なことを君は知つてるんだね！ 童貞でありながら、もうそんな深刻なところへ進んでゐるんだ。それは僕も前から氣づいてゐたよ。君自體やはりカラマゾフだ、完全無缺なカラマゾフだ——つまり何か血統とでもいふのかなあ。親父の方からは好色の、母親の方からは宗教的畸人の性質を承けついでんだ。何を慄へるんだ？ それとも圖星をさされた

のかい。時にね君、グルーシエンカが僕に頼んだんだぜ、『あの人を（つまり君のことさ）つれて来て頂戴、あたしあの人を法衣を脱がしちやふから、』つてさ。それあ、まったく熱心に頼むんだ、連れて来い連れて来いつて！ 僕あ考へちまつたよ、何だつてこの女は、かうまで君に興味を持つのかと思つてさ。ねえ君、あれであの女も、なかなか非凡な女だよ！」

「宜しく言つて、僕は行かないと傳へてくれ給へ。」茲でアリオシャは苦笑ひをした。「それよりか、ミーシャ、言ひさしたことを話してしまひ給へ。後で僕の考へを話すから。」

「話してしまふもしまはないもありあしない、何もかも明白だあね。こんなことあ古臭い話だよ。もし君の中に好色漢が隠れてゐるとすれば、同腹の兄さんのイワンはどうだらう？ あの人もやはりカラマゾフだからね。ここに君たちカラマゾフ一族の問題が潜んでゐるのさ。——好色漢と、守銭奴と、宗教的畸人か！ 今イワン君は無神論者の癖に、何か恐ろしく馬鹿げた、譯の分からない目算のために、神學的な論文を冗談半分に雑誌に載せてゐる。そしてその陋劣さを、自分でちやんと承知してゐるのだ。それにまだ、兄のミーチャから花嫁を横取りしようとしてゐるが、たぶんこの目的は成功するだらう。しかもそのやり口はといへば、當のミーチェンカから承諾を得た上なんだからなあ。それといふのも、ミーチェンカはただ一途に許嫁の絆を逃れて、グルーシエンカの許へ走りたいばかりに、自分から進んで未來の妻を譲らうとしてゐるからだ。しかもそれを清廉潔白な氣持でやつてゐるのだから、注目に値するよ。いや、全く拙みも拙つて因果な連中だ！ かうなつては、何が何やら頓と分からなくなるよ。自分の陋劣を自覺しながら、その陋劣の中へ潜りこんで行くのだからな！ まあ、その先を聴き

給へ。今ミーチャの行く手を塞いでゐるのは、老いぼれの親父だ。あの親父さん、このごろ急にグルーシエンカに血道を上げて、あの女の顔を見ただけで、涎をだらだら流してゐるぢやないか。親父さんがいま庵室で大亂痴氣を演じたのも、ただミウソフが、無遠慮にあの女のことを淫賣だなんて言つたからさ。まるでさかりのついた猫より下劣だ。以前あの女は何か後ろ暗い、酒場に關係したことで、親父さんに雇はれてゐただけなんだが、いまごろ急にその容色に氣がついて、狂氣のやうに逆せ上つて口説きおとしにかかつたんだ、勿論、その口説も眞正直なものではないさ。だから、この二人は、——親父さんと兄さんとは、どの道、衝突せずにはゐられないよ。ところがグルーシエンカの方は、どつちつかずの曖昧なことで二人を胡麻化して、兩方をからかつてゐるんだ。そして、どつちが得だか日和見をしてゐるのさ。なぜつて、親父さんの方からは金が曳き出せるけれど、その代り結婚はしてくれず、とどの詰りは、猶太人式のやり口で、財布の口を緊めてしまふかも知れない。かうなるとミーチャにも独自の價値が生じて来る。金はないが、その代り結婚することが出来る。さうだ、結婚することが出来るのだ！ 自分の許嫁の、比類まれな美人で、金持で、貴族で、大佐令嬢たるカテリーナ・イワーノヴナを棄てて、町長のサムリノフといふ佛々爺の小商人に圍はれてゐた、グルーシエンカと結婚するんだ。かうしたすべての事情から、本當に何か犯罪めいた衝突が起こるかも知れないよ。ところが、君の兄さんのイワンはそれを待ち構へてゐるんだ。さうなれば思ふ壺にはまるんだからな。瘦せるほど思つてゐるカテリーナ・イワーノヴナも手に入れば、六萬留といふあの女の持參金も手繰りよせられようといふ肚だ。イワン君のやうな素寒貧にとつて、これだけの金高は手初めとしてなかなか悪くないよ。おまけに、それが

ミーチャを侮辱しないばかりか、却つて一生恩に着られるといふものだ。僕はよく知つてゐる。つい先週ミーチェンカが或る料理屋で、ジブシイの女たちと一緒に酔ひつぶれた擧句、自分はカーチャを妻にする値うちがないけれど、弟のイワンなら立派にその資格があると自分で大きな聲で嘯鳴つたんだもの、當のカテリーナ・イワーノヴナにしても、イワン・フォードロキッチのやうな誘惑者にかかつては、勿論、しまひには兎を脱ぐに違ひない。現に今でも、彼女は二人の間に立つて迷つてゐるんだからね。それはともかく、一體イワンはどうして君らをそんなに巧く丸め込んでしまつたのかしら、君らはみんなあの人を三拜九拜してゐるぢやないか？ ところが、あの方は君らをせせら笑つてゐるんだぜ。願つたり叶つたりだ。おれはお前たちの勘定で御馳走になりますつてね。」

「だが、どうして君はそんなことを知つてゐるの？ どうしてさうきつぱりと言ひ切るの？」アリョーシャはかう鋭く、眉をひそめながら、不意に訊ねた。

「ぢやあ、なぜ君は今さう言つて訊ねながら、僕の返事を怖れてゐるんだい？ つまり僕の言つたことが本當だつてことを承認してゐるぢやないか？」

「君はイワンが好きぢやないんだね。イワンは金なんか迷つてやしないよ。」

「さうかしら？ しがしカテリーナ・イワーノヴナの美貌はどうだね？ 金だけが問題ぢやないんだよ。尤も、六萬留といへば、まんざら憎くもなからうがね。」

「イワンはもつと高いところに目をつけてるよ。イワンは何萬あらうとも、金なんか迷はされはしない。イワンは金や平安を求めてはゐない。たぶん苦痛を求めてゐるんだらう。」

「それはまた何といふ夢だらう？ほんとに君たちは……お殿様だよ！」

「ううん、ミーシャ、兄の心は荒れてゐるんだよ。兄の頭は囚はれてゐるんだ。イワンの考へてゐる考へは偉大だが、まだ解決がついてないのだ。イワンは幾百萬の金よりも、思想の解決を望むやうな人物の一人だよ。」

「アリョーシャ、それは文學的な剽竊だよ。君は長老の言葉を焼き直したまでだ。ほんとにイワンは君たちに大變な謎を投げかけたもんだよ！」とラキーチンは露骨に敵意をあらはしてかう叫んだ。彼は顔色まで變へて、唇は變にひん曲がつてゐた。「ところが、その謎は馬鹿げたもので、解くほどのものは何にもありやしない。ちよつと頭を捻つたらすぐ分からあな。あの方の論文は滑稽な、愚にもつかぬものさ。さつきあの馬鹿々々しい理論を聴いたが『靈魂の不滅がなければ、善行といふものもない。従つて何をして構はないことになる』つて言ふんだつたね、（ところで、兄さんのミーチェンカが、ほら君も聞いただらう、『覺えて置かう。』つて叫んだぢやないか）。この理論はやくざ者にとつて……僕の言ひ方は少し悪口じみて來たね、これやいかん……やくざ者ぢやない、『解決出來ないほど深い思想』を抱いた小學生式の威張り屋さんにとつて、頗る魅力があるからね。大法螺吹きだよ。ところで、その内容にいたつては『一方から言へば承認しない譯に行かず、また一方から言つても、やはり承認しない譯には行かぬ！』で盡きてゐる。あの方の理論は陋劣の塊だよ！ 人類は、たとへ靈魂の不滅を信じなくても、善行のために生きるだけの力を、自分自身の中に發見するに違ひない！ 自由と、平等と、友誼に對する愛の中に發見するに違ひない……」

ラキーチンは熱狂してしまつて、殆んど己れを制することができなかつた。が、不意に何を思ひ出したのか、口を噤んだ。

「まあ、いいさ。」前よりも一倍口をひん曲げて彼は苦笑した。「君は何を笑つてるんだい？ 僕を下種だとも思つてるのかい？」

「ううん、僕は、君が下種だなんて、考へて見ようとしたこともないよ。君は賢い人間だよ、だが……救してくれ、僕はただぼんやり何の氣なしに笑つただけだから。僕は、君がさう熱するのにも無理はないと思ふよ、ミーシャ。君があんまり夢中になるので、僕にも見當がついたんだが、君自身カテリーナ・イワーノヴナに氣があるんだらう。僕は前からさうぢやないかと思つてゐたんだよ。それだから、君はイワン兄さんを好かないんだ。君は兄に嫉妬してるんだらう？」

「そして、あの女の金にもやはり嫉妬してるだらう？ とでも言ふつもりなのかい？」

「ううん、僕は金のことなんか、何にもいつてやしないよ。君を侮辱するつもりぢやないんだもの。」
「君の言ふことだから信じるさ。しかし何と言つたつて、君たちや兄貴のイワンなんかどうならうと構やしないよ！ 君たちにや分かるまいけれど、あんな男は、カテリーナ・イワーノヴナのこととは別としても、蟲が好かないんだよ。何のために僕があつた男が好きになるんだ、羨面白くもない！ 向かふだつてわざわざ僕の悪口を言つて呉れるんだもの。僕にだつてあの男の悪口を言ふ権利がなくつてさ！」
「兄が君のことを、いいことにしろ悪いことにしろ、何か言つてゐたつて話は聞かないよ。兄は君のことなんか、てんで話しやしないよ。」

「ところが、あの男は一昨日カテリーナ・イワーノヴナの家で、僕のことを散々にこきおろしたつて話を聞いたよ——それくらゐあの男はこの忠實なる下僕に興味を持つてるんだよ。かうなると、いつた誰が誰に嫉妬してるんだか、さつぱり分かりやしないさ！ 何でもこんな説を、お吐き遊ばしたさうだよ。もし僕が極めて近き將來に管長になる野心を棄て、剃髪を肯んじないとすれば、必ずすべテルブルグへ行つて何處かの大雑誌に關係して、必ずす批評欄にこびりついて、十年ばかりはせつせと書き續けるが、結局その雑誌を乗り取つてしまふ。それから再び發行を續けるが、必ずす自由主義的かつ無神論的方向をとつて、社會主義的な陰影、といふよりは、ちよつびり社會主義の光澤をつけるのだ。がしかし、耳だけは一心にひつ立てる、といふのも實際は敵にも味方にも用心して、衆愚には目を反けるつて譯だ。僕の社會游泳の終りは、君の兄貴の解釋によるとかうなんだ……社會主義の色調などにはお構ひなく、豫約金を流動資本に廻して、誰か猶太人を顧問に、どしどし回轉させて、しまひにはペテルブルグに素晴らしい家を建てて、そこへ編輯局を移し、残りを貸家に當てるつていふんだ。しかもその家の敷地まで、ちやんと指定するぢやないか。いまペテルブルグで計畫中だとかいふ、リテイナヤ街からウイボルグスカヤ街へかけて、ネヴ河に架かる新しい石橋の傍なんださうだよ……」

「いや、ミーシャ、それはすつかりその通り寸分たがはずの中するかも知れないよ！」我慢しきれないで、面白さうに笑ひながら、不意にアリオ・シャがかう叫んだ。

「君まで皮肉を言ふんだね、アレクセイ・フォードロキッチ。」

「ううん、さうぢやない、僕冗談に言つただけなんだ、勘忍してくれ給へ。僕はまるで別なこと考へ

てたもんだから。ところで、ねえ君、誰が一たいそんな詳しいことを知らせたの、一たい誰からそんなことを聞いたの？ 兄がそんな話をした時に、君自身カテリーナ・イワーノヴナのところにゐる筈もないからねえ。」

「僕はゐなかつたが、その代りドミトリイ・フォードロキッチがゐたのさ。僕はドミトリイ・フォードロキッチから自分のこの耳で聞いたんだ。が、しかし實は、あの人が僕に向かつて話した譯ぢやない。僕が立ち聞きしたのさ、とは言つても、勿論、心ならずも耳に入つたんだ。その譯は、僕がグルーシエンカの家へ行つたとき、ドミトリイ・フォードロキッチが来たもんだから、先生が歸るまで寢室を出ることができなかつたのさ。」

「ああ、さうさう、僕忘れてゐたが、あの女は君の親類だつてねえ……」

「親類だつて？ あのグルーシエンカが僕の親類だつて？ 急にラキーチンは眞赤になつてかう叫んだ。「一たい君は氣でもちがつたのぢやないか？ 頭がどうかしてるぜ。」

「どうしてさ？ ぢや親類ではないの？ 僕はそんな風に聞いたんだけれど……」

「一たい君は何處でそんなことを聞いたんだい？ よして呉れ、君達カラマゾフ一統は、頻りに何か豪い古い家柄の貴族を氣どつてゐるけれど、君の親父は道化役者の眞似をしながら、他人の家の居候をして歩いて、お情けで臺所の隅に置いて貰つてたんぢやないか。よしんば僕が坊主の息子で、君たちのやうな貴族から見れば蜚語同然かも知れないとしても、そんな風な面白半分な侮辱はよして貰ひたいね。僕にだつて名譽心があるからね、アレクセイ・フォードロキッチ。が僕がグルーシエンカの親類なんか

で堪るものか、あんな淫賣のさ！ どうか御承知お願ひますよ！」

ラキーチンはおそろしく捕縛を起こしてゐた。

「後生だから勘辨してくれ給へ。僕はそんなこととは思ひもよらなかつたもの。それにしても、どうしてあの女が淫賣なの？ 一たいあの女が……そんなことをしてるの？」とアリオーシヤは不意に振くなつた。「もう一度いふけど、僕は親類だつて話を聞いたんだよ。君はよくあの女のとこへ行くけれど、戀愛關係はないつて自分で言つたぢやないか……僕は君までがあの人をそんなに輕蔑してゐようとは思はなかつたよ？ ほんとにあの女はさうされても仕方のないやうな人かねえ？」

「僕があゝの女のとこへ行くのにも、ちやんと原因があるかも知れないさ。もうこんなこと君には澤山だ。ところが、親類のことだが、それは君の兄貴か、それとも親父さんが、寧ろ君をあゝの女と親類にしてくれるだらうさ。僕の知つたこつちやないよ。さあ、たうとう來たぜ。君は臺所の方からはいつた方がいいだらう。おや……あれは何だらう、どうしたんだらう？ 僕たちが遅刻したのかしら？ しかし、こんなに早く濟む譯がない。それとも、カラマゾフ一統がここでもまた、何か騒ぎをやつたのかな？ てつきりさうだよ。ほら、君の親父さんだ、そしてイワン・フォードロキッチも後から出て來たぜ。あれは修道院長のところから無理無體に飛び出したんだよ。そら、イシール神父が上り段の上から何か二人に聲をかけてるぜ。それに君の親父さんも喚きながら手を振つてゐる、確かに悪態をついてるんだよ。おやおや、ミウーソフ氏まで馬車で出かけて行くところだ、ね、見えるだらう。そら、地主のマクシーモフまで駈けて行かあ、——きつと醜態を演じたんだよ。してみると食事はなかつた譯だな！ ひよつ

とすると修道院長をひつばたいたんぢやないかしら？ それとも、あの連中が引つばたかれたのかな？
それならいい氣味だが！……」

ラキーチンが騒ぎ立てるのも無理ではなかつた。事實、古今未曾有の、意想外な醜事件が持ちあがつたのである。一切は「イノセント・シヤン靈感」から起こつたのである。

Ⅶ

醜態

ミウソフはイワシ・フォードロキツチといつしよに修道院長のところへはいつて行つた時、眞實申し分のない、デリケートな紳士らしく、急速に一種微妙な心的過程を経て、腹を立ててゐるのが恥かしくなつて來た。彼は肚の中で、フォードル・パーヴロキツチは何處までも輕蔑せずにはをれぬ下種な人間だから、先刻、長老の庵室でしたやうに、彼といつしよに冷靜を失つて、自分まで夢中になることはないのだと思つた。「少くとも、これについて坊さん達には何の罪もないのだ。」と、彼は修道院長のところの上り口で、急にさう考へた。「もし此處の坊さん達が物のわかつた連中でさへあれば、(あのニコライ院長はやはり、貴族階の人だとのことだ)、どうしてその人達に優しく、愛想よく、叮嚀に應對し

て悪い筈があらう？」……「議論なんかしないで、かへつて一々相槌を打つて、愛嬌で惹きつけてやらう、そして……そして……結局おれがあのイソツプの、あの道化の、あのビエローの仲間ではなく、却つて皆んなと同じやうに、あいつのために酷い目に合つたんだといふことを證明してやらう……」
係争中の森林の伐採權も漁業權も(そんなものが何處にあるのか、彼は自分でも知らなかつた)、今日すぐにも、きつぱり譲歩してしまはう、それにあんなものは値段にしてからが、ごく僅かなことなんだから。そして修道院相手の訴訟は一切とり止めてしまはう、と決心したのである。

かうした殊勝な心掛は、修道院長の食堂へはいつた時、更に強固になつた。しかし、修道院長のところには正式には間敷が二つしかなかつたので、食堂といふものはなかつた譯だ。尤も、長老の庵室よりはすつと手廣く、便利にできてゐたが、部屋の飾りは長老のところ同様、かくべつ贅澤らしいところがなかつた。家具類は二十年代の流行おくれな、マホガニイの革張りだつた。そればかりか、床にペンキさへ塗つてないほどであつた。その代り、全體が光るほど清楚に磨き上げられて、上には高價な草花も澤山おいてある。しかし、今この部屋でいちばん見事なのは、立派な器を並べた食卓だけである。が、それも比較的話である。とにかく卓布はきれいだし、食器はびかびか光つてゐる。上手に焼かれた麵麩が三いろに、葡萄酒が二本、修道院でできる素晴らしい蜂蜜が二壺、それに近在でも有名な、修道院製のクワスを入れた大きな硝子の壺などが出てゐた。ウオツカは全然出てゐなかつた。後でラキーチンの話したところによると、この時の食事は五皿調理されてゐた。蝶鮫の魚汁に魚肉饅頭、何か巧みな特

* 寓話作者イソツプより轉じて諷刺紙、露西歐の聲。

わたくし共はあの人を愛するやうになつたかも知れません。さあ皆さん、どうぞ召しあがつて下さいませう。」

彼は聖像の前に立ち、聲に出して祈禱を始めた。一同は恭しく首を垂れた。地主のマクシーモフは格別ありがたさうに合掌しながら、ひときは前へ乗り出した。

丁度この時フォードル・パーヴロキッチが最後の悪戯を演じたのである。ちよつと注意しておくが、彼は本當に歸つて行くつもりなのであつた。長老の庵室であんな不體裁なことをした擧句、そしらぬ顔で修道院長の食事へのこのこ出かけて行くやうなことは、到底できない相談だと感じたのは事實である。が自から慚愧して、自責の念に驅られてゐたといふ譯ではない。或ひは、却つて正反對であつたかも知れない。しかし、何にしても、食事に連るのは無作法だと感じたのである。ところが、例のがた馬車が、宿屋の玄關先へ廻されて、將にその中へ乗り込まうとした時、不意に彼は足を止めた。先ほど長老のところで言つた自分の言葉が、ふと胸に浮かんだのである。「わたくしは何處か人中へはいつて行く時いつも、自分が誰よりも下劣な人間で、人から道化もの扱ひにされるやうな氣がします。そこでわたくしは、それちや一つほんとに道化を演じてやらう。なかに、あいつらの方がみんな揃ひも揃つて俺より馬鹿で下劣なんだ、といふ氣になるのでございます。」彼は自分自身の卑劣さに對して、人に仇を打たうといふ氣になつたのである。ふと今、彼はいつか大分前に、「あなたはどうした譯で誰それをそんなに憎むのです？」と訊かれたことを思ひ出した。その時彼は道化た破廉恥のこみあげるままに、かう答へた。「それにかうです、あの男は實際わしに何にもしやしません、その代りわしの方であの男に

つ汚い、厚かましい仕打をしたんです。すると急にわしはあの男が憎らしくなりましてね。」今それと思ひ出すと、彼はちよつとのあひだ考へ込みながら、靜かな毒々しい薄笑ひを浮かべた。その眼はきらりと光つた、唇まで慄へだした。「どうせ一旦やりかけたものなら、序手にしまひまでやつちまへ。」彼は急にかう決心した。この瞬間、彼の心の底に潜んでゐた感じは、このやうな言葉で現はすことができただであらう。「もう今となつては名譽恢復も覺束ない、ええ、構ふもんか、もう一度あいつらの顔に思ひきり唾をひつかけてやれ。なんの、あいつらに斟酌することがあるものか、それつきりのことさ！」彼は馭者に待つてをるやうに言ひつけておいて、急ぎ足に修道院へとつて返し、まつすぐに院長のところへ赴いた。彼はまだ、何をすることも自分でもよく分かつてゐなかつたが、もうかうなつては自分を抑へることができない、何かちよつとした衝動があつたら、それこそ忽ち、極端な陋劣な行動に出るだらう、といふことはよく承知してゐた。しかし、それは單に陋劣な行爲にとどまつて、犯罪だの、裁判沙汰になるやうな悪ふざけといふやうなものでは決してない。この點では、彼はいつも己れを抑制する術を心得てゐて、時には自分でも感心するほど巧くゆくことがあつた。彼が修道院長の食堂へ姿を現はしたのは、いま祈禱が済んで、一同が食堂に近づいた瞬間であつた。彼は闕の上に立ちどまつて、一同をひとわたり見廻すと、みんなの顔をじろじろと眺めながら、引き伸ばしたやうな、臆面もなく意地の悪い聲を立てて笑ひ出した。

「みんなわしが歸つてしまつたと思つてゐたのに、わしはほうら、この通りさ！」と彼は廣間ぢゆうに響きわたるやうな聲で喚いた。

一瞬間、人々はじつと彼の顔を見つめながら、押し黙つた。今にも何か忌はしい馬鹿げた事件が持ちあがつて、きつと醜態を曝け出すに違ひないと、一同は直覺したのである。殊にミウソフはこの上なく優しい気分から、忽ちにしてこの上なく猙獰な気分に変つてしまつた。彼の心の中で消滅し鎮靜したすべてのものが、一どきに甦つて頭を擡げたのである。

「駄目だ、もうこれは我慢ができない！」と彼は叫んだ。「斷然、できない……絶対にできない！」かつと血が頭に突き上つた。彼は言句につまつたが、もはや言葉どころではなかつた。彼は自分の帽子を引つ掴んだ。

「一體あの人は何ができないといふんだらう？」とフォードル・パーヴロキッチが喚きたてた。「何が絶対にできない、どうしてもできない」んだらう？ 方丈様、はいつでも宜しうございますかね？ 御招待にあづかつた一人でございますが？」

「それはようこそ、さあおはいり下され。」院長は答へた。「皆様、まことに失禮ながら」と彼はつけ加へた、「心の底からのお願ひでございます。一時の譚ひを捨てて、この平和な食事の間に、神に祈りを捧げながら、血縁の和樂と愛の中に一致和合して下さりませ……」

「いや、いや、駄目なことです！」とミウソフはわれを忘れて叫んだ。

「ミウソフさんが駄目なら、わしもやつぱり駄目ですわい。わしも歸ります。わしはそのつもりで來たんですよ。もうかうなれば、ミウソフさんと一緒にどこへでも行きます。ミウソフさんがお歸りなら、わしも歸るし、お残りなら、わしも残ります。あなたが血縁の和樂と仰しやつたのが、特別ミウ

ソフさんの胸にこたへたのですよ、院長様。あの人は自分を、わしの親類だと認めてをらんのですからな。さうだらう、フォン・ゾン？ そら、そこに立つてをるのがフォン・ゾンでさあ。御機嫌さん、フォン・ゾン！」

「あなたは……わたくしに仰しやるので？」地主のマクシーモフは啞然たる形で口ごもつた。

「無論お前にだよ。」とフォードル・パーヴロキッチは呶鳴つた。「でなかつたら誰に言ふんだい？」

まさか僧院長様がフォン・ゾンであらつしやる筈もなからうぜ。」

「でも、わたくしもフォン・ゾンではございません、わたくしはマクシーモフです……」

「いんにや、お前はフォン・ゾンだよ。方丈さま、フォン・ゾンといふのは、何者か御存じでございますか？ これはある犯罪事件に係つたことでございますよ。この男は悪所で殺されたんです——お寺様の方ではああいふ場所をかう申すさうですな——殺された上に、裸かに剝がれて、おまけにいい年をしてをりながら、箱の中へ敲きこまれて、貨物列車でベテルブルグからモスクワへ發送されたんですよ、しかも番號を附けられましてね。ところで箱の中へ敲きこまれる時、賣女どもが歌をうたつたり、手琴つまりピアノですな、あれを弾いたりしたさうですよ。これが今申した當のフォン・ゾンなのでございます。それが墓場から生き返つて來たのですよ。さうだらう、おいフォン・ゾン？」

「一體これは何たることだ？ どうしたといふのだらう？」さういふ聲が僧たちの間から聞こえた。

「行かう！」と、ミウソフはカルガノフに向かつて叫んだ。

「いんや、失禮ぢやがな！」と、また一度部屋の中へ踏んこみながら、フォードル・パーヴロキッチ

が甲高い聲で遮つた。「まあ、わしにも言ふだけのことを言はして下さい。あちらの庵室でわしは無駄者といふ汚名を着せられました。それが、わしは、わしのことをほざいたからなんです。わしの親類すぢのミウソフさんのお好みでは、言葉の中に plus de noblesse que de sincerité、貴高さがよりはおださうですが、わしの好みはその反対で plus de sincerité que de noblesse、貴高さがよりはおださうです。onblesse、なんか蕪くらへだ！ なあさうぢやないか、フォン・ゾン？ 院長様へ申し上げます、わたくしは道化者で、道化じみた真似ばかりいたしますが、それでも名譽を重んずる騎士でございませう。忌憚なく所信を申し上げます。さやう、わたくしは名譽を重んずる騎士でございませう。ところが、ミウソフさんの肚の中には、傷つけられた自尊心のほか、何にもありやしません。わたくしがここへ参りましたのも、或ひは自分で親しく一見して、忌憚のないところを申し上げるためであつたかも知れません。わたくしの伴のアレクセイがここにお籠りしてをります。父親としてあれの身の上が気がかりでございます。また心配するのが當り前でございますよ。わたくしは始終耳を敬て、お芝居をしながら、そつと様子を見てをりましたが、今こそあなたの方の前で最後の一幕をお目にかけるつもりでございます。一體いまわが國はどんな有様でせうか？ 倒れかかつたものは倒れてしまひます。また一ど倒れたものは、もう永久に起き上れつてありません。それぢやありませんや！ わたくしは起き上りたいのでございます。有徳の神父様がた、わたくしにはあなたの方が、憤慨に堪へるのでございます。一たい懺悔といふものは偉大なる聖秘禮でございます。これはわたくしも有難いものと思つて、その前にひれ伏してもよいくらゐの覺悟をいたします。ところが、あの庵室ではみんな膝を突いたまま、大

きな聲で懺悔をしてをるぢやありませんか。全體、聲を出して懺悔することが赦されてをるのでございますか？ 昔の上人様たちが、懺悔は口から耳へ傳へよと、ちやんと掟を定められました。それであつてこそ人間の懺悔が神祕となるのであります、しかも、それが昔からのお定まりですよ。それでなくて、どうしてわたくしがみんなの前で、然々かういふことをいたしましたと、つまりその然々かういふことを話すことができますかといふんですよ！ 時にはとても口に出しては言へないことだつてありますからなあ。そんなのは全く不體裁ですよ！ いや、神父様がた、あなた方と一緒にをつたら鞭打教のお仲間へ引きずり込まれてしまひます。……わしはよいをりがあり次第、宗教會議へ上申書を送りますよ、そして伴のアレクセイは家へつれて歸ります……」

ここでちよつと斷つて置くが、フォードル・パーヴロキッチは世間の取沙汰には耳の早い方であつた。いつか、意地の悪い讒誣が擴まつて、大主教の耳にさへはいつたことがある（この修道院だけでなく、長老制度の採用されてゐる他の修道院に關してであつた）、それは長老があまり尊敬され過ぎて、修道院長の威嚴さへ損ふほどに至つた。とりわけ長老は懺悔の神祕を濫用するなどといふことであつた。この非難は馬鹿々々しいものであつたから、この町ばかりでなく全體に亘つて、自然といつの間にか消滅してしまつた。ところが、フォードル・パーヴロキッチを捉まへて、本人の神經を驅りたてて、いづことも知らぬ穢れの深みへ、次第に遠く連れて行く愚かな悪魔が、この古い非難を彼の耳に吹き込んだのであるが、しかも當のフォードル・パーヴロキッチにはこの非難の意味が初手から分からなかつたのである。で、それを正確に言ひ現はすこともできなかつたし、おまけに長老の庵室では誰一人膝を突くも

のもなければ、大きな聲で懺悔するものもなかつた。従つて、フォードル・パーヴロキッチはそんなことを目撃する筈は全然なく、ただうろ覚えの古い風説や譚話を種に喋り出しただけの話である。しかしこの愚劣な話を持ち出すと同時に、うっかり馬鹿なことを口外したなど気がついたので、自分の言つたのは決して馬鹿げたことでないといふことを聴き手に、といふよりは寧ろ自分自身に早速、證據だてようと思つたのである。彼は自分でもこの先き一語を加へる毎に、既に、口を迂らせてしまつた愚かな言葉に、なほ一層愚かしさが加はつて行くばかりだ、といふことをよく承知してゐたけれど、もう自分で自分を制することができず、まるで急坂をくだるやうに突進してしまつたのである。

「何といふ穢らはしいことだ！」とミウソフが叫んだ。

「お赦し下さい。」と突然、院長が言つた。「古へからの言葉に『人々われにさまざまなる言葉を浴せて、遂には聞くに堪へざる穢らはしきことすらも口にす。われかかる言葉をも忍びて聞く、これキリストの醫術にして、わが傲れる魂を矯めんがために、おくられたるものなればなり。』とあります。それ故わたくしどもも、この上なく貴いお客人たるあなたに謹んでお禮を申し上げます。」そして彼は腰を深く屈めてフォードル・パーヴロキッチに會禮した。

「ちえつ、ちえつ、ちえつ！ 偽善と紋切型だ！ 紋切型の文句と所作だ！ 古臭い嘘つばちと頭を地べたにくつつけるお辭儀の繁文縟禮だ！ そんなお辭儀は先刻承知の助だよ！ 『唇に接吻、胸にし首』とシルレルの『群盜』の中にもありませぬ。なあ神父さん達、わしは胡麻化しが嫌ひで、眞實が欲しいんでさ！ だが、眞實は味の中にはありません。それはもうわしが言明した通りですよ！ 坊さ

ま方、何だつてあんた方は精進をしておいでなさる？ どうしてそんなことの褒美に天国へ行けると思つておいでなさる？ ほんとにそんな褒美が貰へるのなら、わしだつて精進をしますぜ！ ねえ、お偉いお坊さん、お寺に閉ぢ籠つて人の焼いた麵を食へながら、天上の報いを待つてゐるより、世の中へ乗り出して徳を行つて、社會に貢献されたらどうですか——しかし、こいつは少々骨ですよ。院長様、わしでもなかなか巧いことを言ひませうがな。一體ここにはどんな御馳走があるんだらう？」と彼は食卓へ近寄つた。「ファクトリヤの古いポートワインに、エリセーフ兄弟商會の蜂蜜か……これはどうもお坊さん方としたことが！ こいつは味、どころの騒ぎぢやない。酒の壘をしたま並べましたな、へ、へ、へ！ 一體かういふものは誰がここへ持つて來たのだね？ これは勤勉な露西亞の百姓が胼胝だらけの手で稼いだ一哥二哥の金を、家族や國家の入用を後廻しにして、ここへ持つて來たんでさ！ ほんとにお偉い方丈様、あなた達は人民の生血を吸つておいでなさるのだ！」

「それはあまりといへば亂暴な言ひ草です。」とヨシフ神父が言つた。パイーシイ神父は強情に押し黙つてゐた。ミウソフはばつと部屋を駆け出した。それについてカルガーノフも飛び出した。

「ぢやあ、お坊様がた、わしもミウソフさんの後を追つて行きますよ！ もう二度とここへは來ませぬ、膝をついて頼まれたつて來ることぢやありません。わしが千留寄進したもんだから、それであな方はまた目を皿にして待つてなすつたのがせう、へ、へ、へ！ なんの、もう決して上げやしませんよ。わしは自分の過去の青年時代や、自分の受けたすべての侮辱に對して仇討ちをするんです！」と彼は憤怒の發作をよそほつて、拳で卓をどんと叩いた。「このちつぽけなお寺もわしの生涯にとつて

は意味深長な處だつた。この寺のためにわしはいろいろと苦しい涙を流した！ 女房の『悪かれた女』をわしに桶突かせたのもあんた方ぢや。七つの會議でわしを呪つて、近在を觸れまはしたのもあんた方ですぞ！ もう澤山だ、今は自由主義の時代だ、汽車と汽船の世の中だ。千留は愚か、百留も、百哥も、なんの、一哥だつてあんた方に上げるものか！』

また茲で斷つておくが、決してこの修道院が彼の生涯に特別な意味を持つたこともなければ、彼がそのために苦い涙を流したこともありはしないのである。しかし彼は自分で自分の作り涙にすっかり感動してしまつて、一瞬のあひだ自分でもそれを信じないばかりの氣持になつたのである。そればかりか感激の餘り泣き出しさうにさへなつた位だが、それと同時に、もうそろそろお神輿をあげる頃合だと感じた。修道院長はその意地の悪い出鱈目に頭を下げて、再び威壓するやうに言つた。

「また、かうも言つてあります。『汝の上に襲ひかかる凌辱をば努めて耐へ忍び、且つ汝を穢す者を憎むことなく、自らの心を迷はしむる勿れ。』われわれもこの教への通りにいたして暮ります。』

「ちえつ、ちえつ、ちえつ、ちんぶんかんな寝言とくだらん辯説だよ！ お坊さん方はお好きなことを言つてゐなされ、わしは御免を蒙ります。ところで、俸のアレクセイは父親の權利で、永久に引き取つてしまひますよ。さあイワン・フォードロキッチ、いやさわしの尊敬すべき俸や、わしの跡からついて來なよ！ フォン・ゾン、何もお前だつてこんなとこに居のこることはなからう！ さあ、今すぐ町のおれんとこへ來なよ。おれんちは面白いぞ！ ほんの一寸里そこそこだよ。精進油の代りに、粥カシヤを添へた仔豚を出すぜ。いつしよに飯を食はうよ。コニヤクも出すし、後から利久酒も出る。葡萄酒もあ

るぜ……。おいフォン・ゾン、折角の幸運を取り逃がさん様にしろよ！」

彼は喚きたてながら、手振り身振りをしながら駆け出した。丁度この刹那、彼の出て來た姿を認めて、ラキーチンがアリオーシャに指さしたのである。

「アレクセイ！」と、彼はわが子の姿を見つけると、遠くから聲をかけた。「今日すぐにうちへ歸つちまふんだぞ、枕も蒲團も引つ擔いで來るんだ。ここにお前の匂ひがしても承知せんぞ。」

アリオーシャは黙つてまじまじとこの光景を眺めながら、釘づけにされたやうに突つ立つてゐた。フォードル・パーヴロキッチはその間に馬車へ乗りこんでゐた。それに續いて、別れのためにアリオーシヤの方を振り向きもしないで、イワン・フォードロキッチが無言のまま、むつとりして馬車へ乗らうとしてゐた。しかし茲で、宛もこの挿話エピソードの不足を補ふかのやうに、滑稽な殆んどあり得べからざる一幕が演じられた。ほかでもない、不意に馬車の踏段の傍へ地主のマクシーモフが現はれたのである。彼は遅れまいとして、息を切らせながら駆けつけたのだ。ラキーチンとアリオーシヤは彼が走つて來る様子を目撃した。彼は恐ろしく取り急いで、まだイワン・フォードロキッチの左足が載つかつてゐた踏段へ、もう我慢しきれないで片足かけると、車臺につかまりながら馬車の中へ飛び込もうとした。

「わたくしも、わたくしも御一緒に！」と、小刻みな嬉しさうな笑ひ聲をたてて、恐悅らしい色を顔に浮かべながら、どんなことでもやつてのけさうな意氣ごみで、潜りこまうとしながら彼は叫んだ。

「わたくしも、お連れになつて！」

「さうら、わしの言はんこつちやないて。」とフォードル・パーヴロキッチは有頂天になつて叫んだ。

「こいつはフォン・ゾンだ！ こいつこそ墓場から生き返つて来た正真正銘のフォン・ゾンだ！ だが、お前どうしてあそこを脱け出て来たい？ どんなフォン・ゾン式を發揮して、うまうまお食事お食事をすつばかりして来たんだい？ するぶん鐵面皮でなくちやできない藝當だぜ！ わしの面も千枚張りだが、お主の面の皮にも驚くぜ！ 飛び上がれ、飛び上がれ、早くさ！ ワーニャ、この男を乗せてやれよ、賑か賑かでいいぞ。どこか足もとへでも坐らせてやらう。いいだらう、フォン・ゾン？ それとも馭者といつしよに馭者臺へ乗つけるかな？……フォン・ゾン、馭者臺へ飛び上がれよ！」

しかし、もう座席に坐つてゐたイワン・フォードロキッチが突然、黙つたまま、力任せに、どんとマクシーモフの胸を突き退けた。で、こちらは一間あまりも後ろへ跳ね飛ばされた。彼が倒れなかつたのは、ほんの偶然である。

「やれ！」と、イワン・フォードロキッチは馭者に向かつて腹立たしげに叫んだ。

「これ、お前どうしたんだ？ どうしたんだよ？ 何だつてあいつをあんな目に合せるんだ？」さういつて、フォードル・パーヴロキッチは體を起こしたが、馬車はもう動き出してゐた。イワンは何の答へもしなかつた。

「そうれ、見ろやい！」と、一足ばかり黙つてゐてから、息子に流し目をくれながら、フォードル・パーヴロキッチがまた言つた。「お前は自分でこの修道院の會合をもくろんで、自分で煽り立てて賛成しておきながら、今更何をそんなにぶりぶりしてゐるんだい？」

「もう馬鹿なことを騒ぐのは深山です、せめて今のうちでも少し休んだらどうです。」とイワン・フォ

ードロキッチは容赦なく極めつけた。

フォードル・パーヴロキッチはまた二分間ばかり黙りこんでゐた。

「今コニャクを飲んだらいいんだがなあ。」と彼は鹿爪らしく言つた。が、イワン・フォードロキッチは返事をしなかつた。

「歸つたらお前も一杯やるさ。」

イワン・フォードロキッチはやはり黙つてゐた。

フォードル・パーヴロキッチはまた二分ばかり待つてから、

「だがアリオシカは何と言つても寺から引き戻すよ、お前さんにはさぞ面白くないことだらうがね、最も尊敬すべきカルル・フォン・モールさん。」

イワン・フォードロキッチは小馬鹿にしたやうにひよいと肩を竦めると、外方を向いて、街道を眺めにかかつた。それからはずつと、家へ歸るまで言葉を交はさなかつた。

第三篇

淫蕩な人たち

I

従僕の部屋にて

フォードル・パーヴロキッチ・カラマゾフの家は町の中心からかなり隔たつてはゐたが、さうかといつて、まるつきり町はづれといふ譯でもなかつた。それは極めて古い家ではあつたが、外觀はなかなか氣持がよかつた。鼠いろに塗り上げた、中二階つきの平家建て、赤い鐵板の屋根がついてゐた。まだかなり永く保ちさうで、手廣く居心地よくできてゐた。いろんな物置だの納戸だの、思ひもかけない階段だのが澤山あつた。鼠もかなりゐたが、フォードル・パーヴロキッチは大してそれには腹を立てなかつた。『まあ何にしても、夜分ひとりの時さびしくなくていいわい。』實際、彼は夜分は召使を傍屋へ下げて、一晩ちゆう母家にただひとり閉ぢこもるのが習慣であつた。その傍屋は邸内に立つてゐて、廣々

とした頑丈な造りであつたから、母家の方にも臺所はあつたのだけれど、フォードル・パーヴロキッチはここで煮炊きをさせることに決めてゐた。彼は臺所の臭ひが嫌ひなので、夏も冬も食べ物は中庭を通つて運ばせてゐた。大體この家は大家族むきに建てられてゐたから、奥の者も召使も、今の五倍は優に容れることができた。しかしこの物語の當時、この家にはフォードル・パトヴロキッチとイワン・フォードロキッチ、それに傍屋の従僕部屋に僅か三人の召使が住んでゐるに過ぎなかつた。その三人といふのは、老僕グリゴリイ、その妻の老婆マルファ、それにスメルチャコフといふまだ若い下男であつた。さて、この三人の召使については、もう少し詳しく説明しなければならぬ。しかし、老僕グリゴリイ・ワシリエキッチ・クツーゾフのことは、もうかなり話してある。これは、もし何かの原因で（時々それは恐ろしく非理論的なものであつたが）、一旦それを間違ひのない眞理だと思ひこんだ曉には、執拗くその一點に向かつて一直線に驀進するといつた頑固一點張りの人間であつた。概して正直で清廉潔白な人物であつた。妻のマルファ・イグナーチエヴナは生涯、良人の意志の前には絶對的に服従して來たけれど、よくいろんなことを言つてうるさく良人に附纏ふことがあつた。例へば農奴解放の直ぐ後などには、フォードル・パーヴロキッチの許を去つてモスクワへでも赴き、そこで何か小商賣を始めたらと、切りに口説いたものである（二人の懐ろには幾らか小金が溜つてゐたので）。しかしグリゴリイはいきなり斷乎として、女は馬鹿ばかりぬかす、『女ちふものは、どいつもこいつも不正直なもんだでな。けんど以前の御主人の家を出るちふ法はないぞ、それがたとへどんな人であつたにしても、それがけふ日こちとちの義務といふもんだ、』と言ひ渡した。

「義務ちふのはどんなことだか知つとるか？」と、彼はマルファに向かつて言った。

「義務ちふことは知つとるだよ、グリゴリー・ワシリーエキツチ。だけど、どういふ譯でわしらがここに残つてをるちうことが義務なもんか、それが一向わかりましねえだよ。」とマルファが強情に答へた。

「分からにや分からんでええだが、それはさうなくちや叶はねえだ。もうこの先き口は利くまいぞ」

そして結局、二人はこの家を去らなかつた。そこでフォードル・パーヴロキツチは夫婦に對して僅かな給金を定めて、それをきちんきちんと支拂つてゐた。それにグリゴリーは、自分が主人に對して、異論のない或る勢力をもつてゐることを知つてゐた。そして彼がかう思つたのは、決して思ひ違ひではなかつた。狡猾で片意地な道化者のフォードル・パーヴロキツチは、彼自身の言ひ草のやうに「世の中のある種の事柄に對しては」なかなか圖ぶとい氣性を持つてゐたけれど、或る「別種な世の中の事柄」に對しては自分でも驚くほど、から意氣地がなかつた。それがどんな事柄であるかは、自身でも知つてゐて、いろいろなことに恐れを抱いてゐたのである。世の中には、ある種の事柄に對して、十分警戒しなければならぬ場合がある、そんな時身邊に誰か忠實な人間がゐなくては心細かつたが、グリゴリーは忠實といふ點では無類な人間であつた。フォードル・パーヴロキツチはこれまで世の中を渡る間にも、幾度となく擲られさうな、しかも小つびどく擲られさうな場合に打つかつたこともよくあつたが、さういふ時には、いつもグリゴリーが彼を救ひ出した。尤も、その後で毎回お説教をして聞かせるのが常であつたが、しかしフォードル・パーヴロキツチも、打つたり擲つたりされるだけなら、さして怖ろしく

もなかつた筈だが、往々、極端な、時には寧ろ複雑微妙な場合さへよくあつたので、フォードル・パーヴロキツチは誰か忠實な人間を自分の身邊に置きたいといふただならぬ要求を、突然不思議にも瞬間的に心に感ずるのであつた。しかも彼自身でさへ、その理由を明かにすることはできなかつた。それは殆んど病的といつてもいい状態であつた。放埒極まりなく、しかもその淫慾のためには屢々、害悪な蟲けらのやうに残忍非道なことをして退けるフォードル・パーヴロキツチが、時々、酔つ拂つた折などに、不意と心の中に精神的の恐怖と、非道德的な震駭を感じるのであつたが、それは殆んど生理的に彼の魂に反應した。「そんな時わしは、魂が咽喉の邊で慄へてをるやうな氣持だ。」彼は時にこんなことを言ひ言ひした。かういふ瞬間に彼は、自分に信服した、しつかりした男が自分の身近に、同じ部屋の中ではないけれども、せめて傍屋はなの方にでもゐて欲しかつた。その男は、決して自分のやうな道樂者ではないが、目のあたりに行はれるすべての不行跡を見、且つその裏の裏まで知り盡してゐながら、忠順の心から一切を見のがして反抗しない、然し何よりも大切な點は、決して非難をしないことで、現世のことにしろ來世のことにしろ、何ら脅かすやうなことを言はないが、すはといふ場合には、自分を護つてくれる——誰から？ 誰からかは分らないけれど、しかし、危険な恐ろしい人間からである。つまり、昔なじみの親しい「自分以外の」人間が、是非ゐなくてはならない、心の疼むやうな時にその男を呼び寄せる、それもただじつとその顔を見つめて、氣が向いたら何か一つ二つ、それも全く縁のない無駄口を叩き合ふくらゐが關の山で、もし相手が平氣な顔をして別に腹も立てないやうなら、それで何となく心が休まるし、もし腹を立てれば、よけい心が滅入らうといふものである。こんなこともあつた。(尤もそれは

ごくたまさかのことだが、フォードル・パーヴロキッチがそれも夜中に傍屋へ行つて、グリゴリイを叩き起こすと、ちよつとでいいから来てくれといふ。こちらが起きて行つて見ると、フォードル・パーヴロキッチは思ひきり下らない話をちよつとして、すぐに退らしてしまふ。どうかすると別れ際に、冷かしたり冗談口を叩いたりすることもある。そして御當人はべつと唾を吐いて横になる。と、もう聖人のやうな睡りに落ちてしまふのである。アリオーシャが歸つて来た時も、ちよつとこれに似寄つたことがフォードル・パーヴロキッチの心に起こつた。アリオーシャは『いつしよに住んで、何もかも見てをりながら、ちよつとも咎め立てをしない』といふ點で、彼の『心を突き刺した』のである。剩へ、アリオーシャは、父にとつてつひぞこれまで憶えのないものを齎した。それは、この老父に對して少しも輕蔑の念を抱かないばかりか、反對に、それほどの價値もない父にいつも優しく、しかも全く自然で素直な愛慕の情を寄せるのであつた。これまで家庭といふものを持たず、ただ『邪淫』のみを愛して来た、老放蕩兒にとつて、かういふことはすべて思ひもかけぬ賜物であつた。アリオーシャが去つて行つた後、彼は今まで理解しようとも思はなかつたあるものを理解した、と肚の中で告白した。

グリゴリイがフォードルの先妻、つまり長男ドミトリイ・フォードロキッチの母アデライダ・イワノヴナを憎み、その反對に後妻のソフィヤ・イワノヴナ、即ち『悪かれた女』を、自分の當の主人に楯突いてまで庇ひだして、斷じて彼女のことを悪く言つたり輕はずみな陰口をきく者を、容赦しなかつたといふことは、既にこの物語の初めに述べておいた。この運命な女に對する彼の同情は、一種神聖なものやうになつて、二十年後の今でも、誰の口から出たにせよ、ちよつとでも彼女のことは悪

くいふやうな當てこすりは我慢がたらず、ナクさまその無禮者をとつちめるのであつた。外徳から言ふと、グリゴリイは冷酷嚴厲な人物で、口數も少く、物をいつても鹿爪らしく輕はずみなところの少しもない男であつた。彼が素直で温順な自分の妻を愛してゐるかどうかはちよつと見ただけでは、はつきりしたこともいへなかつたが、しかし實際彼は愛してゐたし、いふまでもなく妻もそれを承知してゐた。このマルフ・イグナーチエヴナは決して馬鹿な女でなかつたばかりか、どうかすると却つて亭主より精巧な女であつた。少くとも、實生活の事柄にかけては良人より遙かに分別があつた。が、それでゐて彼女は夫婦になつたそもその初めから、何の不平も言はず黙々としてグリゴリイに心服し、その精神的に卓越した點で彼を絶對に尊敬してゐた。變つてゐるのは、この夫婦が生涯、きはめて必要な當面の事柄以外には、極々まれにしか口をきかなかつたことである。物々しくどつしり構へたグリゴリイは一切自分の仕事や氣配りをいつも一人で考へてゐたので、マルフ・イグナーチエヴナも、良人が自分の助言など少しも必要としてゐないことを遠の昔から知つてゐた。彼女は良人が自分の無口の價値を認めて、そのため自分を賢いものと見てくれるのだと悟つてゐた。グリゴリイは決して妻を折檻したことがなかつた。尤もたつた一度、それもほんのちよつと打つたことはある。フォードル・パーヴロキッチがアデライダ・イワノヴナと結婚したその年のこと、或る時、當時まだ農奴であつた村の娘や女房どもが、田舎の地主邸へ呼び集められて歌つたり踊つたりしたことがある。『草原で』の踊が始まつた時、當時まだ若かつたマルフ・イグナーチエヴナが突然、合唱隊の前へ跳び出して、特別な身振りで『露西亞踊』を踊つた。それは女房どものやうな田舎臭いものと違つて、彼女が富裕なミウソフ家

で女中をしてゐた頃、モスクワから招聘された舞踏の師匠が踊の振付をした同家の家庭劇場に、彼女もいつしよに踊つたその踊り方であつた。グリゴリイは妻の踊を黙つて見てゐたが、一時間の後、自分の小屋へ戻ると、彼女の髪を掴んで少し引き廻して彼女を懲しめた。しかし折檻はその時限りで、生涯二度と繰り返さなかつた。それに、マルファ・イグナーチエヴナも、それきりふつとりと踊を絶つてしまつた。

二人の間には子供が授からなかつた。尤も赤ん坊が一人生まれたが、それもすぐ死んでしまつた。グリゴリイは明らかに子供好きで、またそれを隠さうともしなかつた。つまりそれを口に出すのを恥かしがらなかつたのである。アデライード・イワーノヴナが出奔した時、彼は三つになつたばかりのドミトリイ・フョードロキッチを自分の手許へ引き取つて、殆んど一年の間その世話を焼き、自分で髪を梳かしてやつたり、鹽で行水を使つてやつたりした。ついでイワン・フョードロキッチとアリョーシヤの面倒を見た、そのお蔭で頬杖を一つ見舞はれたやうな始末だが、しかしこゝなことは皆、もう前に話して置いた。自分の子供が彼に悦ばしい希望を抱かせたのは、ただマルファ・イグナーチエヴナの懐妊の間だけであつた。生まれて見ると、その子は悲しみと恐れとをもつて彼の心を突き刺した。ほかでもない、その男の子は生まれつき指が六本あつたのである。これを見たグリゴリイは、すつかり落膽してしまつて、洗禮の日までむつとり黙り込んでゐたばかりでなく、口をきかないためにわざと庭へ出た。ちやうど春のこと、彼は三日の別ちゆう菜園敷をおこしてゐた。三日目に幼児に洗禮をうけさせることになつたが、それまでにはグリゴリイはもう何か心に思案を決めてゐた。僧たちも支度を整へ、客も集まり、

フョードル・パーヴロキッチまでが教父の資格でわざわざ顔を出してゐた家の中へはいり、彼は、子供には「てんで洗禮などしなくてもよい」といひ出した。——それも大きな聲で口敷をきいた譯ではなく、一語々々を用心しいしい押し出したやうなひ方で、ただそれと同時に、鈍い眼つきでじいつと僧の方を見つめただけであつた。

「それは又、どうした譯かな？」と僧は剽軽な驚き方をして問ひ返した。

「どうしてちやうて……あれは龍でござりますだ……」とグリゴリイは呟いた。

「どうして龍なんで……どんな龍かな？」

グリゴリイは暫く押し黙つてゐた。

「天道様のお手違ひが出来たのでござりますよ……」彼は不明瞭ではあつたが、しつかりした聲でかう呟いた。明らかにそれ以上、口敷をききたくない様子であつた。

人々は一気に附してしまつた。そして哀れな赤ん坊の洗禮は言ふまでもなくそのまま行はれた。グリゴリイは洗禮盤の傍で一心に祈りを捧げたけれど、嬰兒に對する自分の意見は變へなかつた。それかと言つて、別段邪魔をするでもなかつたが、この病弱な子供の生きてゐた二週間といふもの、殆んどそれを見向かうともしなかつたばかりか、目につくのさへ厭つて、大概は家を明けてゐたほどである。しかし二週間たつて、子供が驚口瘡のために死んだ時には、自分でその子を小さい棺に納めて、深い憂愁の面もちでじつとそれを眺めてゐた。そして、浅いささやかな墓穴に土をかぶせた時、彼は跪いて、土饅頭に額のつくほど禮拜するのであつた。その時以來、長年のあひだ、彼は一度も自分の赤ん坊のこ

とを口にしなかつた。マルファ・イグナーチエヴナも、彼の前では子供のことを思ひ出さないやうにした。そして誰かと自分の『赤ちゃん』の話をするやうなことがあると、その場にグリゴリイ・ワシーリエキツチが居合せなくても、囁き聲で話したものである。マルファの氣づいたところでは、その墓場の一件以來、彼は専ら『神信心』に凝り出し、大概ひとり黙々として、『殉教者傳』に読み耽つたが、その都度、大きな圓い銀縁の眼鏡をかけるのであつた。聲をあげて読むのはごく稀で、大齋期だいしやくきの際ときらものものであつた、約百記を好んで讀んだが、また何處からか『聖き父イサーク・シーリン』の箴言や教訓の寫しを手に入れて、辛抱よく長年のあひだ讀みつづけたが、それは殆んどまるつきり分からなかつた。しかし、分からないがために、こよなくその書物を尊び、かつ愛嗜したのかも知れない。最近になつて彼は、近所に信者があつたため、鞭打教の宗旨に傾倒し始めてかなり心を動かされたらしいが、その新しい信仰に改宗するほどの氣持にはなれなかつた。『神信心』の書物を耽讀したことから、彼の人相にはなほ更に大きな勿體らしさが加はつた。

恐らく、彼は神祕的な傾向を持つてゐたのかも知れぬ。ところで、六本指の嬰兒の出生とその死亡に引きつづいてまるでわざとのやうに、もう一つ奇怪な、思ひもよらぬ、突飛な事件が重なつて、彼自身の後日言つたやうに、彼の魂に『烙印』を捺したのである。それはかうである、ちやうど六本指の赤ん坊を葬つたその日のこと、マルファ・イグナーチエヴナがふと夜半に眼を醒ますと、生まれ落ちたばかりの嬰兒の泣き聲らしいものを耳に留めたのだ。彼女は愕然として良人を呼び起こした。こちらは耳を澄してゐたが、どうもこれに驚かぬつてゐるやうだ、しかも、『女らしいぞ』と言つた。彼は起き上が

つて着物を着た。それはかなり暖かい五月の夜であつた。上り段へ出て見ると、呻き聲は明らかに庭の方から聞こえて来る。しかし庭は夜になると屋敷の方から鏡をおろしてしまふ上に、ぐるりを高い堅固な塀で取り圍んであるから、中へはいれる口はない筈であつた。グリゴリイは家へとつて返すと、提燈を點して庭口の鍵を持つた。そして妻が、自分にはどうしても子供の泣き聲らしく聞こえる、きつと死んだ赤ん坊が自分を呼んで泣いてゐるのだと思ひこんで、ヒステリーのやうに怯えてゐるのには眼もくれず、黙つたまゝ庭へ出て行つた。茲で彼は明らかに、その聲は耳門みみかどから程近く、庭の中に立つてゐる湯殿の中なかから漏れて来るのであつて、疑ひもなく女の呻き聲だといふことを確めた。湯殿の戸を開けて中を覗いた時、彼はその光景の前に立ち竦んだ。いつも街をうるつき廻つて、リザエータ・スメルヂャシチャヤといふ渾名で町ぢゆう誰知らぬ者もない宗教狂女が、邸内の湯殿へはいり込んで、だつたいま赤ん坊を生み落としたばかりのところであつた。赤ん坊は女の傍に轉がつてをり、産婦は氣息奄々たる有様であつた。彼女は何ひとこと物を言はなかつたが、それは言ひたくても、もう口がきけないからであつた。しかしこの事件については特別に説明しなければならぬ……。

II